兒童分析と教育

精神分析

★第4卷・第4號　★　昭和11年7月・8月★

主要項目

詳細目次は卷頭に

T・I・P・A・　VERLAG

T.I.P.A.

東京精神分析學研究所出版部

待望の科學的新養生訓、遂に完成！

性的に變態なる者は爾餘一切の生活に於いて變態である。まづ性生活と戀愛生活とを分析合理化せよ。然らざれば其の人は遂に現實生活の敗北者たらん。

大槻憲二著

戀愛性慾の心理とその分析處置法

菊判三百餘頁。布裝、灰色主調白文字高雅。挿圖豐富。函入美本。

（定價 金二圓二十錢 送料 十二錢）

結論 **戀愛性慾と本能との關係** （一、本書の目的と範圍。二、精神分析本能觀とその發達。三、戀愛性慾心理の推移。）

第一章 **戀愛生活の心理** （一、自己戀愛の樣相。二、對象戀愛の樣相。三、救助願望の心理とその根源。四、女性の戀愛心理。五、戀愛に於ける好きな型。）

第二章 **性慾生活の心理** （一、性慾心理の根柢。二、思春期以前の性感。三、幼兒性感論の生物學的吟味。四、男女青年の性心理。五、食慾と性慾との關係。）

第三章 **變態性慾の心理** （一、變態性慾心理の種々相。二、ヒステリーの性心理。三、母性愛と妖婦愛。四、情死の性心理的意義。）

第四章 **同性愛の心理** （一、同性愛と異性愛。二、婦人の同性愛。三、男子の同性愛。四、同性愛に對する道德的判斷の可否。五、子供の同性愛とその取扱方。）

第五章 **家庭生活と性慾生活** （一、夫婦生活に於ける性的關係と道德的關係と。二、或る夫婦生活の分析觀察。三、嫁姑問題のリビドー運命史的意義。四、近親間の性的定着。五家庭内に於ける女中の愛慾問題。）

第六章 **戀愛性慾生活の統制及び處置** （一、戀愛性慾生活に於ける身心の關係。二、四種の處置法。）

本郷區動坂町三二七・（振替）東京七八一七番

東京精神分析學研究所出版部

本研究所出版書及び取次書一覽表

フロイド精神分析學全集……………(送料各十二錢)春　陽　堂

第一卷・夢の註釋 (1圓50錢)	第二卷・日常生活 (1圓70錢)
第三卷・社會宗教文明 (1圓80錢)	第四卷・快不快原則 (1圓50錢)
第五卷・性慾論 (1圓70錢)	第六卷・藝術論 (1圓90錢)
第七卷・トーテム (1圓80錢)	第八卷・療法論 (1圓90錢)
第九卷・戀愛論 (1圓80錢)	第十卷・精神分析總論 (2圓)

精神分析合本　第一卷(昭和八年度)(上下各册とも賣切れ)……當出版部

精神分析合本　第二卷(昭和九年度)(上下各册2圓50錢 送料共)‥當出版部

精神分析合本　第三卷(昭和十年度)(全一册3圓 送料15錢)……當出版部

文藝と心理分析 長谷川誠也著(2圓70錢 送料12錢)‥‥春陽堂

文藝思潮論 長谷川誠也著(2圓 送料共)‥‥博文館

精神分析概論 大槻憲二著(80錢 送料6錢)‥‥當出版部

理想の家族(マンスフィールド短篇集)
岩倉具榮譯(1圓80錢 送料共)‥‥當出版部

モリス書誌 キリアム・モリス研究會編(40錢 送料2錢)‥‥丸善株式會社

精神分析雜稿 大槻憲二著(2圓 送料10錢)‥‥岡倉書房

精神分析讀本 大槻憲二著(2圓 送料10錢)‥‥岡倉書房

精神分析・社會圓滿生活法
大槻憲二著(1圓 送料6錢)‥‥人生創造社

ドストイェフスキーの精神分析
平塚義角譯(1圓 送料6錢)‥‥當出版部

戀愛性慾の心理とその分析處置法
大槻憲二著(2圓20錢 送料12錢)‥‥當出版部

★春陽堂出版書は研究所宛申込の方に限り一割引。
★雜誌は創刊號及び第一卷第五號以外は各號單册殘本多少あり。一部定價50錢(送料共)

本鄕區動坂町三二七
振替・東京七八八一七
東京精神分析學研究所出版部

兒童分析と教育・內容目次

〈精神分析〉第四巻・第四號

「ドストイエフスキーの精神分析」出版記念會

後列左より

士屋喜一　小林一　倉橋久雄　廣澤輝雄　清水清輔　山田力藏　大槻岐美　羽島佑　藤原肇　岩倉具榮　片田江金雄　大村弘毅　堀口申作　中野靜　富田義介　森傳郎　植村定太郎　佐藤義人　村越武雄

前列左より

堀越高一　黒田隆次　若月作市　河竹繁俊　日高只一　平塚義角　長谷川誠也　伊[illegible]達豐　大槻憲二　長[illegible]崎文二　印南高一　大山功　國分保

《精神分析》第四巻 第四號 巻頭言

★親不孝にもなる筈だ！

次のやうないぢらしい子供の作文を見たことがある。

「僕は大きくなつたら、兵隊になつて、天皇陛下につくしたいと思ひます。それには今からよく勉强しなければなりません。そればかりではなく、父母のいひつけをまもらなければ大將や元帥になれません。」

父母の命令さへ守つてをれば大將元帥になれると思つてゐるやうだが、かう云ふ教育の仕方は誰がするのであらうか。某社の少年雜誌か、それとも學校教育か。ところが、世の大抵の親くらゐ得手勝手な、氣まぐれな、子供の心持を理解しないものはないのだから、さうしてその氣まぐれと出鱈目と得手勝手とに調子を合せて行かなければ、人生の唯一の目的たる大將元帥になれないと云ふのだから、子供たるものどんなに心を苦しめてゐることであらうか。併し世の父兄や先生がたは子供の惱みなどは、殆ど御存知ないやうである。子供の心持がよく分りたいなら、親がまづ分析されなければならない。親の願望とコムプレクスとを押賣される子供のつらさは一通りでなからう。子供は親不孝にもなる筈だ。窮鼠却つて猫を嚙んでゐるのだ。決して始めから嚙む氣はないのだ。

精神分析學と子供の教育

――クリクトン・ミラーの新説から――

霜田靜志

一

兒童の臨床的研究と兒童相談とを司るクリニック（診療所）の發生は、最近の特色の一つであるが、此の種の施設の一つであるロンドンのタヴィストック・クリニック Tavistock Clinic の所長なるクリクトン・ミラー博士 H. Crichton Miller, M. A., M. D. の兒童研究は注目に値するものを持つて居る。博士は此のクリニックに於ける數々の臨床的研究に基き『新心理學と教師』、『新心理學と兩親』、『新心理學と牧師』なる三部作を發表して居るが、これ等はその孰れもが、子供の教育に關心を持つ吾々にとつて甚だ興味深い著作である。中でも『新心理學と兩親』に私は殊更深く心惹かれた。

英國の心理學界は精神分析學を以て「新心理學」と呼ぶ。卽ち、それは意識現象だけを取扱ふ從來の心理學に對して無意識現象を中心にして人間の心理を見直す新しい心理學であるといふ意味に於て、斯く呼ぶのである。それ故にミラーの之等の著作は、精神分析學からの子供の教育とを考察する上に、よき資料の一つであると言つてよい。

精神分析學が教育に對して如何なる關係交渉を持つか、精神分析學乃至精神分析法が教育に如何に利用せらるべきかといふ點に就いては、今日までの所では其の研究も僅かに端緖を得たに過ぎない狀態であつて、まだ〳〵今後の開

拓に俟たなければならぬ部面を多分に持つて居る。それ故に今日に於ては、此の方面の研究のためには、その資料となるべきものを紹介し、之を正しく考察批判して行く必要がある。此處に私はその一つとして、ミラーの所説を主として『新心理學と兩親』によつて紹介し、私自身の解釋並に意見を加へて、子供の教育の立場からの考察を進めて行つて見ようと思ふ。

二

最近に於ける教育現象の一つとして、兩親の教育者としての機能が非常に重要視せられるやうになつて來た事は注目に値する。從來は教育の仕事は何もかも學校に任せて置きさへすればそれでよいと考へられて居た。併し乍ら實際に於ては、それで居て必ずしも子供がよくならない。殊に人格教育の方面に於て然りである。學校教育は學問技藝の教授の方面はどうにかやつて吳れるが、大事な人格の養成に就いては、甚だ無力である事を數々の實例によつて示して居る。近年夥しく增加しつゝある不良兒の發生に對して、學校教育が之を阻止する何の力もない事は、日々に暴露せられつゝある。それ故に子供の人格の形成については、家庭が大きな責任を負はなければならぬものであり、不良兒の發生を未然に防ぐ所のものは兩親の力でなければならぬ事が明かになつて來た。

私は最近此の事を痛切に感じて居る折柄とてミラーが此の書の卷頭に於て、子供の神經症の大部分が幼時に於ける兩親の誤まれる取扱ひに原因する事を明かにし、兩親の教育的使命を次の如く論じて居る事を、甚だ愉快に感じた。「親たることは人世に於ける最大最善のものである事を認めなければならない。これは決して單なる言葉の綾ではない。甚だ深き眞實である。人が社會に於て自己の存在を明かにし、社會の爲めに貢獻する事も大事な仕事には相違ないが、結局は親たる事が主で、社會に盡す方面は補助的な仕事であるに過ぎない。そして此の親たる仕事に於ては、父親の仕事は比較的小さなもので、母親の仕事がより以上の重要性を持つのである。新しき世界は新しき組織や經濟や政治から來るものでもなければ、又教育から來るものでもない。何となれば多くの教師が語る如く、教師は常に兩

親により多くを期待して居るからである。それ故に新しき世界は新しき兩親によつてのみ持ち來される。何となれば新しき親は次の時代者の親だからである。それ故に子供に對しては、父が醫者だから醫者にする、祖父が牧師だつたから牧師にするといふのでなしに、父よりも祖父よりも立派な親とならしむる大きな目的に向つて進むのでなければならない。」

以上の見地からミラー博士は兩親の教育者としての重要性を主張して居るが、更に進んで今日の兩親が子供を教育する上に於て、失敗して居る點を次の四項に亘つて述べて居る。

（一）父はわが子が自分の如くなり得ると信ずる事が第一の誤まりである。子供は母方の祖父の血を受けて居るかも知れない。子供の教育をしんこ細工の如く考へるのは誤まりである。球根をいけて花咲くを待つが如き態度こそ必要である。

（二）此處に於て誤まれる保護が生れる。大人は自己の力を子供の上に振ふ事を（無意識的に）喜んで居る。子供の片言を眞似て言語の發達を阻害し、膝に抱き上げては自ら立つ事を妨げて居る。親達は子供が子供自身の力によつて發達する事を認め得ないのである。

（三）更に又吾々親達は、子供の安全の爲めにと稱して、子供が何かしようとする度毎にやめさしてしまふ。木に登ることは危險だと言つて止め、救護事業に加はると言へば惡疾が傳染すると言つて思ひ止まらせる。戰場に子供を送り出した母は、一日として心安らかな日はないとかき口說く。これでは子供が立派なものになれよう筈がない。

（四）最後に親としての最も大きな罪は、子供と自己實現との間に立ちふさがつて、其の心理的自由を妨げることである。親は親の意志によつて子供の總てを支配して行かうとし、子供自身に道を發見する事を許さない。子供を損ふ所以である。

三

さてそこで子供を理解し、子供の心理を正しく見て行くことが必要であるが、これが爲めには新心理學としての精神分析學に道を求めなければならない。此の立場からミラーは此の新しき科學を、教育の立場から如何に見るべきかを明かにして居る。以下その大要を紹介しよう。

新心理學はフロイド及びユングによつて開かれたものであつて、人間の心理的生活に對する見方を根本的に變へたものである。そしてそれは恰もガリレオやダーヴィンの偉業に比敵すべきものである。一言にして言へば新心理學の大發見は無意識的動機の發見である。而して在來の心理學に於ても認められて居る所の心的葛藤なるものは、抑壓によつて無意識界にまで追ひやられたものであり、そこには故意の忘却がある。夢は卽ち吾々の意識に於て認める事を欲せずして抑壓せられ、無意識界にまで追ひやられたものゝ再生である。

其の取扱ひのシステムは精神分析として知られて居るものであり、夢を通じて無意識の動機を分析し、各自に其の由つて來る所を明かにせしめる。多くの神經症の如きは生理的な原因から來るものでなしに、無意識に於ける葛藤から來て居る事を斯學は明かにして居るのである。

此の學派を開いたフロイドは、斯くの如き原因から斯くの如き結果が生れるといふ、徹底的な決定論（デターミニズム）を基礎として學說を立てゝ居る。フロイドの心理的原則は、吾々の心が內外の影響――氣質、本能、環境等――によつて動くものなる事を明かにして居る。事實、フロイドは精神界に徹底的決定論を導入せる最初の心理學者であると言つてよい。

しかし乍らミラーの立場（哲學者、理想主義的）からすれば、決定論（科學的、客觀主義）はどうでもよいものであつて、此の點では寧ろチューリヒ派ユングの意志自由說に意義を認めてゐる。ユングは人間の自由意志を認めて夢の如き現はれをも單なる客觀的狀態と見ずして、精神的刺戟と見るのである。ウィーン派と違つて、チューリヒ派は「人間の自然性の幻影」を認める事を恥としない。そして人間生活及び性格に於て、これが最も價値ある中心的事實であるとして居る。

ミラーはフロイド及びユングの思想を斯く解釋し、人間生活に於て認め得べき哲理は、理想主義哲學唯一つである

と言つて居る。此の立場から彼はユングに負ふ所多きを述べ、新心理學は教育問題を魔術的に解決するものでもなければ、子供の心理に對して光を投じたものでもない。それは子供の心理を見る吾々の視角を變へさせたのである。光を與へられたのは子供の心でなくて吾々の心である、といふ事を述べて居る。

子供の教育は子供を引き上げて行く仕事である。此の立場から理想主義哲學の立場を採られる事は當然のことゝ考へられる。ミラーは此の立場から精神分析學を教育に採用し、之を役立てようと考へて居るのである。

四

一般に生半可な精神分析の知識は危險であると言はれて居る。しかし乍ら精神分析の經驗をすること、生活に對して精神分析的な見方をする事は別である。自分の生活を無意識の心理から見得ることによつて、親達は大きな利益を得、之によつて子供を正しく見る事も出來る。ミラーは此の立場から精神分析學の教育への利用の態度を明かにして居る。此の點は私も同感であつて、私自身の今日までの態度もこれと全く方向を一にするものであつた事を、今更の如く感ずるものである。

さて其處で、精神分析的な見方からミラーは子供の教育の實質的方面が如何に有るべきを望んで居るか。之についての彼の見解を見て行くと次の如くである。

子供が誕生から成年への發達の努力は、結局自己實現への努力であると言ふことが出來る。而して之を進めるものは子供自身の持つ完全への促進力であり、これは生物學的な基本能力である。勿論此の促進力は倫理的、社會的、宗教的の理想によつて深められる。謂はゞ、此の促進力は子供が究極に於ては親とならうとする無意識的目的を有する事を示すものと言つてよい。

斯くの如く子供は完全へ到達せんとする促進力を持つて居るのであるから、これを調和的に發達せしむる事によつて、子供を立派なものとする事が出來るのである。然るに子供の有する此の發達力に對して、權威と現實とがぶつか

り、動もすればその發達を阻止する事になる。

先づ第一の障壁である所の權威について見るに、母達も敎師達も屢々之を濫用する事によつて子供を損つて居る。子供は被暗示性を持つて居る。吾々の任務は之を次第に調和的な個別的判斷にまで變へて行かねばならぬのであるが、これに對して權威を以て臨み、すべてを強く押しつけて行かうとすると、其處に當然二つの樣相を現出する。若しも子供が弱い心の持主であつたなら、權威に對して益々屈從的になり、被暗示性を一層強める。ところが之に反して子供が強い心の持主であるとすると、子供は權威に屈從することを快しとせず、斷然之に反逆する。嚴格な道德的な家庭から屢々不良兒を出すのは此の理に基くものである。

第二の障壁となる現實は如何であるか。之を強く押しつけられると、子供の有する空想の創作性は萎縮し、現實を離れた逃避的空想の世界に這入つて行く。卽ち空想性は現實逃避の不自然なものになつて行くのである。

一體空想には三つの種類がある。その一は補償的空想であつて、現實生活の不滿を空想によつて滿足させるのである。弱い子が強い子を夢み、醜い子供が美しい女の子になる事を空想するの類である。その二は靈感的空想であつてこれは斯くありたいといふ理想を夢みるもの、愛國主義の如きものがこれである。その三は創作的空想であつて、詩とか美術とか、發明發見とかいふやうなものは、此の種類に屬する。

子供の空想は發達さすべきものであるとは言へ、何でもかでも空想でありさへすれば發達せしむべしといふのではない。それが社會的に價値があるか、個人的に自己の救ひとなるかでなければならない。親達は此の點を良く見て行つて、價値のある空想へと發展せしむべきである。然るに餘りに强き、餘りに困難の多い現實を與へると、それが爲めに子供の空想を益々病的なものとしてしまふ。これは甚だ恐るべき事である。

權威や現實が惡いのではない。權威や現實を子供に與へる與へ方が惡いのである。權威や現實を子供の消化し得る程度に於いて與へればよいのである。

五

以上はミラーの分析教育の意見としての根幹を爲す部分を紹介したものであるが、此の考へ方はエー・エス・ニイルの徹底的な自由教育と軌を一にせるものと言つてよい。ニイルは權威と現實によつて歪められたる多くの問題の子供を、之に自由を與へ之を解放する事によつて、驚くべき教育的效果を擧げて居る。

要するに精神分析學を子供の教育に導入し來る事は、子供に對する考へ方を變へて行く事であり、子供自身の有する力を、最も自然の狀態に調和的に發達せしむる事である。此處に於てはじめて精神分析學は子供の教育の上に效果的な大きな力となるであらう。（此項完）

教育學としての精神分析學

大槻憲二

一、分析教育學の範圍

一體、教育とは何であるか。成人が他の人間を（多くの場合、兒童を）計畫的に變更せんとする努力である、と答へることが、まづ許されるとして置かう。ところで、變更と云ふが、如何に變更するのであらうか。この第二の質問に對しては、種々の答辯が期待せられる。普通に合理的な答辯としては、兒童は生れたまゝでは本能的（非社會的、沒道德的）存在であるから、これを社會的な、文明的な存在に變更して本人及び本人が所屬する社會の可能な限りの幸福に資せんとするものであると。が、も少し不合理的と我々に思はれる答辯はかく響いて來る。兒童をして高級の幸福實現能力を、あらゆる理想の實現力を持たしめ、他愛主義者たらしめ、かくして遂に人類全般を改善せしめんとするものであると。勿論、これはもし出來れば結構なことには相違ないが、かゝる目標は決して謙讓なものであるとは云へない。少くともそれは、哲學的な立場に卽しての教育の理想であつて、元來不完全な人間の能力の範圍內にあることかどうかの反省を超えてゐると云ふことだけは云ひ得るであらう。換言すれば、右は少くとも科學的な立場に卽しての教育の定義ではない。教育上の理想主義か沒理想主義かは、哲學主義か科學主義かは、永遠の大問題であらう。併し我々は分析學徒として科學的立場に立ち、事實の認識から出發しなければならないと思ふ。我々は自然科學に於けるの如く、まづ價値觀を離れて、ありのまゝの實相の探究から出發して行かうと思ふ。人間の精神生活が如何

なる法則に支配せられてゐるか、生物的な本能體が環境の影響に依つて如何なる變化を閲するものであるかを、まづ調べて見なければならない。始めから大目標を固定しておかないが、對象が如何なるものであり、如何なる變化が可能であるが故に、これに如何なる方法を以て臨むことが許されるかと云ふ風な考へ方で進んで行きたいと思ふ。

教育學としての精神分析學は、それ故に、その領域として(一)人格成立の過程、(二)才能發生の過程(三)道徳發生の個人心理的及び社會心理的過程、(四)教育家自身の教育心理過程、などの諸方面に分けて考覈することが許されるであらうと思ふ。最後の項は、恐らく從來、分析學のみが問題として取上げた、全く獨創的な分野であると云つて過言ではなからう。各項はそれぐ〵に非常に多岐に亙る複雜な諸問題を含んでゐて、到底この一小論文のよく盡くし得るところではない。それ故に、私は本論に於いては、最初の人格成立の過程に就いてのみ說いて見たいと思ふ。

二、人格の根柢としてのエス

精神分析學は、從來我々の屢々說いて來た通りに、人間の心理を局所的に意識と無意識とに二大別するか、或は動的に、エスと自我と超自我との三つの個所に別けて考へてゐるのである。故に、斯學は人間をみな二重人格、又は三重人格と看做してゐるものであると云つて過言でない。何人もみな根柢に於いては二重又は三重の人格者であるが、その多くの部分的人格を統一し協和せしめ得る力のあるのが健康な人であると考へるのである。故に、健康者と不健康者との區別は認めるが、必ずしも常態人格と變態人格との本質的差別を認めない。

こゝでは局所的な考へ方には拘泥しないで、動的見地からのみ人格成立の要素を研究して見よう。まづ人格の三要素の一たるエスとは何であらうか。エス (Es) とはドイツ語で「それ」(英語の "it," ラテン語の "id" に相當する。) の意。精神分析學者グロデックがニイチェから暗示を受けての造語であつて、フロイドはこれを採用したるものである。「それが私にさう思へる」("Es dünkt mir dass, ..." "It seems to me that . . . ") と云ふ意味の場合の「それ」であつて、文法上で云ふ非人稱(イムパーソナル)の場合の「それ」である。併し「それが私にさう思へる」と云ふ言葉は曖昧ではあるが、

要するに「私は思ふ」("Ich denke," "I think,") と云ふことに外ならないではないか。換言すれば、このやうな意味の「それ」は「私」にして「私」は道徳的責任を負ふことが出來ないと云ふことを明かにしてゐる表現である。

精神分析學の研究に依つて、これが集合無意識であることが、明かになつたのである。無意識は廣義に於ける自我（無意識我）の內容であるが、狹義に於ける自我（意識我）の內容ではない。これは本能的なものであつて、その本能の內容には動物時代、野蠻人時代、幼兒時代の遺產が含まれてゐることが明かになつた。右はエスの形式的內容であるが、その實質的內容の主たるものは快樂追及不快逃避の盲目的（無意識的、本能的）傾向である。快樂追及不快逃避とは、つまり何等かの緊張から解放せられて弛緩せられ、弛緩せらるればまた緊張せんことを要求するその不斷の反復的傾向である。性慾及び食慾の緊張やその充足に依る弛緩がその代表的傾向として人々の容易に理解し得るところである。故に無意識（エス）は、大體に於いて快不快原則に支配せられてゐるとされてゐるが、なほそこにはその原則を超えたもの、反復强迫的なもの、死の本能、安定への傾向が並在すると知られてゐる。それを論じたのが、フロイドの『快不快原則を超えて』である。

三、自我成生の過程

これに對して自我は如何にして構成せられるのであらうか。赤兒の心理は全部無意識（エス）であると想定すれば、その無意識が漸次に外界現實の刺戟と壓迫とに會して、その表面に表皮の如く生ずるものが自我であると考へることも出來るが、そこに個體的經驗のみを假定することは無理であらう。種族遺傳的なものをも豫想しないわけに行かないであらう。自我の成生に就いてフロイドはかく云つてゐる。

「……我々にとつては、個人は未知なる、無意識的なる、心理的エスであると云ふ事になつた。このエスの表面には自我が位置を占め、この自我は知覺區劃からその核として發達したものと認められるのである。この考へ方を圖解的

にして見れば、自我はエスの全體を掩蔽せずして、却つて知覺區劃がその表面を構成してゐる程度まで掩蔽してゐるのである。恰も卵子に於ける胚種層(カイムシャイベ)の如きである。故に自我はエスから明瞭には分れてはゐないで、その下部はエスと共に併流してゐるのである。

「併し抑壓されたものも亦エスと併流して、その一部を構成してゐる。但し、抑壓されたものは抑壓の抵抗によつて自我とは截然遮斷せられてゐるが、エスを經て初めて自我に通ずることが出來る。玆に於いて我々は、病理學の研究に依つて定められた區別の殆ど總ては、心的裝置の層(我々にはこれだけしか分つてゐないのだ)に關したもの丶みに限られてゐることを、直ちに認めるのである。」(中略)

「自我は知覺意識の仲介の下に外界の直接影響に依つて改變せられたエスの部分であることは、容易に認められる。云はゞ、表面分化作用の延長である。自我はまた外界の影響をエスの上に及ぼし、且つエスの意圖を實現すべく努めるのである。卽ち、エスを無制限に支配してゐる快樂原則の代りに現實原則を以て置換へようと努めるのである。エスに於いて本能に委ねられる役目は、自我に於いては知覺に委ねられる。卽ち、自我は情熱を含んでゐるエスとは反對に、理性及び正氣と稱するものを代表してゐる。……」(『自我とエス』)

このやうに自我はエスの上に乘つかつて、自分よりも强力なるエスを支配するの大役を課せられてゐること、恰も荒馬を御する騎士の如きものであるとフロイドは譬喩してゐるのは、當を得てゐる。實際、馬はわが國の民俗に於いても(夢や言葉や繪畫に表現せられてゐるやうに)屢々エスの、本能の、或は本能的性慾の象徵として使用せられてゐる。

自我はこのやうに、エスの材料によつて成生したものであるから、屢々エスの中に埋沒し、併呑されて了ひ易いものである。我々の肉體の一部分が、また我々の心理生活、知覺、思想、感情などが如何にも自分のものでないらしく思はれるやうな場合がある。また我々は明かに自分自身の內に起り、自分自身もそれを認めざるを得なくなるやうなことを、外界に歸すると云つたやうな場合もある。このやうに自我感情は傷害され易いものであり、自我限界は健康

者に於いてさへ時に確乎不動のものとは云へないのである。なほその上に自我の働きに制肘を加へるものに超自我がある。で、我々は次に、超自我の性質と成生過程とを研究して見よう。

四、超自我の性質とその成生過程

超自我とは常識的に云へば良心に該當すべきものであるが、良心と云ふやうな價値觀的な、倫理學的な、實踐的な觀念ではなく、純粹に心理學的な概念であつて、自我の指導者であると共に、それへの病的な攻擊者であり、時に陰險な策謀家でさへある。

自我は知覺區劃を中核としてエスの表皮に出來たものであると、前節で說明して來たが、自我にはも一つ別の中核があつて、彼の二重人格振りを顯著にしてゐる。その第二の中核は特殊な審判機能であつて、自我よりは恐らく後に出來て、而も自我の上に權力を振つてゐる。分析學は名づけてこれを超自我と呼ぶ。この超自我と自我とは多くの場合、合流し並流してゐて、兩者の區別が立ちにくい程であるが、而も他方の關係に於いては兩者は截然區別せられる。

超自我は實驗遺傳的には、兩親的審判機能の遺產であるとせられる。嘗て幼兒時代に兩親が自らを扱つたのと同じやうに自我を扱ふところを見ると、超自我は、幼兒が觀念的に自己內に取込んだ兩親の俤であるとせられねばならない。併しその取込方法はどうかと云ふに、それは幼兒が自己のナルチスムスを兩親に投出して、兩親を實際以上に崇高偉大と妄想してゐるが故に、さうしてその崇高偉大なるべき兩親の現實の姿はそれほどでないことを後になつて發見するが故に、自分の內に取込まれたる兩親の俤は、實に自分のナルチスムスの虹の上に映じた蜃氣樓であるかも知れない。かくしてこの超現實的の蜃氣樓は現實地上の兩親的なものから、神的なものへと榮轉して、遂に自我の地上的卑小を笑殺叱咤してこれを引上げると共に、時にはこれを奈落の底に叩き落したりもする。超自我成生の過程に就いて、フロイドはかう說いてゐる。

「超自我は如何にして生ずるかと云ふに、エスのリビドー的亢奮の最初の對象たる兩親が自我內に取込まれ、その際

にそれ等の對象に對する關係が性的意味を失ひ、直接的性目的からの離脱を經驗するのである。このやうにしてまづエディポス・コムプレクスの克服が可能となつたのである。超自我は今や取込まれたる人物の本質的特徴を保有してゐるのである。監督し懲罰せんとする彼等の力、傾向を保有してゐるのである。權威ある兩親を自我中に取込むと同時に本能の分解が生じ、そのために權威が一層高まつて來る。自我内に働く良心たる超自我はこれまで自我を守護してゐたのが、今や自我に對して嚴格に、殘酷に、苛辣になる。カントの無上命法はこのやうに、エディポス・コムプレクスの直接的遺産である。」(『マゾヒスムス論』)

このやうに超自我は一方自我を引上げて、それの現實適應力を强め、本能昇華の機緣となるが、他方にこれは攻撃本能の變化したものとして自我にその鋭鋒を突きつける。そのやうな攻撃性の面についてフロイドは『文明と不滿』の中でかう云つてゐる。

「攻撃慾は内向し、内化し、而もそれが始めに出て來たところへ戻される、つまり本來の自我に還つて行く。自我内に於いて攻撃慾は自我の一部に採り上げられ、それが超自我となつて爾餘の部分と對立する。さうして今や『良心』として自我に對して、自我が他の個人に對してとると同じ攻撃的傾向をとるのである。嚴格な超自我と服従せる自我との間の緊張を、我々の罪惡意識と云ふ。これは懲罰慾求となつて現はれる。文明はこのやうに攻撃慾を弱め、丸腰にし、また征服した町に守備隊を置くやうに、自我の内部に組織を作ることに依つて、危險なる攻撃慾を支配するのである。」と。

「良心は人を臆病ならしめる」とハムレットも云つてゐるやうに、超自我の自我攻撃は何人にも容易に理解出來るであらうと思はれるが、超自我の自我擁護と云ふのは如何なる場合に見られるであらうか。近頃、自家の十三歳になる男兒Tがその機制を示したのを觀察したことがあるから、その場合を報告して見よう。Tはその學友と自分の部屋で遊んでゐた時、誤まつて窓硝子をほんの僅かであつたが破損したらしいのである。破損してゐるのは事實であるが、それがそのTの所爲であるかどうかは兩親たる我等には分らない。併し同室に机を並べてゐる弟Kはそれが兄Tの所

爲であると主張してゐる。然るにそれを承認して父母に謝罪しないことは男らしくないと云つて弟は父母の前で非難するのである。すると、兄はそれが自分の所爲でなく、弟の所爲であると主張し始めた。弟は益々憤慨して兄攻擊の火の手を愈々激しく上げ始めた。すると兄は愈々頑固に否認し續けるのであつた。父母は兄を呼んでお前は硝子を壞したのぢやないのかと、尋ねて見た。すると、兄の表情はそれを肯定してゐるのであつたが、口では依然それを否認してゐた。その時、母は云つた。「さう、貴方が壞したのぢやないのね。壞したのなら貴方は男らしく白狀するわね」と念を押すと、兄は眼を伏せて口惜しさうな表情をしながら首肯した。それを見て、弟は愈々憤慨した。で、母は弟に向つて云つた。「だつて、兄ちやんは自分でしたのでないと云ふんだから仕方がないぢやないの。それは兄ちやんが誰よりも一番よく知つてゐることなんだから。」と云ふと、弟は今度は泣顏になつて怒鳴り始めた。「だつて、僕はしやしないんだよ、兄ちやんが壞したのを、僕ちやんと見てゐたんだもの。」「誰もお前が壞したと云つてゐるんぢやないんだからいゝでせう。兄ちやんは自分で壞さないと云ふんだから、さうかいと云つて聞いてゐるだけの事なの。」と云つたら、弟は默つてそのまゝになつてしまつた。父は三人の問答を側から傍觀してゐて默つてゐた。總てはこれでよいと思つた。

兄は平生から超自我の高い兒であるから、兩親は既に兄に於いて十分にその超自我が自我を非難してゐることをその表情に讀むまでもなく分つてゐたのである。それを弟が喧ましく騷ぎ立てたので、兄弟內にせめいてゐた自我と超自我とは、忽ち共同戰線を張つて外なる敵(弟)に當ることになつたのである。これを兩親がも少し攻めてゐたら、兄は勿論、それを承認して謝罪することは分つてゐるが、その結果は、親の行動を殘酷と解釋し、泣いてあちこちに當り散らすやうになることは火を見るより明かである。兄の自己非難(超自我の自我非難)が既に事實として存在してゐることが見えてゐる以上、兩親が更にその超自我の援助に出かけることは、彼の自我の立つ瀨を無からしめて、却つて面白くない結果を來す。これは超自我が自我を庇つてゐる場合の一實例であると共に、超自我の高い子供の取扱法を示すものでもあると思ふ。

五、人格分裂の樣相とその處置

以上、私は人格の三つの素因として、エス、自我、超自我の成立過程とその機能の大體を説明して來たが、從來の教育學はこの内の或る一つ（漠然と考へられたる自我）と超自我を强調して他の者（エス）を抑壓せしめようと云ふにあつたと云つて大過はなからう。つまり、極言すれば、心理の中に内輪喧嘩をさせて得意になつてゐたわけである。併し、分析學に基く教育學はこれ等三者を圓滿に妥協させようとするものである。從來の教育學は、これ等三者を相剋せしめようとしたものであるから、從つてそこに自己分裂が生じ、三つの素因が相互に反撥し合ふことが多かつた。その分裂の仕方には大體三種あると見てよいかと思ふ。

第一は、自我とエスとが妥協して超自我を克服せんとするもの。その克服せられた結果に於いては、その人の生活は獸的となる。

第二は、エスと超自我とが妥協して自我を克服するもので、その結果は當人の精神症となる。併し健康と云へば健康である。

第三に、超自我と自我とが妥協して、エスを克服せんとすると、その人の生活は神經症的となる。エスの全部を抑壓克服することは固より不可能であるから、その重要な或る部分を克服せんとするのが神經症となる。

右の考へ方は、フロイドの神經症、及び精神症の區別の考へ方と、或る點に於いて一致してゐて、參考になるからそのフロイド説を紹介して見よう。曰く、自我が現實に適應するためにエスの一部分を抑壓するのが神經症であり、自我が現實の或る部分から離れるために、エスの内に沒するのが精神症（狂氣）であると。

人間はさなきだに、各心的要素の分裂を來し易く出來てゐるのだ。何となれば、各要素の力が均等して生れついてゐると云ふことは寧ろ考へにくいからである。なほ、その上に教育でこの均等を破るやうに仕向ける場合が多いのだから恐るべきものである。分析學的教育學に於いては、これ等三者の步調をなるべく揃へさせるやうに仕向けるのである。超自我の病的に發達してゐる兒童には、なるべくその超自我の發展を制するやうにする。自我が軟弱で、屢々

エスや超自我の前にその自我を屈せしめる兒に對しては、他の二者を制して、自我の强化を圖るやうにする。では、それは具體的には如何にするかと云ふことは、問題が複雜微妙であるから、他日實例に就いて、詳しく論じるであらう。自分に許された紙數は旣に盡きたから、今度はたゞ理論的なことを述べたゞけに止めておく。

×

なほ最後に一寸斷つておきたいのは、教育上の理想主義と沒理想主義との別に就いてゞある。文學上でもこの二つは永遠の對立問題をなしてゐるが、教育上とても同樣である。科學としての精神分析學に基いて教育說を樹立する以上、それは當然沒理想主義になるのが當然であるが、よし沒理想主義に基いてゐる教育家でも教育の實際道程としてはその時々に何らかの理想を持ち出して指導することも固よりあり得ることだし、差支へもないと思ふ。始めから一つの大理想を樹てゝかゝる教育家も、個々の問題ではさう一律的にその大理想ばかりで押通すわけに行かない場合にも屢々打當るに相違ない。學問としての立場の上で、一を以て他を難ずると云ふことは、結局愚かしいことである。實際問題は常にその中間にあるのだから――。併し學問は暫く實際を離れて理論としての發展を闔せなければならない以上、何れか一方の立場を純粹にとることは、蓋し當然である。（完）

教育者の爲の精神分析概論（アナ・フロイト述）

宮田齊譯

小序

聞いた話であるから眞僞の程は判然しないが、何でもルネサンス時代の或畫家が描いた繪に「ソークラテスの臨終」と云ふのがあつて、瀕死の師の傍に集つて悲嘆に打沈む多くの弟子達のうち、プラトーンは天を、アリストテレースは地を指してゐる樣が表現されてゐると云ふ事である。これは勿論寫實ではなくて、兩哲人の思想を端的に表現しようとした一幅の想像畫に過ぎまいが、私は教育學者と實際教育家との關係を想ふ時よく此の畫を想起するのである。天を指すプラトーンが講壇的教育學者を象徵し、地を指すアリストテレースが世の實際教育家を代表してゐるやうな感じがするのである。（勿論思想的意味で象徵したり、代表したりするのではないが）

教育學者と實際教育家とを全然別箇のカテゴリイに分けて考へるのが現代の常識である。講壇教育學者が孜々として教育の理念を思想してゐる一方、實際教育家は親の言ふ事をきかない子供の取扱ひ方に苦心する。どうも此の兩者の間には何等共通の地盤が無いやうである。理論的教育學に沈潛して行けば行く程、實際教育から遠ざかつて行くかの如き感すらある。

然し乍ら、敢て教育に限らず、凡そ仕事と云ふものは何等かの指導理念（目的意識）なしに取掛かれるものではないから、やはり此の理念の一點に於て實際家は常に教育學者と相干涉するものでなければならない。

古來代表的の教育學者は多く觀念的倫理主義者であつた。或る者に於ては教育の全問題は道德といふ單一なる概念の下に統一されてすら居つた。(1)

つまり、所謂教育學者は遙か遠く天上にある抽象的な理想を指してゐたのである。其の理想は如何にも天上なるものに相應しく美しく思想されて居つたが、結局外にある理想に異ひなかつた。彼等に於ては思惟に把捉せられた概念なる「人」が、之もまた思惟に把握された概念なる「理想」に變化することが教育であつた。その理想は、或は道德、或は共同社會、或は人類愛、或は神の國等の言葉で思ひ思ひに表現されたが、恐らくはその悉くが遙か外にある概念たるを免れなかつたのである。

私といへども教育は理想主義によつて行はるべきものだと考へてゐる。併し乍ら、その理想は外にある理想ではなくて、現實の人に內在する理想でなければならないと考へる。何故ならば教育は變化する過程ではなくてすでに內在するものが成つて行く過程 (ein werdender Prozess) だからである。此の意味で私は「健全なる理想主義は生活と離れた理念の遙か彼方に迷ひ出てはならぬ。それは生活の只中に、鬪爭してゐる人類の最も苦痛な生活の只中に、在らねばならぬ」と云ふナトルプの見解、(2)卽ち「近き理想主義」(Idealismus in der Nahe) の思想に共鳴するものである。

(1) 長田新著　教育學　二頁（ヘルバルト說の評）

(2) Natorp: Sozialidealismus Vorwort I.

教育者は生きてゐる現實の人を見なければならぬ。その人と人との聯關を、卽ち社會を、概念としてゞなく、一個の生活體として把捉しなければならぬ。その人と人の聯關こそ彼の働きかけ得る唯一の場面であり、就いて以て教育の理念を樹立すべき唯一の據り所なのである。

先程の畫題に立戾つて考へて見よう。天を指した教育學者が畫中に空想されたプラトーンだとすれば、地を指さすアリストテレースは差詰め實際教育家であらう。彼等の大部分は生きた人間を見、現實の社會に接してゐる。だが、此處にも果して不滿がないであらうか。實際教育家の多くは生きた人間の行動表現をのみあまりに見すぎてゐはしな

いだらうか。彼等は書齋の教育學との交渉を拒否した結果、一種のニル・アドミラーリ的狀態に陷つて、唯々其日暮し的な營みをつゞけてゐはしないだらうか。私は不幸にして斯樣な教員を數多く識つてゐる。彼等は現實を凝視するのあまりに洞察への意欲を喪失して全く機械的にのみ働いてゐる。

然し、眞の教育者は人格（Personality）に透徹する力をもたなければならぬ。彼は行動の現實を超えて魂の現實に觸れなければならぬ。此の魂の現實のうちにこそ彼の活動に方向を與ふべき內なる理想が宿つてゐるのである。

天を指す教育學者の高遠な企圖と、地を指す實際家の人間性への透徹せる洞察が結びつく時、眞に力强い逞ましい人間教育が行はれ得るのではあるまいか。

私は此の意味に於て精神分析の敎へる人間の心の法則に關心を持つ者である。精神分析は固より一箇の科學であつて、その考へ方は量的であるとは常に言はれる所である。併し乍ら、此の量的・科學的觀察が軈て質的・哲學的に迄赴くべき教育のイデーの樹立に示唆を與へ得ないとは誰しも斷言出來ない所であらう。

現在の私にとつては精神分析の根本的プリイツィプが libido と云ふ語で表現されやうと、instinct 或は emotional drive 或は life-force 等の語で表現されやうとそれはさしたる問題ではない。(3) それよりも寧ろ精神分析の示す心の動き方の原理が大切なのである。

（3）ニイル著「問題の教師」（霜田氏譯）一六七頁參照

× × × ×

以下譯出する「教育者の爲の精神分析概論」はアナ・フロイト女史がウィーン市の兒童ホルト（Kinderhort）に働く教育者の爲に行つた連續講演の筆記である。譯文によつても明かなる如く女史は四回の連講に於て分析的觀點よりする兒童の reaction に就て要領よく且つ豐富に物語つてゐる。固より國情の異るオーストリーの、然も日本に無い特殊な教育施設に働く人々の爲になされた講演であるが、ホルトの現狀は、我々に直接關係がある日本の中等學校のそれと近似するものがあると認められる故に、此の著作から與へられる示唆は決して尠くないと信ずる。なほホルト

は一種の託兒所で、六歳から十四歳迄の兒童を收容する。彼等の多くは晝間勞働に從事する親の子供達であつて、ホルトに集つて勉强したり、簡單な勞働に携はつたり、遊戲、戸外運動等をやるわけである。

因に本譯文の底本は瑞西ベルン刊行の "Einführung in die Psychoanalyse für Pädagogen" であるが、外にロウ女史 (Barbara Low) の英譯 ("Introduction to Psycho-analysis for Teachers, London, Allen & Unwin") に據つて誤なきを期したことを御承知頂きたい。

第一講　幼兒性忘却とエディポス・コムプレックス

私共は實際教育に携はつて居られる方々が、今日もなほ精神分析に對して尠からぬ疑惑を懷いて居られる事を承知してゐるので、今度ウィーン市のホルト教育者の方々が、斯樣な實狀にも拘はらず私を招いて短期の講演を依賴されたことは、恐らく皆樣方が此の精神分析と云ふ新しい科學に就て一層精確な知識を得て、皆樣の携はつて居られる困難な仕事の上に何等かの意味で役立てようと御考へになつた結果であらうと存じます。處で、さういふ御期待が見事に裏切られて了ふか、或はまた少くともそのうちの幾分かゞ私の力で充たされ得るかどうかは、今後四回に亘る講演をお聽取りになつた上で決まるべき事柄でムいませう。

扨て私は玆で、皆樣に向つて學校とか或はまた此のホルトのやうな教育施設に於ける兒童の行動に就て何か耳新しいことを申上げようとは考へて居りません。何故ならば皆樣方は、此の點にかけては非常に都合の好い立場に立つて居られるために、毎日の御仕事の間に澤山の材料を用ひて、身體的に或は精神的に發育の後れた子供やら、不從順な憶病な、嘘吐きで僻んだ者から兇暴な、反抗的な不良兒に至る迄の多種多樣な現象を明確に認識なさることが御出來になるからであります。從つて、此の方面に就ては特に新しいことを申し上げるわけにも行きませんし、よしんばさうした子供達の種類別を一々表にして擧げて見たところで却つて皆樣方の方から澤山の例外を指摘して頂くやうな結果になつて了ふと思はれます。

併し乍ら、また一面から考へれば、皆様がこのやうにあらゆる現象を充分知りつくして居られるといふその情勢そのものにおのづから缺陷があるのであります。皆様はホルトの兒童教育者として、學校や幼稚園の先生方と全く同じやうに、絶間なく活動しなければならぬ立場に立つて居られます。皆様は子供達をば意見し、訓練を與へ、秩序づけ、働かせ、訓誨な活・活動は始終皆様の干渉を必要として居り、皆様方は子供達をば意見し、訓練を與へ、秩序づけ、働かせ、訓誨なさらなければなりませぬ。若しも皆様方が急に思ひ立つて突然受身的(パシイブ)な觀察者の立場に引籠つて了はうとでもされゝば皆様方の上に立つ當局の人々は大に不滿に思ふ事でせう。斯様な次第で、皆様は御職掌柄兒童の本性の數限りない顯はな表現を見ておいでにはなるが、眼の當り見るさうした現象を體系的に整理する事も御出來にならず、また教育を加へて行かなければならぬ肝腎の兒童の本性表現の源を極めて行く事も御出來にならないやうな狀態であります。また、さうした何等の制約を受けない觀察を行ふ機會に乏しいこと以上に恐らく皆様方に缺けてゐるものは、與へられた素材の正當な分類・說明を行ふ能力でありませう。何となれば、そのやうな分類が非常に特殊な知識を必要とするからであります。一例として、御列席のうちのどなたかゞ、受持の何某といふ兒童が例へば眼を爛らしてゐるとか、或は佝僂病をわづらつてゐるとか言つてその原因を突きとめようとして居られるものと假定して見ませう。

先づ、此の子が貧乏な、ジメジメした家から通學してゐるといふことは分りますが、さてその家の壁から發散する濕氣がどんな特殊の過程を經て子供の病氣の原因となるかといふことになると、これは專門の醫學的知識を持たない限り明瞭な說明を下すわけにはまいりません。また中には、飲酒家の子女が遺傳のためにいろいろな危險に曝されるといふ現象の眞相を識りたいと思ふ方もありませうが、これには遺傳學の研究が必要であり、失業問題と住居の缺乏、無保護兒童の問題、等の關係を見出すためには、幾分なりとも社會學に就て知つてゐなければならないわけでありま す。それと同様に、さきに申上げたいろ／＼の現象の心理的背景を研究し、その相異してゐる點を理解し、其等の現象が個々の兒童に於て徐々に發展して行く過程を辿つてゆかうとする教育者は、精神分析といふ新しい科學からいろ／＼學ぶ所があると信じます。

・進歩した學術が實際の仕事に與へるからした援助は、皆様方ホルトの教育家にとつては二つの理由から重要な意義をもつてゐると私は考へます。第一にホルトといふ施設は、家庭の內外にあつてあらゆる危險に曝されてゐる子供達を通學時間以外の時に預かる、ウィーン市では最も新しい市立の教育機關であつて、時と共にその數を增してゆく保護を享けぬ兒童のいはゞ救濟所の如く見られてゐるのであります。ホルトの存在は、放任と非社會性との最初の段階にある兒童が、斯樣に學校或は家庭と密接な關聯をもちながらも、それらから獨立した立場にたつてゐる環境に於て最も望ましい感化を受けるものだといふ信念によつて基礎づけられて居ります。

卽ち、此のやうな仕事といふものは、後になつて、長い間放任されてゐた爲に出來あがつた、教育的實驗では最早手のつけられないやうになつてしまつた、思春期の不良兒を感化院に隔離して見ても、どうもうまくゆかないと考へられてゐるのであります。

併し、現在のところではホルトへの義務通學といふやうな制度がありません。當局は親に對して、その子女を學校に入れる義務を課することは出來ますが、たとひ家庭に於ける子供の狀態が悲慘きはまるものであつても、その子をホルトに委託するかどうかは全然親の判斷に任せることになつて居ります。そこで、兒童ホルトは常に良好な成績を擧げることによつて各の兒童に向つて、またその兩親に對して、自己の存在を裏書きして行かなければならない立場にあるのであります。それは宛も、初めて種痘が勵行された當時、その必要が如何に大きいかといふことに就て再三世の親達に說明してやらなければならなかつたやうなものです。

兒童ホルトで働く者はなほこれ以外にも、また特別困難な立場に立つて居ります。それはホルトに預けられる子供達の殆んど全部が既にいろいろの、おのづから程度の差はあれ何れも相應に深酷な、經驗をして來て居り、その上多勢の教育者の手を經て來てゐるといふ事實であります。斯樣な子供達は少くとも最初のうちは、教師の眞の人格と彼の實際の行動に對して少しの反應をも示さないものだといふ事をホルトの教育者は注意しなければなりません。彼等は既にある先入的な心的態度を備へて居つて、惡くすると先生に對して、他の成人達に接して得た彼等の個人的體驗

によってつくりあげた疑惑的な、挑戰的な、或は警戒的な態度をもつて臨むことがあります。それに、兒童ホルトでの兒童の生活はその學校生活の補足に過ぎず、其處で應用されるいろいろの教育方法も、一般の學校で用ひる方法に比べて一層自由な、一層人間的・近代的なものであるために、學校が子供に要求し、また子供に奬める行爲の標準なるものが、ホルトの目的達成の上には却つて障害となるやうな場合も起つて來るのであります。

斯樣なわけで、兒童ホルトの仕事に携はる者の立場は決して羨むべきものではありません。殆んど總ての場合に、自己獨特の理解と活動とを要する困難な問題に直面しながらも、ホルトの教育者は遲ればせに舞臺へ登場する協力的教育家としての役割をしか振られてゐないのであります。

と申しても、學校の教師の立場がホルトの仕事に携はる人々の立場よりも惠まれてゐると考へるのは正しくありません。學校の教員にしたところで、全然手つかずの子供を取扱ふことは殆んど不可能だといふ不平を常に懷いて居ります。例へば、小學校初年級の兒童はすでにして幼稚園の遊戲的雰圍氣のなかに生活して來た經驗をもつてゐるので彼に向つて、教師に對し、或は定められた訓育の仕方に對して、望ましいやうな、眞劍な態度を教へこむことは非常に困難であります。彼等は幼稚園で習得した擧措態度を學校迄持ち越して來るわけですが、これは最早（學校では）面白くないことなのであります。

併し乍ら、溯つて、只今迄の論法でゆくと、未耕の地に最初の鋤を入れることが出來るといふ羨むべき立場にある筈の幼稚園の教育者を考へて見ると、此等の人々が、其の實、幼稚園の世話になる三歳から六歳位迄の幼兒ですらすでに「出來合の人間（フェアティーゲ）」になつてゐるとの嘆聲を擧げるのを聞いて、私共は呆れないわけには行かないのであります。どの子もどの子も皆いろ／＼な特性をもつてゐて、各自が自分獨特の仕方で教師に反應して參ります。つまり、どの子供にもかれ相應の希望やら、危惧やら、好き嫌ひ、特有の嫉妬心や愛情、愛の要求または拒否、等の明瞭な系列があるのであつて、教師は未完成の人間に向つて自分の個性を植えつけるどころの話ではなくて、感化を與へることが非常に困難な、複雜この上ない多數の小人格の間を游ぎまはるに過ぎない實狀であります。（未完）

子に對する親の態度

北山　隆

子供の異性親に對する感情の方向は、二親から互に受ける感情の大きさによつて決定される樣である。その反對の結果を起す樣な大きな要素のない限り、兩親はその異性愛的傾向から、各々の異性の子供にずつと深い愛を注ぐのが普通である。親、子供がその同性の親に對してもつ羨望、嫉妬、憎惡の性質、及び强さは大部分、その兩親の子供に對する行爲によつて決まる事は明かである。以上の事からして、子供が兩親に對して感ずる「愛及び憎」と、兩親の之に對する感情の表はれとは、量及び質に於て關係があるらしい事が明白である。此所に此の關係を更に細かく見ようとするのである。

子供に對する兩親の愛は、その子供に對する親の見方(觀念)の周圍に形成される情、或は、本能的傾向に依つて起ると云ふ事は、今や心理學者間に殆んど承認されてゐる。そしてその傾向は多少とも特殊な性質の情緒となつて、意識される。この情緒をマクドガルはリボーに從つて「感傷愛」"tender emotion"と命名し、この名は人々の間に廣く知られてゐる。こゝに、この傾向に含まれた「エネルギー」が、全ての本能的傾向のエネルギーと同樣、親のその子に對する愛に關する情操以外に、他の多くの情操に、非常に大きく働く事にも明かな證據がある。それ故「親の子に對する愛」の流れは、他の色々な情緒の流れと反比例して、種々に程度が變るのである。卽ち、親が子供に與へ得る愛情の量は、親が他人・他物に注ぐ感情と興味の總量によつて限定される譯である。子供にかまける以外に何も用のない親は、普通、外界の仕事に精力を取られてしまふ親より、感情的にづつと緊密深刻に子供と結び付いてゐるのである。兄妹の多い場

合よりも、親は一人つ子をづつと可愛がるし、性的感情傾向を外へ向ける機會のない親は、活動的な性生活を送つてゐる親より遙かに多くの愛情を子供に押しつける。寡夫、未亡人、そして不幸な結婚をした人が（私生兒の母も――この場には愛が憎に變る事も多い）よく子供へ普通以上の定着を示し、子供が當然受けるべき愛の外に、元來なら妻もしくは夫に向けられる筈の愛情が轉位されて子供へ注がれるのも此の譯である。それだけ、この親子關係は親密すぎるのである。この親子關係に過剰な愛情を注ぐ事を避ける爲、かゝる親達には其の本來の目的に向ける事の出來ぬ精力（エネルギー）を、その代り何處か他へ持つて行く代償を見付ける事が必要である。又、子供の親に對する愛の不當な定着を止めさせる爲に、色々の處置法を、特別な注意と努力とを以て行はねばならない。

　故に子供への愛と配偶者への愛とは、互に或る程度、反比例する關係にある事から、この兩方の要求が强力執拗な時には、必然的に愛の葛藤、競爭が相當に起るのは止むを得ない。この事から、子供の同性親に對する嫉妬が起る。之と同樣な嫉妬は親にも起るが、この場合、敵意は無意識中に押込められてゐるから、種々な顯現に就いて間接に知るか、或は分析によらねば分らない。この嫉妬は家庭生活に甚だ有害であり、それが猛烈だと、兩親と子供の間が何時も氣まづい事になる。この事は子供の兩親に對する嫉妬の場合と同じである。

　子供の場合、嫉妬から起る親への敵意は、子供の願望を一般的に阻止する事によつて强められると同樣、兩親の場合も、嫉妬から來る子供への惡意は、他の事への敵意と一緒になつて强められるのである。子供が親を自分の願望充足への邪魔物と見、子供の一番すきな行爲を妨げる張本人と考へるのが不可避であるならば、これと同じく、兩親の方からも子供に對して同樣な氣持を抱くやうになる理由がある。子供を育てる事の責任、努力、心配等は、自分の仕事や娛樂に使ひたい時間を隨分喰つてしまふ。スペンサーが「個體と子孫との對立」と名付けた生物學的通則の通り、人が親になるには或る範圍まで自分を犧牲にせねばならず、そのために子供に對する或る程度の鬱憤が必ず出て來るのだ。親が健康で精力家で、金にも困らず、國家その他からの補助があり、子供の爲に主要職業を殆んど犧牲にする事のない樣な時でさへ、子と親の見地の相違、雙方の好む狀態、活動、が丸つきり違ふ事から（特に小さい家にごたごた住まつてゐる家庭では）、子供は吃度ある程度まで親の邪魔物となるのは不可避である。バアナード・ショーが其の著『親と子』（Parents and Childrdn）の中で巧みに云つてゐる通り、

子供はその目茶苦茶な衝動的な勢力、大人の馴れ親しんでゐる習慣・傳統を無視したりするので、大人の慰安や平靜を常に脅かし、どんな子煩惱な親でも、時には腐つて子供から解放されたくなる。

　さうした子供への敵意を一番強く感ずるのは、子供に大部分の時間も健康も精力も取られてしまふ所の、母親の方に違ひない。尤も、此の敵意は母性愛によつて常に無意識中に押込められてしまつてゐるから、分析しない限りは外へは現れない。*

　母親の夢を分析してみると、妊娠中の子の死を主題とした物の非常に多いのに驚かされる。さう云ふ理由は母の意識的な思想や行動の中に出て來ることがないではない。墮胎、少くとも墮胎せんとする事は、全くざらな事だし（特に人爲的妊娠防止法の行はれぬ所で）出産後に子供をどうかしようとする事は、野蠻社會には勿論、今日の文明社會にも決して少くない。しかも、それは殆んど母親がやるのである。「徐々に且つ安全な方法で子供を殺す事は、新聞などに出てゐるのを讀んで大衆が想像してゐる以上に多い。」と、この方面の事に通じてゐる或る人は私に云つて聞かせた。邪魔者の子供を片付ける、もつと穩やかな方法としては、母親が子供を孤兒院、託兒所などへ預けておくことである。

　父の仕事や感情を子供が邪魔するのは、そんなに直接的ではなく、從つて、殆んど嫉妬から起るのである。しかし、父の場合にも、遲かれ早かれ、子が父の娛樂・慰安・仕事・願望を妨げる事になり、子供は自分の進歩や享樂を非道く邪魔する厄介者だと考へる様になる。

　かうした原因から生ずる、子供への敵意は、親が子供を親自身の親（卽ち子の祖父母）と無意識的に同一視する事によつて激化される。この「子と祖父母との同一視」は、人間心理に深く喰ひ込んでゐるらしい。現に、フレーザー著『トーテミスムと外婚』三卷二九八頁を參照すると、さう云ふ實例が多く見られる。

　祖父母が生れ代つて孫になるのだと云ふ考へは、世界各地に行き亘り、そのためであらうか、（古代ギリシヤ人の場合の様に）子供を祖父母に因んで命名し、特に長男は父系祖父の名を受繼ぐところが多いのである。フレーザーの右に擧げた書中にその實例がある。

　この考へが起つて來る根本はどうも、親から子を見る關係が其の一代前にあつた（卽ちその親が子供の時に）子から親に對した關係とよく似てゐる事にあるらしい。つまり、右の様な關係から呼起される二つの感情は、或る方面では似てゐないでもなく、親になつた人の境遇が

その子供時代に經驗し、しかも其の後、忘れられ打棄てられてゐた感情傾向を呼び醒まし、それを昔、親へ差し向けたと同樣に、今度は子供へ差し向けるのである。父がその妻の愛情の爲に子供と爭ふ位置にある狀態から、父が子供の時、その父親と母の愛を爭つた古い記憶が無意識中に浮び出て來るのだ。

このやうに子供を祖父と同一視することは又、どうも奇妙な、しかも珍しくない空想、アーネスト・ジョーンズの所謂「時代逆轉の空想」(the phantasy of the reversal of generations)に助長される樣である。この空想は既にサリー(Sully)の如き分析派以外の心理學者も氣付いたところであるが、この空想に依ると、子供がだん／＼大きくなつて立派な大人になると、親の方は年を取ると共に逆にだん／＼萎縮して行き、遂には親子の身體的(多く心的にも)大きさが宛(まる)で反對になつてしまひ、元來の親が全く子供同樣の位置に落ち、子供の方は身體も力もどん／＼發達して、親に對して宛で親の樣に振舞ふ事が出來ると云ふのである。この奇妙な思想の心理的起源は未だ判然りとは解らないが人間不死觀と輪廻思想、身體の大きさ(サイズ)を子供が情緒的に非常に重要視してゐる事、それらから來てゐる事は明白である。この幻想の起源が何處にあるかは兎も角として、それは何時迄も無意識の中に殘り、自分の子を親と同一視し、むかし親に向けてゐた敵意を子供の方へ持つて行くのに利用される。子供時代は弱く、賴む所もなかつた人が、いよ／＼非常な力を得たとなると、今度は子供の時、實際にひどい目に會つたか、又はさう思つた事を、此の機に乘じて復讐したくなるのである。そこで、本當は祖父が惡いのに子供の方を虐(いぢ)め、叱り飛ばして、子供を哀れな犧牲にしてしまふ事がいくらもある。これは貧乏な家には大つぴらに示されてゐる。その親達は、子供が自分より良い生活をする時があらうとは決して思はず、子供はその苦しみを、大人になつてから自分の子へ同じ事をしてやらうと考へて、漸く自ら慰めてゐる始末である。

又、この事から來る子供への慘酷は、「子供を强くし浮世の荒波に慣らさせる爲」だと理窟付けされる事が多い。原始人の入信式に伴ふ、懲罰の隱れたる意味をこゝで參考せられたい。だから、兩親を憎む事が甚しければ、かうした祖父母と子供の同一視は家庭悲劇を起し、恐しい結果を來すのであつて、特に子供の中の一人を兩親が何時も理由なく憎む樣な場合は、殆んど總て以上の無意識的、又は半無意識的な要素の結合から來てゐるのである。

この同一視は憎惡の方ばかりに出て來るのではなく、

愛の方にも重大である。兩親は御氣に入りの子に、昔、祖父母に向けてゐた愛を向ける事がある。この理由からしても、親は子供が祖父母の職業、生活様式、信仰、習慣等を受繼ぐのを喜ぶのである。

片親が子供の出來たのを嫌がる時、特にそれが嫉妬から來てゐる時は、その嫌惡の一部が、もう一方の親へ向けられ、「この怪しからん闖入者が出來たのは貴方の（お前の）責任である。大體、貴方はあの子を可愛がり過ぎる。」と云ふ様になる。この事から親達は、自分の幼時にその兩親が親密なのを憤慨し、その爲に一方の親男の子なら父親への愛が憎惡輕蔑に變つた——少くとも其の傾向を帶びる様になつた時代の事を思ひ出し、父親の方は嘗て母に對して持つた激しい嫉妬と同じ感情を、自分の妻に對して感ずるのである。かうした、感情の復活や轉位は總て、妻は自分の母と無意識的に同一視されて居り、子供時代の古い狀態は、後に母を妻に代へ、父を子（特に男兒）に代へて再び、づつと續けられて行く事を知れば納得が行くであらう。

子供と祖父母との同一化は勿論、子供の方からもする事で、子供が自分の親の親になりたいと云ふ願望、親と無關係になりたいとの願望、最幼時期に兩親を非常に偉く思つた事を後に祖父母の方へ投出する事、最後に、祖父母は普通、子供の娯育・教育には關係がない爲、嚴しい權威を振はず、從つて子供と祖父母は無條件に仲の良い事、——それらの事から、子供は祖父母と親密になりたがる傾向が強く、之は子供の信仰、性質、願望、職業等を決めるのに大きな力を持つのである。

附記　右は英國の分析者フリウゲルの『精神分析より見た家族の研究』の第十四章、「子に對する親の態度」の前半の大意を紹介したものである。

★本誌前號正誤表

頁	行	誤	正
四五	柱	革呼	革命
五二下	二二	家底	家庭
七一上	九	かどだ	からだ
八六上	一五	解譯	解釋
同　下	一八	若水	若山
九一下	七	刊法	刑法
一一一上	一四	醫擧	醫學

トルストイの幼兒性感（オツシポー）

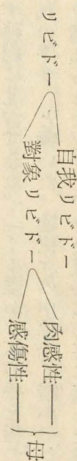
平塚義角 譯

トルストイの父に對する關係、及び兄弟姉妹に對する關係は述べない。といふわけは、そのためには『幼年時代』『少年時代』『青年時代』の三作を分析しなければなるまいから。トルストイの「家族ロマーン」（フロイドの所謂）から、理想的な母の面影と第二の母とへの定着だけを我々は取り出す。

對象リビドーの性的發展の道を、我々は次の様に略說し得る。――胎內生活に於いては、リビドーは自我の上に向けられてゐる。この自我はしかし、母と不可分離に結び着けられてゐる。それ故に根源的な自我リビドーは、このやうに、二つの對象と固く接合されてゐる。その二つの對象とは本人の自我と母とである。

リビドー――自我（＝個人我＋母）

誕生と共に母に對して肉感性と感傷性とが顯現する。同時に肉感性はまた自身の上にも向けられる――それは（性格學的）自己戀愛の道であつて、既に第三章と第四草で說明した。

リビドー ＜ 自我リビドー / 對象リビドー ＜ 肉感性―― / 感傷性―― ｝母

自我リビドーからはまた狩獵熱が發生する。自我本能からは權力（サディスムス）と憎惡（嫉妬）とが發生し、性慾と結び着く。

トルストイには狩獵熱以外には、性慾の（食人的）段階は見出せない。しかし第二の段階――肛門性感的段階――は、上述の樣に、トルストイには明瞭に印刻されてゐる。

それから精神的な諸勢力が打ち建てられる。その諸勢

力は性衝動の防止をなし、また提防の樣にその性衝動の方向を狹ばめる。(嫌惡、羞恥心、美的又は道德的な理想要求)*肉感性と感傷性——近親姦的又凡ゆる其の他の——は抑壓される。(第四の思ひ出を參照。)にも拘らず、肉感性と感傷性とは突發する。

註 フロイド『性慾論』參照。

我々は『幼年時代』の中に次の興味ある文章を見出す。子供達は森の中で遊んでゐる。物語はニコラウス(トルストイ自身の)名で述べられてゐる。「リュボチカは遊戲の間に、一本の木からアメリカの果物をもぎ取つて、一匹の大きな綠色の毛蟲のたかつてゐる葉を引きち切つた。驚いて彼女はそれを地上に投出した。……遊戲は中止となつた。そして私等は皆屈んで、頭を突込み合つて、その不思議な動物を觀察した。……風が彼女の(卽ち上述のカティンカ・ドウネチカの)白い頸から頸卷を吹き上げた。私はもう毛蟲などは眺めずに私の唇と指二本ほどしか離れてゐない、彼女の裸の肩を眺めた。私はつく〴〵と眺めて、それから私の唇を、カティンカがよろけたほど激しくその上に押しつけた。そして、出來る事なら中止したくない程の快樂を感じた。カティンカは振向きさへもしなかつた。だが、私は、自分のキッスした場所ばかりでなく、彼女の筋頸全體が赤くなつたのを認めた。ゴローヂャは頭は上げずに、輕蔑的な調子で言つた。「なんて、甘い事だ!」と。だが、彼女は毛蟲を眺めつゞけた。(抑壓的な力!)しかし私の眼には、歡喜と羞恥のために涙が浮んだ。この快感は私には全く初めてゞあつた。たゞ一回だけ、自分の裸の腕を觀察した時、ほゞ同樣のものを感じた事があつた。私は非常に羞しかつたけれども、今からは眼を決してカティンカから離さなかつた。」私がこの引用文を拔萃した章は「初戀の如きもの」と題されてゐる。(アドルフ・ヘス獨譯レクラム版)

子供達は暗い部屋の中に坐つて、白痴のグリーシャがお祈りしてゐる樣子を熟視してゐた。ニコレンカは全く身動きもせず熟視に耽つてゐた。「……誰かゞ私の手を握つて、これ誰れの手? と囁いた。物置きの中は全く暗かつた。だが、手を觸れられただけで、また直接私の耳に囁いた聲だけで直ぐ、カティンカである事が分つた。私は全く盲目的に、彼女の裸の腕の肘の處を摑んで、私の唇をその上に押しつけた。

カティンカはこのやうに、トルストイの最初の戀愛對象である。彼女はトルストイの兩親の養女である。(ドウネチカ)今引用した場面は、前に引用したタチャーナ・アレキサンドローフナとの場面と非常に似てゐる。タチャーナ・アレキサンドローフナも亦トルストイの祖父母の養女であつた。斯樣にして、トルストイの最初の對象選擇は、母性の典型に從つて行はれてゐる。

我々はカティンカとのこの場面を、決定版によつて引用した。その當時、檢閱は次の節を削除したのであつた。

「(ニコレンカがカティンカに手を觸れられてそれと分つた時)その瞬間、私は甘い戰慄を覺えた。そして私が今日森の中でキッスしたあの頸卷の下の箇處を考へた。私は問ひには何の返事もせず、兩手で彼女の腕を摑み、私の唇に押し附けて激しくキッスした。しかし私はそれだけで滿足しなかつた。その腕を摑んだまゝ、私は注意深く袖の扣鈕を脫づして、手首から肘まで血管の現はれてゐる箇處を、激しいキッスで蔽つた。私はこの窪みに唇を吸ひつけた時、名狀出來ない快感を感じた。そしてたゞ一つ事しか考へなかつた。——他人に看破されないやうに、唇で余り大きな音を立てないやうにといふ事を。カティンカはその兩手を引つ込めないで、片方の手で私の頭を探り、私の顏や髮を撫でまはした。さうしてから私を押しやらうとした。その時彼の女は羞かしかつたものゝ樣に、速かにその腕を引込め、袖を引き下した。私は、だが兩びその腕をとらへて、もつと強く、淚が眼から流れた程それを唇に押しつけた。私は彼女に氣の毒なことをした。彼女は私の上に屈んで、私の髮を觸つた。私は生まれて今まで無かつたほど幸福であつた。私にはこの幸福な狀態が、決して中止しないやうにといふ願望しかなかつた。私が感じたこの享樂は、何と描寫したらいゝだらう。その上私がキッスした腕の皮膚は、大變柔かで弱々しかつた。私はまたこんな考へを浮べた。この腕は私が非常に愛してゐるカティンカのものだ、が彼女とは明日恐らく永久に別れねばならないのだと。だが、私が感じたこの甘い悲しさ、また私の眼に淚を浮べさせるこの甘い悲しさは何を意味したのか？

ニコレンカは尙ほその年、セリョーシャ・イヴンといふほゞ同年の少年と戀に陷ちた：：「彼の本來の美しさは、最初一目見てから全く私の注目を惹いた。私は彼に索き付けられずにはゐられない氣がした。彼を見ると私は幸福であつた。しばらくの間は、私の心の凡ゆる力は、彼を見たいといふこの願望の中に集中した。彼を見ずに三日も四日も暮らさねばならぬ事になると私は悲しく、全く泣き出したい氣がした。私の凡ゆる考へは、寢てても醒めても彼に懸つてゐた。眠れば私は、彼の夢を見る事を望んだ。目を閉ぢると、私は彼を眼前に浮べた。そしてこの幻影を最も高い享樂の樣に樂しんだ。世界中の誰にも、私はこの感情を打明けたくないと思つた。私はその感情をそれほど貴く思つた。：：私は他に何もせず、何の要求もしなかつた。そしていつでも凡てを彼に捧げようとしてゐた。彼が私に感ぜしめたこの激しい愛着の情の外に彼の存在は私の中に、もう一つの少なからず強い感情を目醒ました。——それは、彼を怒らせはせぬか、何かによつて彼の感情を害しはせぬか、彼の機嫌をそこねはせぬかといふ恐怖心である。何故かと言へば、多分彼の顏が偉大な表情を持つてゐたから、又は私は自分の不機嫌な表情を輕蔑する一方、他人の美しい特徵を非常に高く評價してゐたから。或ひはそれよりも本當らしい理由は、それが愛のより確實な一

表示だからである。私は彼を愛したと同程度に彼を恐れた。初めてセリョーシャが私に話しかけた時、私は豫期せぬ幸福のために頭が困亂して、蒼くなつたり赤くなつたりして、返答する事も出來なかつた。……彼の私に與へた影響は、屢々壓迫的で堪え難く思はれた。だがその影響を逃れる事は私には出來なかつた。私は屢々彼をキッスしたいと活潑に願望したが、それも敢てせず、又彼の手を取つて、彼に逢つて嬉しかつたと敢て言ひもせず、彼をセリョーシャ（愛稱）とさへも呼ばずに、無條件にセルヂイと呼んだ――私等の間では、何としてもさう云ふことになつてゐたのだ。感情の凡ての表現が子供らしさを證明してゐた。そしてまたさういふ事をする者は、未だ坊ちやんであつたのだ。」

最初の戀愛選擇――カティンカは依憑型によつて行はれた。* 第二の對象選擇の方は――セリョーシャ――複雑な方途で結果して來た。第一に依憑型の戀愛であつた。何故ならば、セリョーシャは父を代償してゐた。第二にセリョーシャはトルストイ自身の成りたかつた所のものであつた（美少年等々）が故に、自己戀愛的典型によつてゐる。第二の對象選擇への道筋は明瞭である。トルストイは母への定着を示し、彼女と同一化した。母は父を愛した。それ故にトルストイも父或ひは父に似た人を愛した。* セリョーシャとの關係の中に、父に對する息子の感情が現はれたといふ事は、セリョージャに對する詩人の典型的な相反並存態度から認められる。

「私は彼を愛したと同じ程度に恐れた。」

又更に――

「彼の影響は私には屢々壓迫的で堪え難く思はれた。だが、その影響から逃れる事は私には出來なかつた。」

我々は上の引用文から、少年達の仲間内では、感傷性が強く抑壓されてゐた事を知る。

註一、『自己戀愛概論』（大槻譯『分析戀愛論』二四三頁）

註二、エディポス・コムプレクスに就いて精細なる論議がフロイドの『夢の解釋』とランクの『文學と傳説に於ける近親姦モティーフ』にあるが、我々はこれ等の論は『幼年時代、少年時代、及び青年時代』の分析にそのまゝ適用することが出來よう。

同じ年にニコレンカはセリョーシャに叛いた。――彼はゾニチカといふ十二歳の乙女に戀慕した。「生れて初めて私は戀慕に於いて不實な事を爲した。そして初めてこの感情の甘さを感じた。」と。トルストイが少年セリョーシャへの戀慕と、乙女への戀慕とを全く同等に評價してゐるのを觀ることは興味がある。しかし彼がセリョーシャへの不忠實を最初の不忠實だとして、カティンカを忘れてゐる事は奇妙だ。その事は恐らく次の事によつて

説明される。彼と共に生活してゐたカティンカとの關係は長く繼續して、新らしき戀愛に何等の妨害もなさなかつたからだ。この事は成人に於いても屢々認められる！ 他方、トルストイはセリョーシャ(父)への戀慕と、カティンカ(母)への戀慕とをエディポス・コムプレクスとして無意識に一つとして摑んだ。だから今このエディポス態度に對する彼の不實を、最初の不實として認めたのだといふ事は、考へられる。*

註 カティンカは家族の一員であつた。またセリョーシャの姿の下には單にトルストイの父ばかりでなく、彼の兄も隱されてゐる。故にカティンカとセリョーシャとは彼の家族群に屬してゐた。

二人の兄弟がゾニチカに戀慕した。彼等は祖母の家で行はれた子供舞踏會の後――彼等はそこで初めてこの乙女を見たのであつた。――夜、ベットに横たはつて、次の會話を取交はした。

「僕の望みはたゞ一つだけだ。」――と私は續けた。――「それはいつもあの娘の側にゐて、常にあの娘を見てゐたいといふ事なの。それ以上は何の望みもない。そして兄さんは――兄さんも惚れてゐるの？ 本當の事を白狀して御覽、ヴローヂャ。」珍らしく私は、凡ての人が彼女に惚れてゐて、しかもそれを是非打明けてくれゝばいゝと思つた。「それがお前に何の係はりが有る？」――とヴローヂャは顏を私の方に向けながら言つた。「さうかも知れない。」

「兄さんは寢る氣はなかつたのだらう？ たゞ寢たふりをしてゐたのだらう？」私は彼が寢ようと思はなかつた事を、その輝かしい眼の中に認めてさう叫んだ。そして夜具をはね返した。「お出で、あの娘の事を話さうよ。あの娘は可愛いくはない？……余り可愛いゝのであの娘が私に、ニコレンカよ、窓から飛び降りなさい、火の中へ飛び込みなさいと言へば、――私は一瞬間たりと躊躇せず――私は直ぐ樣飛び込むよ、しかも喜んで。あゝ、なんてあの娘は美しいんだらう！ と私は附け加へた。私は彼女をマザ〳〵と思ひ浮べて、それに魅せられてゐた。そしてこの姿を眞に享樂するために、急に寢返りを打つて、頭を枕の中に突込んだ。「僕は直ぐ泣き出したい氣がする、ヴローヂャ。」「お前は馬鹿だ！」と彼は微笑みながら言つた。そして一寸間を置いてから、「僕はお前とは違ふ、僕は出來る事ならまづあの娘の側に坐つて一緒に話をしたいと思ふな」……「あゝ、それでは兄さんも惚れてゐるの」私は彼を遮ぎつた。ヴローヂャは優しく微笑みながら續けた。「そして僕は彼女の指や眼や口や鼻や足や、一言で言へば、彼女の凡てをキッスしたい。」「馬鹿な事！」と私は枕の間から叫んだ。「お前には何も解らないのだ。」とヴローヂャは輕蔑する樣に言つた。「いゝや、僕には良く分つてゐる。兄さんが何も分らないで、馬鹿な事を喋るのだよ。」私は

涙を流しつゝ言つた。「泣く理由なんかないぢやないか、まるで女みたいだ！」

トルストイにはヲローヂャが夢中になつてゐた凡てのものが、如何に快いものだかは良く分つてゐた。衝動の能動性はニコレンカに於いては非常に强かつた。窓から飛び降りたり、火の中に飛び込んだりしようとする決心を對照してみよ。だが、一方その抑壓も亦强かつた。彼は願望にさへも限界を與へてゐる。例へば常に彼女の側にゐて、常に彼女を見てゐたい、しかしそれ以上は何も望まないと言つてゐる。それ故に、彼の抑壓を搖り動かすやうなこのヲローヂャの言葉は、彼を非常に不快がらせたのだ。

カティンカへの愛とゾニチカへの愛とを比較してみて、我々は次の事を諒解する。卽ち二つの戀愛は有機的な發展過程をたどつて、同じ結果に至つた。カティンカとの場面の中の肉感愛の活動の描寫を檢閱が削除しつゝ望んだその結果である。ゾニチカに對しては感傷愛だけが殘されてゐた。（未完）

血文字お定の精神分析

長崎文治

飽く事なき情痴の擧句、愛する男を殺してその局部を切り取つたといふ、所謂尾久の待合のグロ殺人事件として騒がれた阿部さだなる三十女の犯行は、行爲そのものにこそ怪奇とか變態といふ名前を附する事が出來るが、それは決して不可能な心理でも、或は通常の生活には縁遠い感情から出たのでもなく、總ての性生活に隨伴して來る、寧ろ必然的な感情の結果である。事實、この事件に對して心底から非難の鉾先を向ける者は、充足した性生活を持つ婦人には無い。却つて、ぼんやりとした同情を持ち、詐らぬ心持では、犯人さだの境地が了解出來るのであらう。たゞ併し、社會的な桎梏とか、道義的な虛榮から、一應はこの行爲に對して否定的態度を見せるであらうが、自分達が竊かに賞翫してゐた閨門の祕密を餘り露骨にさらけ出されたといふ事に對する反感か、或は不感症的婦人の嫉妬を除けば、多くの婦人に首肯される事柄である。

性感と愛情とは、婦人にあつては正比例で行くから、愛情が單に精神的に經過する間は或程度の浮動性は免がれないが、肉體的に結合する事によつてその繋がりは強固にされる。そして性感の濃さが更に愛情を深めるのである。唯それを更に精神的領域にまで純化（サブリメート）するか、又は永久に肉體の上に纏綿させるかによつて愛情の方向に異りが生ずる。過去に於て、幾人かの男と性的交渉を持ち性生活を、精神生活にまで高めるところの教養に欠けてゐたさだの愛情が、專ら肉體の上に注がれたのは當然である。彼女の野生的な愛情と、貪婪な性慾とは容易に人間性の範圍を越えた行動に奔るもので、かの待合の女中が、「到底人間同志とは思はれない」といつて彼女の情痴生活を評したといふが、一體性生活そのものが、一種の退行現象で、人間にあつては、知性を未開野蠻な、更

にそれ以上動物的な段階に迄引下げるものであるから、自然と精神内にも、今迄抑壓された野生的分子が跋扈し始める。

愛の祕戯がどれ程多くの殘虐性を孕んでゐるかは今更説明する必要もない。愛と苦痛とは影の形に添ふ如く常に並行してゐるもので、性的のクライマックスには必づ苦痛が隨伴するし、總ての人間は程度の差こそあれ、苦痛を與へ、又は苦痛を與へられて快感を催ほす虐待性(サディスムス)又は被虐性(マッヒスムス)的傾向を持つてゐる。唯これが、性的快感の高潮時には強く現はれて來るだけである。併しこの場合は全く本能的なもので、動物性表現の一の原型、例へば諸多の動物にみられるところの交尾期中、又はその直後の咬みつきといふ様な行動として現はれて來る。而して男性の性的快感は短時間に經過するに反して、女性のそれは極めて緩漫であるから、自ら野生的感情の繼續期間も女性にあつては長い譯である。この緩漫に經過する女性の性感動の中へ次第に知性が蘇つて來る過程を、人類の進化史的過程に擬へる事が出來る。卽ち女性の性感動の闘發期——女性の性的最高潮期から次第に性感が減弱して行く過程——は人智の發達過程と類似してゐるといふのである。それであるから、人類の未開時代に相應する性感動の開發期中の分化されない叡知の段階に於て、文明人にも屢々野生的の行動が現はれて來る。さだのあの犯行も、この段階の產物で、愛するが故に自分一人のものにして了はうとする意慾の野生的な現はれである。

獨占慾は、相手を完全に自分の中に取込んで(攝取)これを自分の一部分(自己化、廣くは同一化といふ)とする事で、言ひ換へれば、「喰つて了ふ」といふ事である。一體喰ふ者(攝取)と喰はれる者(備給)との關係は生物の活動の原型であつて、吾々はこれに生の本能と死の本能といふ名前を附して總ての本能現象を說明してゐる。この喰ふ事と喰はれる事とが過不及なく行はれゝば、そこに完全なる結合が生ずる。これが動植物にあつては生殖と云はれ、一方の生殖細胞が他方の生殖細胞を受容する事によつて生殖作用が遂行されるのである。そして、これが更に精神的の領域に入つては愛情に迄發達する。そこで、愛情の機制を嚴密に云へば、攝取と備給とが完全に行はれて、獨占慾が充足させられた時、相手を永く自分の手許に引留めて置かうとする慾求によつて愛情は生ずるものである。であるから、愛情の原型は、喰ふ事であつて、これを動物的にみれば相手の生を奪ふといふ事になる。嘗て、首狩人種と云はれた臺灣の生蠻人が、最も厚い信頼と愛情を寄せてゐた牧師の歸國に臨んで惜別の極、遂にその首を取つて了つたといふ實話があ

つたが、それは文明人にさへ愛の極致には屢々現はれて來る感情であつて、交尾中、雌が雄を喰つて了ふといふ蟷螂や或種の蜘蛛の行動と愛情の表現としての咬みつきとは同一のものである。畢竟「愛と死とは紙一重だ」と云ふ常識的な言葉が生物界の通則として人間にも當て嵌つてゐる。

兎に角、獨占慾は彼我の完全なる一致を目指して生ずるものであるから、愛の對象を永久に自分のものとして了はうとする要求は常に誰にも存在するもので、これが强ければ强い程、素朴的な形であらはれて來るし、又その慾求が滿され得ない様な條件に遭遇すれば、强引に、そして屢々異常な方法を以て、彼の獨占的慾求を遂行させやうとする。この場合の精神は勿論異常である。正常な人間は社會的な規格に從つて、これを抑壓し、又は代償的行爲を以て滿足する事が出來るが、若し種々の不良な條件によつて精神的に退行を來してゐる様な場合は野蠻な行動として現はれて來る。さだの場合をみても、被害者の石田吉藏は、彼女がひたむきに投げかけて來てゐる愛情を進んで、全面的に受容れる事が出來なかつたし彼の妻子ある立場や、彼のドンフアン的性格とか、加ふるに彼に里心がつき始めた事、その他、男性と女性との性的感情の不一致等が、さだの獨占的感情に一抹の不安を與へ、これが男を殺して獨占しやうとする原始的感情を、一段とそゝり立てたものであらう。そして、この感情を實行に迄うつしたのは、勿論さだの執拗な情慾から生ずる加虐的心理ではあるが、それの口火となつたのは明らかに吉藏自身の被虐的性格にある。さだの告白によれば、或時にはさだが吉藏の上に馬乘りになつて咽喉を締め乍ら短刀を突きつけた場合、驚ろくかと思ふとニヤリと笑つたといふし、彼と關係あつた女性を取調べた結果によつても彼の被虐性的行爲を裏書する様な陳述がある。又待合の女中の話にも、彼はさだの愛撫を全く小供の様に受けてゐたといふし、彼等の關係は母子間の様な立場で、一體母が子を愛するのは子が母の自由になり、その獨占慾を滿足させてゐる時である。母親の無限な愛撫は屢々度を外して時々子供の不機嫌を買ふもので、その行爲は可成り殘虐性に富んでゐる。「喰つて了ひ度い程可愛い」との一般的な愛撫の言葉が、さだの場合には「殺して了ひ度い」といふ痴情となり、性戲の間の模擬的の殺害の爲となり、最後に、戲むれが眞實となつて現はれて來た。彼女等の情痴生活から推察すれば、さだが首を締めた時、吉藏が恍惚とした狀態になつて、思はず漏した言葉とか、滿足氣な表情とかゞ彼女の殺意に附隨してゐた現實意識の抑制力が痲痺させられ、却つて加虐

性性格者たるさだの心に快感を喚起して殺害行動に迄導いたものであらう。虐待と殺害とは殆んど僅かな隔たりしかない。子供が動物を虐めてゐる場合、最後に無意識的に手の力がこもつて殺して了ふ事がよくあるが、彼女等の情痴生活には既に無意識的に殺害衝動が發してあつたのである。そして一般に加虐性性格者にみられる、殺害後に湧き上つて來る快感は、更にその犯罪に着色を行ふ。これはかういふ犯罪者には共通の現象である。さだが吉藏を殺してから後に過した數時間の行爲は、變態性慾者の殺人後に行ふ弄屍行動が總て奔放な性慾に仕へてゐるのと軌を同じふする。

さだの行爲は殺害といふ形式をとつてはゐるが、眞實の意味では情死である。これはさだが吉藏を殺した後の所作をみれば分る事であつて、彼等の情痴生活の溫床として、最も印象の深い、情慾をそゝるところの敷布に、「定吉二人きり」と血を以て書いてゐるが、これに「死の床」といふ概念を持つて來れば、こゝはさだと吉藏の永久に眠る墓所、卽ち一蓮托生の場所であるといふ意味を持つし、又死骸の左股に「定吉」と二人の名前を書いたのも、その肉體が、吉藏とさだのものである事を表示し、こゝで二人が永久に結ばれて死んでゐるといふ事を象徵するものである。更に死骸の左腕に自分の名「定」だけを刻みつけておいたのも彼女のひたすらなる獨占慾を示すもので、昔から行はれてゐる心中立ての意として『○○命』などゝ戀愛の相手の名前を記しておく入墨の意味を持たせてゐるものである。かうして、吉藏は完全にさだのものとなり、又吉藏の上に自分の名前を書き、以上の樣な象徵的行爲を行ふ事によつて、さだも吉藏のものとなつて、二人きりの世界へ行つて了つた（情死）といふ事を示し、その爲めにさだは一般の殺人者又は情死片割者の持つ樣な死者の幻影とか罪障感に惱まされる事もなく、平然として大道を闊歩し、司直の追求を少しも介意しないものゝ樣であつた。そして、彼女の逮捕されて後の言動も、極めて人を喰つたもので、平然と殺害の情況を自白して、自分の罪を少しも意識しない。寧ろ當然な事を當然行つた如く考へてゐる。精神病學者等は彼女を變質者として片付けてゐるが、それ以前に、彼女の犯行前と犯行後の精神上の變化を比較して推定するならば、彼女の以上の如き象徵的行爲が大きな役割を持つてゐる事が證明されるのではないかと考へられる。

愛する者を獨占する爲めに之れを殺して、その局部を取り後生大切と持つて歩いたさだの行爲と、容れられない愛を執拗に遂げやうとして、相手を殺してその首を取り、之れに狂熱的な接吻を與へたサロメの行爲とは類似

してゐることは一般に認められてゐる。併しこれが同一の機制であると云ひ切つた者は未だ無い樣だ。確かにさだの行爲もサロメのそれも現はれ方として異るのみで眞意は違は無い。一體、首と性器とは無意識心理では同じものである。首を性器の代理として用ひてゐるのは屢々古代の民族藝術に看取されるし、多くの民俗習慣や個人の愛の中に首を切る事が去勢の象徴である事も、精神分析學から證明されてゐる。そしてそれ等の說明は、赤面恐怖症研究の結果得られたもので、赤面は性器の充血の代償作用であつて、赤面によつて抑壓された性器の過重な負債が緩和されるのである。フロイドは斯樣な機制を「下方より上方への移動」と稱してゐる。思春期の男女は最も多く赤面するが、これは生理的に來た、卽ち性器の成熟して來た結果、そこに過敏性充血を起す樣になり、これが抑壓によつて顏面の代償的充血となつて來る。それが次第に性的經驗を積むに從つて、所謂「厚顏無耻」狀態に進んで來る。卽ち、性的交涉を持つ樣になれば、性器に生じた充血(勿論性慾といふ形であらはれて來る)を性器自身で解消する事が出來るから、抑壓機制のない限りは赤面によつて代償される必要は比較的少くなる譯である。赤面癖心理機制はもつと複雜であるが、右はほんのその一端を示したに過ぎない。

發生學的にみて、肉體がその本能に仕へる樞要なる部分は口と性器である。勿論口は食慾を滿す爲めの場所であり、性器は性慾のための場所である。食慾と性慾とは個體保存と種族保存の二大本能のあらはれである。そして個體保存は種族保存者が完成される迄のものであることは、生物進化の段階を遡る事によつて了解させられるそこで原本的に肉體の最も重要な場所であり、肉體的結合(肉體愛)の最磁場としての性器は愛の根源的なあらはれの場所となる。ところが文化は性器に固着してゐたリビドーを次第に引上げて、これを色々の方面に備給する。その結果、肉體愛は漸次精神愛に變つて來る。處女時代の愛情は全くプラトニックで、その愛情の集注は常に顏面であるから、たとへ淫蕩の血を受けてゐたとは云へ、尙ほ處女性を保存して居り、而もその愛の對象が精神界に住んでゐる豫言者ヨカーナンであつたサロメの場合と、過去に幾人かの男を知り、肉慾生活を其の全部としてゐた樣なさだ及び吉藏の場合とは、全然對蹠的である。それ故、リビドーの纏綿(備給)が上方(首)と、下方(性器)とに分れる對蹠的過程も察知されるのである。そして男性器は俗間に「伜」と呼ばれ、全身と性器とは親子の關係にあると諷示されてゐるのは、人間が無意識的にそれ等を同一視してゐる事を示すものである。(完)

士官と從卒（D・H・ロレンス）

The Prussian Officer: D. H. Lawrence.

岩倉具榮譯

大尉はこめかみの邊が既に灰色になつてゐる、四十がらみの丈高い男であつた。彼は美しい、立派な體骼を持ち、西部では一番上手な騎手の一人であつた。彼の從卒は、大尉をさすつてやらねばならなかつたので、その腰の驚くべき乘馬筋に感心してゐた。

それ以外については、從卒は自分で自分に注意する以上には、その仕官の事を殆ど氣に止めなかつた。彼は主人の顏を見ることは稀であつた。彼はまともに顏を見なかつたのだ。大尉の頭には、短かく刈り込んだ、赤褐色の、こはい髮が生えてゐた。彼のひげも亦短かく刈りこまれ、大きな、强さうな口の邊にまばらに生えてゐた。彼の顏はどちらかと云へば粗野で、頰はこけてゐた。この男は、顏の深い線と、怒りつぽさうな眉宇の緊張の爲に多分一層美しく見えたやうである。その深い線と眉宇の緊張とのために彼は如何にも人生と戰つて行く人らしい樣子に見えた。彼の叢のやうな美事な眉毛の下には、明るい碧い眼があり、それはいつも冷やゝかな火できらめいてゐた。

彼はプロシヤの貴族で傲慢で橫柄であつた。併し彼の母はポーランドの伯爵夫人であつた。彼は若い時分に、賭博の爲に隨分澤山な負債を作り、軍隊に於る前途をめちやめちやにして、遂に步兵大尉で留まつてしまつた。彼は嘗て結婚したことはなかつた。彼の地位のためにそれが出來なかつたし、又どんな女を見ても彼は結婚する氣にならなか

つたのだ。彼は乘馬に——時々は自分の馬の一頭に乘つて競馬に出た——又、將校クラブで、時を過した。折々彼は女を買つた。併しさういふことがあつた後は、彼は額を一層しかめ、眼は益々敵意に滿ち、怒りつぽくなつて、勤務に歸つて行つた。けれども部下には、彼は唯無關心であつた。怒つた時には惡魔の樣であつたが…。それ故、大體に於いて、部下たちは彼を怖れはしたが、大して嫌ひもしなかつた。彼等はいや應なしに彼を受入れてゐた。

彼の從卒に對しては彼は始めは冷淡で公正で無關心であつた。彼はつまらぬことには騷がなかつた。それで彼の僕はどんな命令を彼が下し、それをどういふ風にやれば彼の氣に入るかと云ふこと以外には、彼について實際何も知らなかつた。それは全く單純であつた。ところが段々變つて來た。

從卒は廿二歲位で、中脊の、體格のいゝ若者であつた。彼は强健な、どつしりした四肢を持ち、色は薄黑くて、柔い、黑い、若々しいひげを生やしてゐた。彼には何だか全く熱烈で若々しいものがあつた。彼は無表情な黑眼の上に、くつきりとした眉を持ち、その眼はかつて物事を考へたとは思はれず、只その感覺から直接に人生を受入れ、本能によつて直ちに行動したかの樣に見えるのであつた。

段々に士官は自分の側にゐる從僕の若々しい、力强い、無意識的な存在に氣付く樣になつた。士官は從僕が侍つてゐる間、その若い人間の感じから逃れることは出來なかつた。それは殆ど不活潑になり固定して了つた初老人の固い硬張つた身體にとつては熱烈な炎の樣であつた。彼のまはりには何か大變自由で自得的なものがあり、その若者の動作には、士官の氣を止めさせる何ものかゞあつた。そしてそのためにこのプロシヤ人はいらいらさせられた。彼はこの從僕によつて生命に觸れる氣はなかつた。彼は從僕を取換へようと思へば、たやすく取換へることも出來たのだがさうはしなかつた。彼は今や極く稀にしかその從僕を直視しなかつた。まるで彼を見るのを避けるかの樣に、顏をそむけてゐた。而もその若い兵士が部屋のまはりを物も思はず步いてゐる時に、この上官は彼を見守り、靑い着物の下の强い若々しい肩の動きと、頸の曲げ工合を注視してゐるのであつた。そしてそれで彼はいらいらさせられた。この兵士の若い、褐色の、形のいゝ百姓の手が食物や葡萄の罎を摑んでゐるのを見ると、上官の血には憎しみと怒りがひ

らめいた。士官をこんなに迄いらいらさせたのは、若者が無器用だつたからではなくつて、むしろ自由な若い動物のやうな動作に盲目的な、本能的な確かさがあつたからだ。

ある時、葡萄酒の罎を從卒が倒し、赤い酒がテーブル掛けにほとばしり出た時、士官の眼は青味を帶びて火の樣に燃え、まごまごしてゐる若者の眼を一瞬間見すえた。それは若い兵士にとつては衝動であつた。彼は未だかつて何ものをも受けたことのなかつた彼の魂の深みに何かゞ沈む樣に彼は感じた。そのために彼はむしろ茫然とし不思議な感じがした。彼自身の中の或る自然的な自得さがなくなつて、その代りに少し不安心が生じた。そしてその時からわけの分らない感情が二人の間に保たれた。

それ以來、從卒は主人に會ふことを恐れた。彼の潛在意識はあのきびしい青い眼と嶮しい眉を思ひ出して、二度とそれ等を見ることを欲しなかつた。それで彼はいつも主人から視線をそらし、彼を避けてゐた。それからまた、少し心配し乍ら、自分の勤務年限の盡きる三ヶ月後を待つてゐた。彼は大尉の前へ出ると束縛を感じ始めた。そしてこの兵士は士官より以上に一人でゐることを、召使として局外にゐることを望んだ。

彼は一年以上も大尉に仕へて、自分の義務を知つてゐた。如何にも自分にとつて持前の仕事であるかの樣に、たやすく彼は義務を果した。士官とその命令とを、太陽や雨と同樣に自然なものと認め、勿論のこととして仕へた。それに依つて彼は個人として別に心を煩はさなかつた。

併し今や、若し彼が主人と個人的の交渉を餘儀なくされるようなことがあると、彼は捕へられた野獸の樣になつたであらう。逃げ出さねばならないと感じるのであつた。

併し若い兵卒の存在の力は士官の嚴格な規律をつき拔けて、彼の心中をかきみだした。けれども彼は長い、綺麗な手を持ち、動作でみがきの掛つた紳士で、この樣なことのため自分の本性を動かさしむるに堪えられなかつた。彼は情熱的な氣質の男で、いつも自分を抑へてゐるのであつた。時々、兵隊達の前で抑へきれなくなり爆發することがあつた。彼は自分でいつも今にもやり出し兼ねないことを知つてゐた。併し彼は軍隊の觀念に固く身を持してゐた。そ

れだのにこの若い兵士はその熱烈な、滿ち滿ちた本性を生かしきり、彼のさう云ふ動作の中にそれを示すやうに思はれた。その動作には一種の妙味があつて、それは宛も野獸が自由な動作に於いて示すものゝ如き趣きであつた。そしてこのために士官は益々いらいらさせられるのであつた。

何として見ても、大尉はその從卒に對する感情の中和を取戾ことが出來なかつた。且つ又彼はその男を一人でおくことも出來なかつた。我にもあらず、彼は從卒を監視し、きびしい命令を與へ、出來るだけ彼の時間を取り上げようとした。時には彼は若い兵士に對して激怒を發し、彼をいぢめた。すると從卒は、まるで聲が聞えないかの樣に、聞かない振りをした。そして不機嫌な、眞赤な顏をして、その騷ぎの終るのを待つた。何を云つてゐるのかその言葉はちつとも彼には分らなかつた。主人の感情に對して、自己防禦的に、そつぽ向いてゐた。

彼は左の拇指に、深さ關節に達する傷痕を持つてゐた。士官は長い間それを氣にしてゐて、それに對して何とかしてやり度いと思つた。今でもその若々しい、褐色の手には、醜く獸的な傷痕があつた。とうとう大尉は我慢がしきれなくなつた。ある日、從卒がテーブル掛けを掃除してゐた時、士官は彼の拇指を鉛筆で押しつけて尋ねた。

「どうしてそんなになつたのかね?」

若者は恐縮し、氣をつけの姿勢で引き下つた。

「ハツ、木斧でやりました。大尉殿」と彼は答へた。

士官はも少し何とか云ふのだらふと待つてゐた。ところがそれつきりであつた。從卒は勤務に行つてしまつた。上官はムツとしてゐた。召使は彼を避けたのである。そしてその翌日、士官はあの傷痕のある拇指を見るのを避けるのにその意志の全力を用ひねばならなかつた。彼はそれを摑み度いと思つた、――熱い炎が彼の血の中に走つた。

彼は下僕が間もなく自由の身になつて、喜ぶだらうといふことを知つてゐた。今でも、その兵卒は上官を避けてゐた。大尉は狂ほしくいらいらして來た。彼は兵卒がゐないと氣が落着かなかつた、そして彼のゐる時には、苦しさうな眼で睨みつけてた。彼はその無邪氣な、暗い眼の上の美しい、黑い眉を憎んだ。彼は如何なる軍規もこわばらす

ことの出來ない美しい手足の自由な活動によつて激しく昂奮し、その手足は如何なる軍隊的訓練に依つて剛ばらせることが出來なかつた。そして彼は輕蔑と皮肉を使つて、氣が粗く殘酷にいぢめる樣になつた。若い兵卒は益々無口で無表情になるばかりだつた。

「まともに見られないなんて、一體お前はどんな奴ばらに育てられたんだ？　己が話してゐる時は己の眼を見ろ。」

すると兵卒はその暗い眼を士官の顏に向けたが、眼には視覺がなかつた。つまり、彼は出來るだけ視線を弱めて見つめ、その視力を控へ、主人の眼の青さを認めても、そこから何らの眼光をも受容れないのであつた。そこで上官は顏面蒼白となり、その赤らんだ眉はひきつつた、彼は、峦しく命令した。

ある時彼は若い兵卒の顏に重い軍隊用の手袋を投げつけた。その時、從卒の黑い眼が自分の眼に向つてキラキラ輝き、宛も麥わらが火の上に投げられた時の炎の樣であるのを見て、溜飲を下げた。そし彼は少しふるへながらあざ笑ふのであつた。

併しもうあと二ケ月だけであつた。若者は本能的に、自分をそつとその儘にしておかうとした。彼は士官がまるで抽象的な權威であつて、人間ではないかの樣に仕へようとしたのである。凡ゆる彼の本能は、個人的の接觸を、確定的な憎惡をさへも避けようとした。けれども士官の情熱に應じて、憎しみは我知らず增した。それでも、彼はその憎しみを抑へてゐた。彼が軍隊を去つたら、それを敢へて認めることが出來るだらう。生れつき彼は活動的で、多くの友達を持つてゐた。その友達らは、何と驚くべき善良な奴等だらうと彼は思つた。併し、それを認めなければ、彼は孤獨であつた。今や、この孤獨感が强められた。彼は勤務期間を通じ、ずつと孤獨に惱むであらう。併し士官はいらいらして狂ほしくなつて行く樣に見え、そして若者の恐怖は深められて行つた。

この兵卒には、獨立不羈な、原始的な山の乙女の戀人があつた。二人は、默り勝ちに、一緒に散步した。二人が出掛けるのは話しをする爲ではなく、腕で女を搔き抱き、身體を觸れ合はせたい爲めであつた。このやうにして二人で會へば、彼の心は安まり、大尉を無視することがずつと容易になつた。何故なら、彼は自分の胸にしつかり女を抱き

しめて休むことが出來たから。この樣にして彼女は、何とも云はれぬ風にして、彼のために存在してゐたのだ。彼等はお互ひに愛し合つてゐた。

大尉はそれを知つて、いらいらして狂ほしかつた。彼は若者を一晩中仕事させ、彼の顏色が暗くなるのを見て樂んだ。時々、二人の男の眼がかち合つた。若者の眼は不機嫌で暗く、犬のやうに剛情で、不變であり、年長の男の眼は落着きのない輕蔑を浮べ嘲笑的であつた。

士官は自分を捕へてゐる情熱に身を任せない樣に一所懸命つとめた。從卒に對する彼の感情は、愚かな、ひねくれた召使に對して怒つてゐる男の感情以外の何物かだといふ事を、彼は認めようとは欲しなかつた。それで、意識では全く當り前であり普通の事だと云ふことにして、彼は他の事を進めてゐた。けれども、彼の神經は惱んでゐた。とうとう彼は帶の端で召使の顏をひつぱたいた。若者がタヂタヂとなり、その眼には苦しみの涙があふれ、口には血がしたゝれるのを見た時、忽ち彼は深い快感と羞恥とを全身に覺えた。

併しこんなことは彼が今迄決してしなかつたことだといふことを、自ら認めた。奴もやはり激怒してゐた。彼自身の神經も粉々になつて行きつゝあるに違ひない。彼は數日の間、ある女をつれて遠出をした。

それは快樂ならぬ快樂であつた。彼はてんで、女を欲しなかつたのだ。併し彼は自分の時日のあるだけ滯在し續けたそれが終ると、彼はいらいらし、惱ましく、みじめな苦痛の內に歸つて來た。彼は夕方ずつと乘りつゞけ、それからまつすぐに夕食にやつて來た。從卒は居なかつた。士官は腰を下しその長い、綺麗な手を、テーブルの上に投げ出したその手は完全に靜つとしてゐて彼の血が總て腐りつゝある樣に思はれた。

遂に召使が入つて來た。士官は從卒の强い、和やかな若々しい姿、美しい眉を、ふさふさした黑い髮を見た。一週間で若者は以前の健康をとりもどしてゐた。士官の兩手はうづうづし、狂ほしい炎に滿ち充つる樣に思はれた。若者は氣をつけの姿勢で、身動きもせず、固くなつて立つてゐた。

食事は沈默の內に進められた。併し從卒は一所懸命の樣であつた。彼は皿をカチカチ音させた。

「急いでゐるのかね」と、士官は召使の一心になつてゐる、熱心顔を見つめて、訊いた。相手は返事しなかつた。

「俺の問ひに答へるか？」と士官は云つた。

「はい。」と從卒は、積み重ねた軍用の深い皿を持つて立ちつゝ、答へた。大尉は暫くそのやうにしてゐて、彼を見つめ、それからもう一度尋ねた。

「急いでゐるのか。」

「はい、」その答へに依つて相手はハツとした。

「何を急いでゐるのか？」

「出掛けることにして居りました。」

「今晩お前に用があるんだ。」

一瞬間のためらひがあつた。士官は奇妙に顏をこわばらした。

「はい。」と召使は、喉の中で答へた。

「明日の晩もお前に用事があるんだ——實は。俺がお前に許可を與へない限りは、晩には用があると思つゐたらどうだ。」

從卒は若々しいひげの生えた口をむつつりと閉ぢてゐた。

「はい。」と從卒は一瞬間、唇をゆるめて答へた。

彼はもう一度扉の方に向つた。

「何だつてまた、耳に鉛筆なんかはさんでゐるんだ？」

從卒はためらつたが、それには答へないで扉の方に歩いて行つた。彼は扉の外側で皿を積重ね、鉛筆の使ひふるしを耳から外し、それをポケットに入れた。彼は戀人の誕生日の祝ひのカードに書く爲に詩を寫してゐたのであつた。

彼は食事のあと片付けをすつかりすませようとして、もどつて來た。士官の眼はおどり、一寸、一所懸命な微笑をた

ゝえてゐた。

「どうして耳に鉛筆なんかはさんでゐるんだ？」と彼はきいた。

從卒は手に皿を一杯取り上げた。彼の主人は、顏に一寸微笑を浮べ、顎をつき出して、大きな綠色のストーブの近くに立つてゐた。若い兵卒が彼を見た時、兵卒の心は急にたぎつた。彼は目が見えない樣に思つた。答へないで、彼は目がくらんで戶の方に向つた。彼が皿を置かうとしてかゞんだ時、後から一蹴りされて前にのめつた。皿は階段をガラガラと流れ下り、彼はてすりの柱にしがみついた。主人はす早く部屋に入つて、扉を閉めた。階下の召使女は階段を見上げて彼は暫くの間苦しげに柱にしがみついた。そして彼が立上つてゐた時に、またまたひどく蹴られたのでこのつまらない事件にあざけり顏を示した。

士官の心臟はドキドキした。彼は自分で一杯の酒を注ぎ、その一部を床にこぼして、冷い、綠色のストーヴに寄りかゝりつゝ、殘りをラッパ呑みにした。彼は下僕が階段から皿をよせ集めてゐる音を聞いた。酩酊したかの樣に、蒼白くなつて、彼はぢつとそのまゝにしてゐた。召使はもう一度入つて來た。若者が苦しげに、足もとがよろよろして危かしいのを見て、大尉の心は、嬉しい樣な苦しみを感じた。

「もつとちやんとしろ！」と彼は云つた。

兵卒は普段のやうに直ぐさま氣をつけの姿勢になれなかつた。

「はい。」

若者は可愛い、若々しい口ひげと黑大理石の樣な額の上にカッキリと美しい眉毛を持つて、彼の前に立つてゐた。

「已はお前に訊いたんだよ。」

「はい。」

士官の語調には酸味があつた。

「どうして耳に鉛筆をはさんでゐたんだ？」

もう一度召使の心はたぎつた、そして息をすることが出來なかつた。黑い、張り切つた眼をして、まるで幻惑されたかの様に、彼は士官を見つめた。そして彼は意識を失つて、しつかりと植ゑ付けられた様にそこに立つてゐた。しなびた微笑が士官の眼に現れた。そして彼は足を上げた。

「私――私、忘れたのであります――」兵卒は喘いで云つた。彼の暗い眼は士官のおどつてゐる青い眼を見すえてゐた。

「あそこで何をやつてゐたんだ?」

彼は若者が言葉を出さうとして力めてゐる時、その胸が波打つのを見た。

「私は書いてゐたのであります。」

「何を書いてゐたんだ?」

再び兵卒は彼を見上げ、見下した。士官には彼が喘いでゐるのが聞えた。微笑が青い眼に現れた。兵卒はかわいたのどをつとめて聲を出さうとしたが、話すことが出來なかつた。突然微笑が士官の顏に炎の様に輝き、從卒の腿に一蹴りひどく當てられた。若者は一歩脇にすさつた。彼の顏は死んだ樣になつて、二つの黑い眼だけが輝いてゐた。

「さあ?」士官は云つた。

從卒の口は乾ききつて、舌が乾いた褐色の包紙の上での樣に、口の中でこすれた。彼はのどを絞つた。士官は足をあげた。召使は剛くなつた。

「詩であります。」と彼の聞きとれない、震へ聲が洩れた。

「詩だつて、何の詩だ?」大尉は、いやな微笑を浮べてきいた。

再び兵卒はのどを絞つた。大尉の心は急に重くるしく沈み、彼は胸ぐるしくなり勞れて立つてゐた。

「私の女の爲であります。」といふひからびた、人間らしくない聲を彼は聞いた。

「おゝ!」彼はくるりと向きをかへて云つた。「テーブルを綺麗にしてくれ。」

「コクリ！」と兵卒ののどが鳴つた。するとまた「コクリ！」と。やがてやゝ判然とした聲が、——

「はい。」と云つた。

若い兵卒は、年寄の樣に、又足も重さうに、行つて了つた。

士官は獨りになつて、物を考へない樣に身をこわばらしてゐた。彼の本能は物を考へてはならないと警告した。彼の心の奥深くには、情熱の深い滿足が尙も力强く動いてゐた。併し今その反對の動きとして、彼の心の中の何物かの恐ろしい挫折が、全く苦しい反動が來た。彼はそこに一時間も、身動きもせず、混沌とした感覺を抱いて、併し意識を白紙にしておかう、心に何物をも捕へまいとの意志を以て固くなつて立つてゐた。そして彼は、最もひどい緊張が過ぎ去る迄、さう云ふ風にしてゐた。それから彼は飲み始め、醉ひつぶれる程飲んで、とうとう生體もなく眠つて了つた。翌朝、彼が眼覺めた時、彼は本性の底まで震盪されてゐた。併し彼は自分のやつたことの現實を忘れようと戰つた。彼は自分の心にそれを取入れるのを妨げ、本能的にそれを抑へつけて了ひ、かくて意識人としての彼はそれと何の關係もなかつた。彼は只醉ひつぶれた後の樣に弱つてゐたが、事件そのものは全くぼんやりして想起さるべくもなかつた。彼は情熱に溺れたことについては、首尾よく記憶を拒けた。そして從卒がコーヒーを持つて現れた時、士官は前日の朝と同じ自分になつてゐた。彼は昨夜の出來事を心に拒け——そんなことがあつたのを否認し——、そして首尾よくその否認をなし遂げた。彼はそんなことは何もしなかつたのだ——彼自身では何もしなかつた。何事があつたにしても、それは愚かな、不從順な召使のせいであつた。

從卒は、夜中ぼんやりしてぶらついてゐた。彼は喉頭が乾いたのでビールを幾らか飲んだが、併し澤山は飲まず、アルコールのため彼の感情は戾つて來て、彼はそれに堪えることが出來なかつた。彼は自分の中の普通人の十分の九がまるで無感覺になつた樣に、ぼんやりしてゐた。彼は無恰好に、とぼとぼと步いてゐた。蹴られたことを思ふと、今でも彼は口惜しくなり、これからも部屋の中でもつと蹴られるだらうと思ふと、彼の心は赫となり滅入り、さうして先刻の、あの一蹴りを思ひ出して喘いだ。彼は「私の女の爲であります」と云はせられてしまつた。彼は泣き出し

度くなる程いためつけられてゐた。彼は、馬鹿の様に、口を少し向けてゐた。彼は空虚に、すり減つた様に感じた。それで彼は碌々仕事に手がつかず、苦しげに、さうして非常にのろのろと無器用にやつてゐた。ブラシをさがしても眼に這入らず、一度腰を下すと、また立つて動く氣力が出ないやうに思つた。彼の四肢、彼の顎は、ゆるんで神經がなかつた。けれでも彼は大變勞れてゐた。彼はとうとう床に着いて、無感覺に、ぐつたりとなつて眠つた。眠つたといふよりも無感覺狀態で、苦痛の微光を以つて貫かれた、死んだ様な昏醉の夜であつた。

翌朝は演習があつた。併し彼は喇叭が鳴る前にもう眼が覺めてゐた。胸のヅキヅキする痛み、のどの乾き、恐ろしく根强い慘めな感じの爲に彼の眼は覺めたが、同時に曇つてゐた。彼は、考へるまでもなく、前日に何が起つたかを知つてゐた。そして彼は自分の持役をやつて行かねばならない日が再び來たことを知つた。部屋は隅々まですつかり明るくなつた。彼はしびれた身體を動かして出掛けねばならないと思つた。彼はまだ若くて、これまで餘り苦しいと云ふことを知らなかつたので、我ながら面喰つた。彼は只暗闇に包まれて、靜かに横つてゐることが出來る様に、何時までも夜だとよいと思つた。而も何ものも夜が明けるのを妨げるものもなく、起上つて大尉の馬を用意し、大尉のコーヒーを作らねばならないことを何ものも妨いでは吳れなかつた。明けるべき夜は明けた。さうしてその時、彼はそれを不可能だと思つた。併し人々は彼をそつとしておいてはくれなかつた。彼は大尉にコーヒーを持つて行かねばならない。彼はそれを理解するには餘りに氣が滅入つてゐた。彼にもそれが避くべからざることだけは分つてゐた。――どんなに長くぼんやりとして横になつてゐやうとも到底避くべからざることだと云ふことだけは分つてゐた。

遂に彼は身體を持上げて(何となれば、我ながら無感覺の塊りの様に思はれたので)それから彼は起き上つた。けれども彼は一つ一つの動きにも、自分の意志を以て背後から推さねばならなかつた。彼は滅入り込み、眼がくらみ、ぐつたりした様に感じた。それから彼は寢臺を掴んだが痛みが、大變ひどかつた。そして腿を見ると、黑い肉にうすぐ黑い傷痕があつた。その傷痕の一つを指で押すと、たまらないだらうと思つた。併し彼はたまらない思ひをし度くはなかつた――彼は誰にも知られ度くなかつた。何人にも知らせてはならないと思つた。それは彼と大尉との間のこと

であつた。今や世界に二人の人間きり居なかつた——彼自身と大尉と。

彼はゆつくり、骨を折つて、着物を着て、無理に歩いた。自分が手にとつたものだけを除いて、凡てはぼんやりしてゐた。併し彼は仕事をやらうと工夫した。痛みのために却つてやうやく彼の鈍い感覺が再生して來た。未だ最惡のことが殘つてゐた。彼は皿を持つて士官の部屋まで行つた。士官は、蒼白い顏をして身體も重たげに、テーブルの所に腰掛けてゐた。從卒は、挨拶した時、身も消え入る樣に感じた。彼は自分の無感覺に身を任せて一瞬間じつと立つてゐた——やがて勇氣を振ひ起し、囘復した樣に思へた。すると大尉はぼんやりと、うつゝではなくなり始め、若い兵卒の心臟はドキドキした。自分自身が生きて行ける爲に、彼は、大尉が存在しなくなつたといふ、——この狀態に執した。けれども士官がコーヒーを取上げた折その手がふるへてゐるのを見て、その時彼は凡ゆることが滅茶々々になつたと思つた。そして彼は、まるで自分が滅茶々々になり、ばら〳〵になつてゐるかの樣に感じて、行つて了つた。そして大尉が馬上に跨がり、命令してゐる間、彼自身は銃と背嚢を持つて苦痛に惱みつゝ立つてゐたが、彼は眼を閉ぢてゐなければならないかの樣に感じた——あだかも凡ゆることに眼を閉ぢてゐなければならないかの樣に。たつた一つ、喉頭を乾かして行進する長い苦惱のためにのみ、彼は唯一の眠たく重い望み——自分を救ひたいとの望み——を抱くのであつた。

編輯者曰——右は『プロシア士官』の最も面白い部分——同性愛感情の抑壓されて、その反對の憎惡として意識されてゐる心理過程を描寫したもので、精神分析の文藝に及ぼした直接影響の見本として、注目すべき部分である。

時評

時言・數題

大槻憲二

一、少女貞操擁護法案に就いて

五月二十五日の都新聞は『女の貞操を護る革新的な刑法改正』と題して左の如き記事を掲げてゐた。

「妻の承諾なしに妾を圍ふ者は姦通罪として罰する、と云ふことで好色な男たちには大恐慌を與へ、全日本の女性たちからは歡呼の嵐を浴びた刑法改正委員會は、目下司法省で條文の整理中だが、この改正案には更に女性の貞操を擁護する革新的な條文が加へられることになつてゐる。其の一は『業務若くは雇傭の關係上自己の監督に服する未成年の婦女に對し威力を用ひて之を姦淫したるものは五年以下の懲役に處す」(第三百五條、姦淫の罪)

「で、重役や課長がタイピストや女事務員を、校長が女教員を、主人が女中を、さては映畫監督が女優を、等々自己の地位を利用して否應なしにその意に從へ」る場合を根絶しようと云ふのであつて、これは誠に結構な法律には相違ないが、併しそんなことで、この種の不幸が防止出來るであらうか。私は疑ひなきを得ない。

第一、「威力を用ひ」たのか用ひないのか、そんな事がどうして知れるか、

ABHUB アプフウブ

他の學問がアプフウブ(屑)として棄てたものゝ中から、分析は眞理の黄金を探し出す。

森田正馬氏を分析す

不老泉院主

『神經質』十一年四月號に、森田正馬氏その亡夫人の思ひ出を語れる内に、次の一節がある。

「或日の午後であつた。椽側で余と久亥(亡夫人)と行き會つた時に、フト見れば四、五間先の庭の垣根の彼方に、鷄が犬に追ひつめられて、將に其尻を喰はれんとしてゐる處である。久亥は『アレ〳〵早く〳〵』と叫ぶ。余は例の如く『あしや合點が行かぬ』を繰返し、首を傾け考

結局、水掛論に終りはしないか。而も、若い女は男の威力に魅力を感ずる傾向の强いものであるのだから、愈々問題は複雜になつて來る。

第二に、如何に「未成年の婦女」とは云へ、男の「威力」に服するほど沒人格的であると認めることは、婦人に對する侮蔑を意味するとも云へる。「威力を用ひて」などゝ云ふ常識的な、曖昧な文句を法律條文の中に入れることは、甚だよろしくないと思ふ。一層こんな文句は入れなければ却つてよい。動機の如何を問はず、形からばかり見るならその方がはつきりしてゐてよい。「解釋」に困るやうな餘地を殘す位なら、そんな法律はやめにするか、或は純粹に形式主義で押通すか、どちらかだ。

右の條文につき、大審院第一刑事部長判事泉二博士は、かう云つてゐる。「…同じことでも奪ふ目的物が財物であると、それは詐欺となり脅迫の罪となるのに、それが貞操である場合には何の罪にもならないと云ふのは不合理であり不道德である」云々と。

仰言る通りであるが、貞操を財物と完全に同一視する事は不可能であらう。且つそれは財物と異り、うつかりしてゐる間に奪はれると云ふことは事實上殆どあり得ないからである。奪はれたやうに見えて（本人はさう主張しても）實は（無意識的には）提供してゐる事が多いので、それは幾多の事實が證明してゐる。且つ、處女性タブーの名殘りとして初夜權を父親格の人に承認せんとする傾向が少女等に於いて今なほ强いことは、殆ど疑ふ餘地がないらしい。かゝる心理上の契機を少女側に於いて處致する方法を講ぜずして雇傭主、監督者側の惡漢性を懲罰せんとすると云ふ末節的な方法に出でることは（それ以外に法律としては途はないのだが）百年河淸を待つ如き憾みが

へ込んで、其鷄を助けようともしない。久亥は其時恰度、洗面器に湯を一杯入れたのを持つて居る處であつたが、それを下に置く間ももどかしく、裸足のまゝに驅け出して犬を追ひ拂ひて鷄を助け、內の鷄舍に入れた。久亥のかゝる行動の間にも、余は相變らず、椽側に立ちつくし『あしや合點が行かぬ』を繰返してゐる。

（中略）

『余が合點が行かぬ』と考へ込んだのはこれまで度々、鷄が小舍から出て困るので、昨日骨を折つて、嚴重に金網の修繕を仕上げた處であつたからである。兎も角も余が、目前に犬に喰はるゝ鷄を見て居ながら、臨機の處置をとる事の出來ぬ、余の頭の間拔けさ加減を面白可笑しき語り草として、人々に語り傳へて居たのである。」と。

これで見ると、森田氏は知的ナルチスムスの病が膏盲に入つてゐると見える。自分が金網を修繕したら、絕對に犬などが破つて這入ることが出來ぬ筈だ。筈（ゾルレン）だから有り得ない（ザイン）と信じてゐるところに、氏のナルチスム

ある。河下に堤防を築いて氾濫を防ぐのもよいかも知れないが、河上に植林して水流を適度にすると云ふ本源的方法を顧みないのは、如何にも法律家や爲政家の迂愚を示してゐると思ふ。本源的方法は分析以外にはない。

二、漢字全廢論可否

今の文相平生氏は漢字全廢論者であるさうだが、それに對して、六月三日東朝紙『オベリスク』欄に於いて、佐藤春夫氏は『漢字奬勵論』を試みてゐた。議論の正鵠は兩極論の中間に大抵の場合あるのだと云つて大過はない。この場合にも、私は漢字制限論者であつて、全廢論にも奬勵論にも反對する。ローマ字論やエスペラント論にも私は贊成ではあるが、あまり急激な主張をされるならば、反對したい。文化の變改は徐々に行はれる。それに言葉と云ふものは、大部分が人類の無意識の表現として出來たもので、改革論は多くは純粹の意識的立場に立つてゐる、そこに大きな齟齬がある。人類の無意識が現在のまゝである以上、言語運動家が如何に地團太を踏んでも、言葉や文字はなかなか思ふやうに變革されるものではない。

私はかつて「ローマ字論者の國粹趣味の會」と云ふ新聞記事をよんで興味を覺えたことがあつた。大分以前の事で彼等が何をしたのか忘れたが、何でも彼等ローマ字論者も國粹趣味を理解し尊重しないものではないと云ふことを、天下に呼號するための會であつたことだけは確だ。私はそれを讀んで、はゝあ、ローマ字論者にはローマ字論者の罪障感（母國に叛くと云ふ）と劣等感（外國盲拜主義だと云はれはせぬかとの）があるのだなと思つて、をか

ス、或は妄想性があると云ふのだ。ゾルレンはこの場合、願望である。願望と現實との區別のつかないところに、氏の頭の病理性がある。

この「間拔けさ加減」（久亥亡夫人の常用語にして余が失禮にも用ゐるものに非ず）はそのまゝ氏の精神分析學に對する態度に現はれてゐる。氏は自分の作つた森田療法の鷄を保護するために、神經質の理論の金網を張廻しておいたのだが、いつの間にやら惡戲者の精神分析の犬がそれを破つて鷄のお尻に嚙みつかうとしてゐるのに、ナルチティッシュな氏は、「合點が行かぬ〳〵」と云つてお尻を上げようとせぬ。その間に段々森田療法のお尻は分析犬に喰はれて了ひさうになつてゐる。俗に云へば剛情な氏だが、これは知的ナルチスムスの病理性だ。

鷄のためには犬を追拂つた賢夫人久亥さんが居たが、療法のために分析を追拂ふ（或は取込む）門下がゐないらしい。時々雜誌に批評らしいものが出るが、何れを見ても失禮ながら山家育ちで、取合ふ氣にならない。

しかつたり氣の毒であつたりした。そんなコムプレクスを持つてゐるやうでは運動は地に着くものではない。また現に地についてゐない證據だ。その運動者それ自身が容易に逆轉する危機を孕んでゐる。それは丁度、小兒病左翼運動家が容易に右翼化するのと同じである。何事でも、まづ分析から出發しないものは、信用が出來にくい。極端なことを云ふやうだが、事實がさうだから仕方がない。（完）

琉球古典藝能大會を觀て折口博士に問ふ

倉橋久雄

五月三十、三十一兩日、日本青年館に於て開催された、この特殊な催しを見せて貰つた。舞踊は全部で十七見たが、どれもそれぞれ趣があつてよかつた。全體に衣裳が華麗で踊りが明るく氣持がよい。就中、鳩間節は琉球でも異色ある踊りださうだが、テンポが速く明朗で輕快に踊り拔く上に、踊り手の巧みさと綺麗さが加算されて、この催で第一の喝采を克ち得たことと思はれる。この踊り手、新垣芳子氏にもう一人加はつての谷茶前節も、前同樣アンコールされたものだが、擢と笊を持つて踊る可成煽情的なものである。それが南國的な濱千鳥節から天川踊となると、見てゐて一寸恥かしい位にエロチックで、性的象徴が歴然として來る。だが、それは一應昇華された形をとつてゐる爲め、觀衆には氣附かれず、盛んに拍手で迎へられてゐたが、遂に

同じ號に森田氏は「サディスムスとか云ふのを人間の種々の心理の說明に濫用するのはフロイド學派の癖であつて、私はこれが嫌ひです」と云つてゐる。こゝに於いて氏は宗全に科學者たるの權利と名譽とを放棄してゐる。詩人としてなら、我々も氏に劣らず「濫用するのは嫌ひです」よ。併し好かうが嫌はうが、事實ならば仕方がない、我々が常々云ふ「感情の認識への干涉」振りを暴露して恥ぢないのだから無邪氣なものだ。

私は氏が日本の精神病學界に遺した一つの功績を認めないものではない。それは從前、肉體的見解に囚はれて二進も三進も行かなくなつてゐた斯學に、心理療法の新分野を打開したことであつた。然るにいつまでも陳腐な學說に固執しておると云ふのだから、呆れる。氏はもう功成り名遂げた過去の人だからそれもよからうが、氏の門下にも少し眼先のきいた新人はないものか。

けるのが多い。足の蹈み方、踊の間のきまり方にあるさうであるが、いかにも尤もとうなづ滋味が好ましかつた。總じて琉球舞踊の特色は手の使ひ方、上體の動し方、ゐたのかも知れない。その他、私としては老人踊のおつとりした古めかしいアンコールされなかつたのを見ると、觀衆も無意識的にではあるが氣附いて

劇は四つあつた。『二童敵討』、『銘苅子』には、部分的に退屈な所があつたが、『花賣の緣』、『執心鐘入』となると、劇的要素が濃厚となつて、始終面白く見られた。『執心鐘入』は內地の道成寺に似通つてゐて、終り近く娘の執念に恐れをなした美少年若松が、慄えながら寺の和尙の救けを求めるあたりから、鐘の中に這いつた娘が蛇體になつて出て來て、昔話の『和尙と小僧』にあるやうな小僧共のおかしな科があり、それを執心の蛇に化した娘が追ひ廻す所など、觀客中の子供は泣くし、大供は喜ぶしと云ふ有樣。『花賣の緣』は、生活難のため妻子を鄕里に殘して來た男が、落魄の身で尋ねて來た妻子と再會しなければならぬと云ふ芝居で、猿廻しとか木樵の老爺とかが出て來て、一家共に再會するの喜びを强調してゐる。

『二童敵討』は父を討たれた兄弟の仇討物であるが、續いて『銘苅子』は琉球の羽衣傳說の劇化である。子供の子守唄によつて羽衣の在所を知つた天女が、それを身につけて昇天する。農夫は子供二人を抱いて途方にくれる。それを哀れに思つた領主が、城內に引取つて、銘苅子に位階を授けると云ふのである。傳說では天女が昇天した所で終つてゐる。尤も、これら演劇や組踊は、明治以前は國王の保護の下に支持されてゐたものださうであるから、この改作もその邊考慮されての事であらう。

日本人の戰爭神經症

東京朝日新聞に連載の『一水兵の日本海海戰』六月三日、當時浪速乘組一等兵曹河合五郎氏の談に、次の一節があつた

「戰爭は奇蹟を生むものだ。俺達の浪速には不幸にもこの時病床に呻吟する數人の病兵が居たのだつたが、この朝愈々出港準備の命令があり總員點火の號令がかゝつた時、この病兵達がどうしたものかみんな病床を脫け出して甲板へ上つて來てゐた。

「おい、どうしたのだ、病氣ぢやないか？」

「いや、病氣なんかなほつてしまつた」

戰友達の不審さうな顏、そんな顏には頓着なくこの病兵達はみんながけろりとして我先きにと部署につきに行くのだ、俺達は驚いた、それより軍醫の驚き方の方が大變だつた、慌てゝ各部署を走りまはつて病兵を一人づゝ捉まへて廻るのだ、だが彼等が軍醫のいふことをきく筈はなかつた。

「病氣はもうすつかり癒つたのでありま

それと、この『銘苅子』の淡々たる話し振りに興味を覚えた。例へば、子供を寢かした天女が、ひとり昇天する。やがて子供が起き出して昇天して行く天女に喚びかけるのであるが、はがゆい許りの無表情さと芝居氣のなさ、弟が姉に云ふ「おめ！　をめなりよ、母や、白雲の隱ち見らぬ」とのセリフの何氣なさ、少し前の「わねもつれ昇ら、やあ、母親よ〳〵」と云ふ子供と母のそれに答へる「これ迄よと思ば、飛びも飛ばれぬ、なし子ふやかれの百の苦れしや」のあたり、ドラマティックな劇に慣れ切つてゐるものに奇異な感を抱かせるほどであつた。然しながら、この非演劇的な演出が、返つて逆效果を生んでゐる點が面白いのだ。多分作者は『銘苅子』、『二童敵討』、『執心鐘入』と順次劇的な要素を身につけて來た譯なのであらう。折口氏は『日本民俗』誌中に「實は、銘苅子の發見したのは羽衣ではなかつたのであるがそれを謠曲の『羽衣』風に直してゐる」と云つてをられるが、その何であつたかを明かにしてゐない。出來得るならば、またの日同誌上で銘苅子の發見したものが何であつたかを敎へて頂きたい。

當夜の感想を終るにあたり、この度、この意義ある催しによつて琉球を知らしめて呉れた事を、生みの親であるは日本民俗協會に感謝すると共に、關係者諸氏の勞を多としたい。

終りに折口信夫氏の組踊りの話（日本民俗、第十二號所載）中での「『二童敵討』は疑ひもなく『小袖曾我』の燒直しである。」と云ふ說に對して、以下私自身の理由を擧げて、なほその點、考慮の餘地の存するのてなからうかとの疑ひを述べて見たい。

『小袖曾我』は、曾我兄弟が母に對するエディポス的な愛着の葛藤を描いた

す！」

「そんな馬鹿なことはない！」

側で聞いてゐる俺達はをかしかつた。戰ひの前だといふのに俺達はどつと吹き出したい氣持にさへなつた。この病兵騷ぎは結局軍醫の負けになつた。

無理やりに軍醫のあてた聽診器に狂ひがなかつたのならば病兵達の癒つたといふのは本當だつた、奇蹟の勝利だ！　信じていゝ奇蹟だつた、かういふ奇蹟を目のあたり見て俺達の心は五月の朝の樣に朗らかになつたものだつた、病兵達はみな我々と一緒に新しい下着をつけ新しい服を着て部署につくことを許された。

これを讀んで、病兵たちの突然の全快を「奇蹟」だと思ふ人は思ひたい願望のある人か、或は精神病理に通ぜざる人である。我等はこれを戰爭神經症への逃込みが遂に追付かなくなつて、窮鼠却つて猫を嚙む式の勇猛心を奪ひ起し（全快し）たものと解する。

日本人には戰爭神經症がないなどと考へてゐる人は今時殆どあるまいが、自己保存本能と云ふものを持合せてゐない人

もので、分析的に飜譯すると、主從三人の心理はかうであらう。
母。十郎は嫡子だからせん方ないとして、五郎だけは生かして置きたい。それには出家にさせて置くがよい。たつてせぬとあれば（別の云ひ方では、仇討に行くとあれば）再び勘當だとおどしてやらう。それで五郎が出家にでもなつてくれればよいが。
十郎。その母の心を讀んで「自分ばかり死なせるのはひどい。死なば弟と諸共だ。母の許に弟を殘して、何んで自分のみ父の敵仇だとて行かれるものか。」
五郎。兄とばかり嬉しげに盃を汲み替し、同じ母の子、同じ乳母に育てられて、こんなに自分がないがしろにされるとは。あんまりつれない母上だ。
試みに、謠曲のこの個所を引用しよう。
母。「あら不思議や。祐成は唯今來りぬ。九上の禪師は寺にあり。それならで子はなきに。時致といふは誰ぞや。今思ひ出したり。箱根の寺にありし箱王といひしえせ者か。それならば母が出家になれと申しを聞かざりし程に勘當せしに。おしてこれまで來れるは、なほ重ねての勘當とや。伊豆箱根富士權現も御覽ぜよ。猶この後も勘當と。
五郎。
シテ『いつしか親子の御戲れ。めづらし顏や羨ましやと
五郎舞臺を見て、（そこで母と十郎の酒盛ありて……）
地『高間の山の峯の雲よそに見てや止みなん。同じ子に。同じ柞(ははそ)のもりめのと。同じ柞のもりめのと。隔てなくてそ育てしに。さもひきかへて祐成には。いろいろのおもてなし御祝事のお盃。たとへば時致は。後に生ま

問のない以上、何處にだつて、戰時には戰爭神經症の起きるのが自然である。起きるのを當然として分析で治療する方策を建てる方が寧ろ愛國的である。戰爭神經症に就いては、本誌第一卷第一號『戰爭心理研究號』に高水力太郎氏の論文が出てゐるから、參照せられたい。

扇・使ひわけ（漫畫分析）

これは昭和十年六月廿四日の都新聞に掲げられたもので、作者は藤川清志氏である。「男は盜み見するのにこれを用ゐ、女は防ぐためにこれを用ふる」と作者は註釋して、同じものが相反の用途に供せられることに興味を持つてゐるのだ。がこれはなほ一面的の見方に過ぎないやうだ。勿論、この一面は面白い。さうしてこの面を表はすために、作者が男の（覗く方の）扇面を白にし、女の（覗かれるのを防ぐ方の）を黑にしてゐるのは適切だ。白は「明白」で晝を、視姦サィディズムを、黑は「不明」で夜を、視姦マゾヒズムを意味してゐる。序に衣服まで、

れしばかりなり。正しく同じ子の身にて。御覺えあし垣の隔てあるこそ悲しけれ。

十郎。「いかに申し候。われらが親の敵の事。世に隱れなく候處。あまりにたよりなく候間。時致が事を申さば。祐成ともに御勘當と候や。（面を上げ）よくよくこれを案じ見るに。クリ「總じて祐成をもまことは思ひ給はぬぞや。

地「たとひ時致出家の暇を申すとも。兄祐成に郞等もなし。しかも身に思ひあり。おのれらさへに見捨つるかと。却つて御叱り候ひてこそ。慈悲の母とも申すべけれ。

――（明治書院版『謠曲大觀』第二卷）

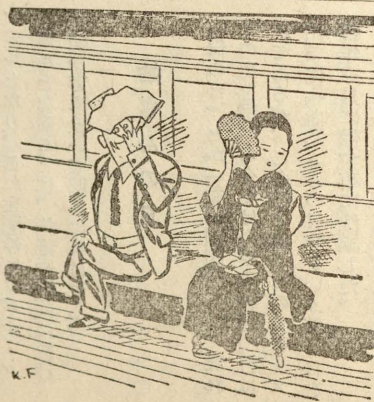
これが『小袖曾我』の根本である。『二童敵討』の何處にこれがあるのだらう。だが、これを『曾我物語』におし擴げて比較して見よう。それにしても理由はあるのだ。

第一に敵役がユーモラスになつてゐる點。もつとも大衆的な演劇は、完全に善玉惡玉式であらねばならぬものだと思ふ。それからすると、曾我での工藤のドキツい惡玉さがなく、より近代性を帶びてゐる。

第二に兄弟が姉妹になつてゐる點。單に、後者のみでなく、衣裳髮飾の華麗さを見られたい。（この際、鶴松、龜千代の名だけに反對の根據を置くのは力弱いと思ふ。）

第三に曾我の如くに武術の勵みを示す所はなく、寧ろ、女としての武器をもつて敵役を魅惑しながら、追ひ跡んで行く點。私は琉球に姉妹の仇討物があるのではないかと思つてゐる。

男は白に、女は黒にしてあるのは、作者としては繪畫的法則に基いてやつたことかも知れぬが心理學的にも適切である。

右は扇のアンビヴレンツ（相反並存性）の一面であつた、他面にはまたかう云へる。男はたゞ見るだけなら扇などを用ゐなくてもいゝのだ。彼が扇を用ゐたのは、やはり第三者又は相手から見られまいと云ふ自己防禦の意圖があつたのだ。その意味に於いて男の扇にも女の扇と同じ意味がある。また女は自己防禦に用ゐてはゐるが、この防禦することが同時に

第四に結びの違ふ點。酒と踊りと敵役とその配下のユーモラスな演技、全體の感じが、女裝せる日本武尊の熊襲征伐や、酒呑童子退治を聯想させて曾我とは縁遠い。

第五に父の死が簡單に扱はれてゐるのと、母がほんの概念的にしか描かれてゐない點。

第六には日本の仇討物につきまとふ執拗さがない。殊に曾我に比して、ねばり稀薄。

第七に敵、阿麻和利（アマオヘ）に對する鶴松、龜千代の日本的な（五郎十郎とは違つた意味の）點。

第八に『日本民俗』誌、琉球舞踊の項所載のものに敵討物が多い點。萬歳に變裝した敵討譚（萬歳踊り）、同じく萬歳口說、萬歳かうす節、おほあむしやり節、さいんする節等。

第九に同誌、琉球の林芝居の項に、『伏山敵討』がある。「舊八月の明月の夜に大抵の部落では芝居が催された。これは單なる娯樂ではなく、豊作と平安を祈る神事の一つであつた。」その時、演ぜられるものに以上の『伏山敵討』がある。『本部大腹（モトブダイハラ）と云ふ惡臣に殺された按司（アジ）の子供連が、舊臣の助力を得て、苦心の末に敵を討つと云ふ筋で、毎年のことだから村中の多數は臺詞をすつかり覺えてゐる。それでも毎年同じやうな感激を以て之を觀た』さうである。

かゝる土壤の上に劇化された『二童敵討』であることを考へるると、「疑ひもなく『小袖曾我』の焼直しである」と斷ずるのはいさゝか輕率でないだらうか。日本から影響されたものであるであらう事は、私も否定しない。然

誘惑することにもなるので、それは衣服の隱蔽が本人の露出慾と同時に相手の窃視慾挑發を意味するのと同じだ。

何れにもせよ、扇の相反並存性に氣のついたことは、漫畫家として大出來である。扇は本來、これを疊めばペニス・シンボルとなり、これを開けばワギナ・シンボルとなることは、舞踊や禮式に於ける使ひ方に於いて明かに伺はれる。

姑さんの日

『母の日』とか『愛國週間』とか、我れ等の母を讃へる企ては今や全世界で行はれてゐるが、この程アメリカのテキサス州では『お姑さんの日』といふ祭り日を毎年三月に催す事に決議した。

主旨に曰く『多かれ少かれ、お姑さんを煙たがる感情（或は彼女に對する無意識的な反抗心）を一掃するにある』と。『お姑さんの日』にはお姑さんの讃歌を歌ひ、花や贈り物を贈り、街には行列、講演會が行はれる。そして行列の先頭の大旗には『お姑さんは、吾等の慈愛と尊

し、全的に焼直しだと云ふには熟慮三考された擧句でなくては困る。然も、折口氏は、同じその文に『執心鐘入』も道成寺の飜譯だと見られる。」と云つてゐる。これも文中解説の條に、「琉球に語り傳へられたものである」と斷りがしてあるのだ。成程、我々日本人からすれば、琉球に日本的なものを見出して、それが日本から移入されたものであるとしたら、二重の喜びを覺ゆることは明白である。然し、折口氏の幕間に云はれた如く、琉球と日本とは元は一つもので、共に朝鮮から、或ひは南方から移住して來たものであるとすれば、なほさら愼重なる態度をもつて、同じはらからの土壤を尊重してやらねばなるまい。その點、伊波普猷氏の『組踊りの獨自性』中の「兎に角、一國の芝居は、決して外國からの一時の模倣で出來るものでなく、必ずや深い國民的傳統や夥しい民俗藝術や祭式舞踊などが積り積つて出來上るのであらう。」と云ふ說に私は贊成である。

私は、計らずも、傳說移入說を思ひ出した。羽衣でも浦島でも、或はその他等々で外國と類似の日本の傳說を見出した場合、日本の學者は直ちにもつて、彼からの移入であると輕卒に斷定する。それは外國の何處、どこにあつたとか、得々然として口にする者が多いが、私は折口氏がさうした人であるとは思はないが、『二童敵討』の如き、何を以て曾我と結びつけられるのであらうか。第一、父を仇たれた兄弟が、母と生別して仇討に上り、苦心の果、目的を達すると云ふ筋は仇討物の定石ではないか。內地から筋を移入しなければ芽生えないやうに思ひ込むのは、民俗思想の自發性を無視し過ぎる。然も、琉球には、かくの如き立派な數々の舞踊と演劇と音樂が創成されてゐるではないか。この問題につき折口博士の示教を得れば幸甚、妄言多謝。（終）

敬との礎の上に安置さるべきである、彼女はそれに慣す』のスローガンが記されゐる筈。

右のやうな記事が、五月九日の東京朝日新聞の家庭欄に出てゐた。米國でも嫁姑問題には惱まされてゐると見えると思つてをかしかつたり氣の毒であつたりする。併しこんな運動ぐらひで何とか處置が出來ると思つてゐるなんて、をかしくはないか。米國の分析者たちは何をしてゐるのかと云ひたくなる。あのスローガンはかう書き直したら嫁さんたちの無意識本書が出るのぢやないか。「お姑さんは吾等の慈善と尊敬との礎の上に安置さるべからず。彼女はそれに慣せず。」と。併しかう考へることは自分でも不快だし罪障をも感ずるので、その罪亡ぼしをしまた憎惡の出直しの理由を新に作り直さうと云ふものであらうか。

新讀書療法

「マドリッド市（スペイン）のラッソ・デ・ラ・ヴェガ氏は、近頃『讀書療法』と

新刊紹介

▼『夢と哲學』ベルグソン原著、廣瀨哲士譯――ベルグソンの夢の說に就いては、旣に本誌第一卷第四號に長谷川誠也氏の詳細な紹介があるから、今更呶々するまでもあるまい。我々は今ここにその完譯を得たことを喜ぶ。英譯と對照して見たが、大體に於いてよく譯してある。本書にはなほ卷末に「形而上學序說」と「ベルグソン雜記」の二論文が附載せられてゐる。後者は譯者の原著者紹介の隨筆である。（東京堂發行、一圓五十錢）

▼『ドストイェフスキーの精神分析』ノイフェルド原著・平塚義角譯――本誌に久しく連載されたものが、その未發表の分を併せて、こゝに完全な形となつて出現した內容の面白いことと譯文の流暢平易であることは、旣に讀者諸君のよく知られるところであるから繰返さない。（二圓、本硏究所出版部）

▼『紙魚供養』齋藤昌三著――書物に關する文獻隨筆、記錄などを輯めたもので、裝幀には諸家の手紙封筒が貼付けてあるし、本文紙は手すき日本紙だし、なかなか凝つた趣味の本である。隨筆には獨自の味がある。（三圓、書物展望社）

▼『紀行・世界圖繪』藤田嗣治繪・柳澤健文――詩人外交官柳澤健氏の紀行文に配するに、世界的に著名な藤田嗣治畫伯の繪を以てす。東京を描き、京・阪・神を描き、巴里を描く。北京素描あり、メキシコ風景あり。內容外觀共に美本。（岡倉書房、貳圓參拾錢）

▼『擁爐漫筆』市島春城著――著者自ら隨筆を作庭に喩へて居る。卽ち本書は著者の創造の花園ともいふべく、擁爐漫談、鎖夏漫錄、紀行、その他多彩。（書物展望社貳圓）

▼『新武藏野物語』白石實三著――考古學、地質學、民俗傳說學、いろいろな方面か

いふものを提唱して嘖々たる好評を得てゐる。

これはつまり讀書による精神療法で、病人が長い間天井と睨めつこをしてイラ〳〵するのを防ぐと同時に、鬪病精神と朗かな神經とを養ふのが目的である。

患者は入院すると職業、年齡及び病狀に應じて適當な圖書目錄を渡され、選んだ書物は看護婦が美しい聲で讀んで吳れる。マドリッドの各病院における讀書療法の結果は、單に生理學的な點からでも頗る有效だと解つた。

右の如き記事が三月七日の東京朝日新聞に出てゐた。「生理學的な點からでも」とあるが、これは生理學には直接關係はなさゝうな筈ではないか。これは心理療法の範圍に入るべきものだらう。精神分析的に說明すれば　讀書に依つて病人のリビドーの退行をつなぎ留めることになると云ふわけであらう。讀書もよからうが、繪畫、殊に寫眞、活動寫眞、それも現實的興味の濃厚なものほどよからうと思ふ。長く病床に臥してゐる人々に對しては、看護者はその方法を忘れてはなら

ら武藏野を研究した隨筆集で、たゞ東京の一市民としても分析學徒としても學ぶところ多く且つ興味深い書である。（二圓、書物展望社）

▼『藤森童話集』藤森靜雄著――「鳩姫」、「不思議な鶴」、「六藏と澁柿」の三部作から成り、何れも如何にも童心的な美しい物語りを集め、且つ著者自身の木版畫が挿圖として多數に收められてゐる。著者は元來本版畫家であるが、童話にもなかなか天分を示してゐる。（一册四十五錢、三册揃函入一圓三十五錢、さくらの實出版部）

▼『哲學と文藝との間』桑木嚴翼著――我國哲學界の泰斗にして謠曲に造詣の深い著者が謠曲文學を哲學的に考究した隨筆的文章が本書內容の大半を占めてゐる。殊に卷頭の「山姥」論は分析學と聯關するところがあつて我等には特別に興味が深かつた。「山姥」をショーペンハウエルの「意志」卽ち精神分析のエスの象徵と解したところはわが意を得た。何人も著者の眼界の廣大なるに敬意を拂はずに居られないであらう。（大日本圖書株式會社、一圓）

▼『文化と無政府』マシウ・アーノルド原著・富田義介譯註――アーノルドは英國十九世紀の如何にも英國人らしい穩健な思想家であつた、その名著『カルチヤ・アンドアナーキー』を譯註したのが本書である。譯文は流暢明快で、原文と照合するに極めて克明。殊に聖書のやうな風にセンテンスに番號がついてゐて原文と譯文とを照合はすに便である。（定價二圓、培風館）

▼『ミル・功利說』富田義介・小倉兼秋共譯註――精神分析倫理學は一種の功利說であるから、その意味で分析學徒は一度はミルの功利說をよんでおく必要がある。恐ろしく丹念な註釋がついてゐる。原著は一代の名著であり、譯註者の良心と誠意とがその價値を倍加してゐる。（一圓七十錢、培風館）

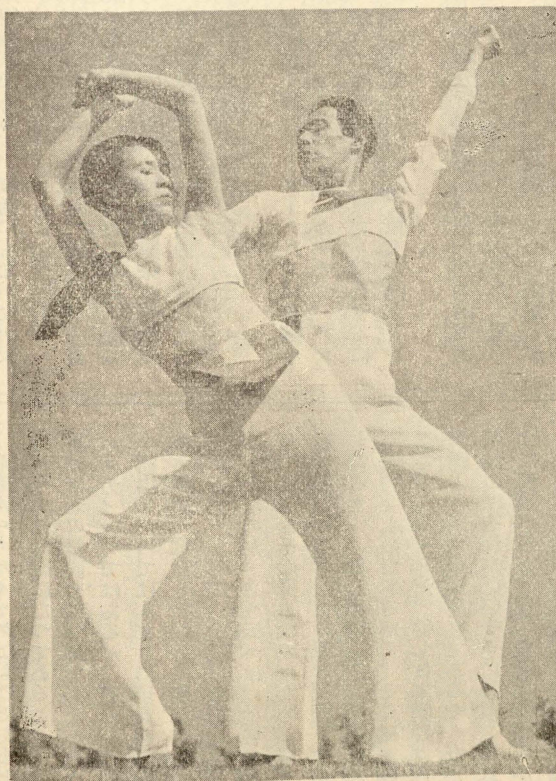
ないだらう。

性と舞踊

舞踊がエロティックなものであるとは殆ど今では常識になつてゐることで、今更分析者の證明を俟つまでもなからう。エロティックではあるが、それをそのまゝ露出したのではあまりに現實感が强過ぎて觀者の抑壓と抵抗とに觸れるから、それを何とか昇華させ或は象徵化してゐるものなのだ。さう云へば、他種の藝術だつてみなその通りなんだから、獨り舞踊に就いてのみ、この點を問題とするにも當るまい。併し舞踊と云ふ藝術は特に原始的なものであるから、その點が特に露骨であるやうだ。併し日本舞踊は西洋舞踊よりは昇華が高度であるやうだが、西洋のはそれが低いやうに思ふ。それだけに刺戟が强い。併し象徵化の點にかけては西洋舞踊の方が發達してゐるやうに思はれる。

分析眼を持たないで、西洋舞踊を見てゐるとる、その象徵の原體がさう露骨に感

ぜられないやうだが、分析眼のあるものが見ると、それがあまり判然し過ぎてゐて、見てゐる方でキマリの悪るなるやうなことが多い、時には閨中動作とあまり違はないやうなのがある。と云ふよりは寧ろこれを極端に誇張したやうなのがある。極端なる誇張はまた一種の歪み（扮裝）である。云はゞ一種の照れかくしの如きものである。照れかくしの居直りのやうなものである。

この頁に掲げた寫眞は昨年十一月頃に江口隆哉、宮操子兩舞踊家が發表した作品の一場面である。觀者は直ちに氣付かれるであらうが、男女二人の構成形體がX字型をなしてゐる。男の高く上げた左手はその意味でこの場合非常によく利いてゐる。X字は十字架や巴卍と關係のあるもので、男女の交りの象徴として人類傳統極めて古いものであるやうだ。私は舞踊研究家でないから、このやうな形態がどれだけ兩氏の獨創であるかと云ふことに就いては何も知らないが、とにかくこのポーズはなかなか面白いと思つて、私は非常に感心した。舞踊家が分析を學べば、その作品は一層の面白さを増して來るであらうことを確信する。（完）

『ドストイェフスキーの精神分析』を讀む

平塚義角譯

富田義介

本書に就ての私の感想を記すに當つて私は先づ譯者の飜譯振りについて、次に本書の內容についての感想を述べることとする。

×

飜譯と云へば兎角杜撰なものの多い世の中に之はまた何とがつちりした飜譯ではある！　實際譯者が想ひの外に――と云つては失禮な物の言方ではあるが――しつかりした腕前を有つてゐるのに、自分は驚きもし又賴もしい人であるなアとも思つた。原文に當つてみないのでさう感服するのは早いぜと云ふ人もあらうが一々原文に當つてみなくとも凡そ飜譯の良否は譯文を讀んだたけで或程度までは分るものである。譯者の先輩なり同輩なりから傳へ聞くところによると、譯者は實に克明な骨身を惜まず物事を取調べる所謂學者肌の人で將來奈何なる專門的研究に從事するとしても必ず大成する人であると云つて口々に褒めてゐるやうである。道理で譯文にも校正にもそつがないと思つた。少し首を傾げたところは四六頁九行「彼は、あの樣にお芝居を打たれた死刑の宣告から、生命に對する打擊を受けた・・・」と云ふ所。四九頁「多くの豫言と同樣に、この豫言も恐らく遲ればせなものではあらうが、然し眞實と認められねばならぬ。そして、アンドレ・ドストイェフスキーの單純な紙白な性格によつて、本當らしく見える事だが・・・」と云ふ所、九八頁三―四行「故に我々はほゞ二十歳の時の作であるこの小說を・・・・」一三一頁「そしてアルカヂーが、彼の着物の中に縫ひ込んで保管してゐる文書の內容は、美人には非常に危險だからその文書を此方へ出せばそれと取り換へに、彼女は彼にその好意を惠んでやつても良いと云ふ事を、彼にはつきりと知らせる・・・」と云ふ所。一三六頁九―一〇行「ドストイェフスキーの人物も、もう一つの時計の樣なものだ」の「もう一つの」と云ふ譯し方などである。それから之は誤譯といふ譯ではないが、較々重大なる過失と思はれるのは、一〇六頁一〇行「二、彼のニヒリスムスの分析」と云ふ譯者の附したる見出しである。「二」は明かに「三」の誤植であるが、私の言はんとするのはそれではない。「彼のニヒリスムスの分析」と云ふ見出しが此章の內容には凡そ不似合なもので讀者を迷はすこと一通りでないと云ふ事である。現に私なども迷はされた犧牲者の一人である。これは「三、ニヒリスムスとの闘爭」又は「三、エディポス・コムプレクスとの闘爭」と書改める可きであると考へる。

私は寧ろ後者を擇ぶ。其理由は玆の內容を熟讀すれば直に領かれることと思ふ。特に一〇八―九頁の「詩人がこゝで描寫してゐるのは、無意識の中に暴れ狂つてゐるエディポス・コムプレクスと人間との偉大なる鬪爭である。」と云ふ所、一一〇頁「虐げられし人々に於て、彼は再びエディポス・コムプレクスと戰つてゐる。」と云ふ所、一一一頁「エディポス・コムプレクスの抑壓が最も首尾よく行つてゐるのは「白痴」である。」と云ふ所、一一三頁「次の小說「惡靈」に於て、この鬪ひは益々激しく荒れ狂つてゐる。詩人は、ニヒリスムス（卽ち父への反抗）に非難の筆を浴びせるためには、如何なる色彩を用ゐても、如何なる調子を以てしても絕叫的であると思つてゐない。」と云ふ所を見ていたゞきたい。又之は些事ではあるが一〇七頁一二行に「未ば十分には」とあるは「未だ十分には」の誤植であらう。又五一頁五行「アルゴラニッシュ」、一〇七頁「カトルガ」に譯者の說明が欲しく思ふ。

×

次に本書の內容について簡單に私の感想を敍べる。本書の原著者ヨラン・ノイフェルトは極めて忠實なるフロイデズムの信奉者である。隨て本書に於てノイフエルトは頗る徹底した、さうして、尖銳なる批評家としての面目を遺憾なく發揮してゐると同時に、多少たりともフロイデズムを批判的に觀てゐる精神分析學徒の眼から見れば偏狹であり獨斷的であるのは何とも致し方なき次第である。もしもフロイド先生が此論文にマークを付けたならば、それこそ滿點を付けたであらうと思はれる程ノイフェルトのドストイエフスキー分析の技倆(てなみ)は冴えてをる。シェストフのドストイェフスキー論には大きなメリットがある。彼は夏の日の午後などに雲の峯がむく／＼と碧空に湧上つてくるやうに此偉大な作家の意識にのし上つてくる無意識的欲望團の怪奇な姿を指して「作者の心に湧上るあの入道雲を見よ！」と云つてをる。それは時に作者の心の空の半ばを掩ひかくし遠雷をさへ伴ふことがある。それは時に作者の心の全天を掩ひかくして大雷雨となることがある。一體尋常の天氣と云ふのは晴天のことであるか曇天又は荒天のことであるか？　讀者の心さへ狂ほしくなつて此麼妙な疑問が心に浮んでくる。理性と良識とを以て心の晴天を保たうとする吾等の努力は謂はれなきものではなからうか、とさへ思はれてくる。シェストフは實に鮮明な作者の心の入道雲のスケッチを幾枚も幾枚もとつて吾等に見せてくれる。シェストフのスケッチは實に効果的ではある。私はすぐにエミール・メナールの「雷雨到森」（'Orage Sur La Foret'）と云ふあの名畫を聯想する位である。けれども彼は――精神分析學の知識のない彼はノイフェルトのやうに何原因によつて作者の心の中にかく入道雲がのし上つてくるのか？　之を明かにせず、又これらの入道雲の形態が略定つてをり且一つの雲と他の雲との間には聯關があつて全體を通じてそこに一つの體制が存することを明にしえなかつた。ジッドは作者の小說中の人物が理(わけ)の分らぬ無償行爲を爲すことに吾等の注意を求めた。けれども彼はノイフェルトの如にその理の分らぬ行

爲にも吾等の無意識にとりては理があることを明快に說明しえなかつた。著者は本書第一部「人間ドストイェフスキー精神の分析」に於て謎の如き性格を有つ作者（著者は詩人と彼を呼んでをる。）の生活を精神分析的研究の光に照らして、「詩人の性格は父への關係によつて特色づけられ、しかも彼の運命と體驗はたゞに彼のエディポス・コムプレクスによつてゐるばかりでなく、言はゞたゞ一にこのものによつて決定されたのである事」を明かにし、「作者の倒錯症と神經症、病氣と創造力、本質と特性、凡てを我々は兩親コムプレクスの上へ、實にこのコムプレクスだけの上へ還元する事が出來た。人間の魂の最も隱密の活動をその作品で照明したこの大詩人は、彼自身永久の子供で、その魂は父に對する愛と憎しみの間を、尊敬と輕蔑の間を、また犧牲の喜びと殺人願望との間をあちらこちら曳摺り廻はされるのであつた。彼が魂の活動に就いて語らうと、或ひは感情に就いて、愛國心に就いて、或ひは宗教に就いて語らうと、彼の感情、思想、認識、凡てが彼のエディポス・コムプレクスに基づいてゐるか、又はそれに流れ込むのである。人間の運命はそのエディポス・コムプレクスだと言ひ得る。況んやその人が、ドストイェフスキーのやうに神經症者である場合には、その運命は、倘更このコムプレクスに依つて決定されるのである。」と結んでをる。

　第二部、「ドストイェフスキーの作品分析」に於て著者は「一、幼兒性感の描寫」「二、初期作品中のエディポス」「三エディポスの鬪爭」「四、エディポスへの還元」の順序へ原著者がかゝる見出しを附けてゐるわけではないが）を以て作品と彼のコムプレクスとの關係を明にしてをり、「エディポス」の永久のメロディーは彼の仕事の何れの中にも「相變らず我々に聽き取られる。母なる大地ロシヤへの愛、神＝皇帝＝父の法則に對する畏敬、母なる正統派教會への歸依、これ等のメロディーが凡ゆる變曲となつて響いてゐる。」と書いてをる。私はこゝでドストイェフスキーが「青年」の主人公に「寢ても醒めても私は父に膠着してゐ

た。私の夢はどれも彼に結びつき、普通は專ら彼に關してゐたか、さもなくば結果に於て彼との事に終つた。私は彼を愛してゐるのか憎んでゐるのか、自分でも分らない」と告白させてゐることを知つて吃驚したことであつた。

×

第三部「分析家としてのドストイェフスキー」に於て著者は「脱線的で、破倫的で不調和な性格――かゝる精神病がドストイェフスキーのあの奇怪な主人公等を構成してゐるのだ。唯の一人も精神的な健康者はなく、一人と雖も普通の生活を生活する者はゐない。狂暴な無拘束な衝動が、彼等の行爲を左右してゐるのだ。これ等の衝動は言はゞ無意識を讀者に示し、彼等の精神生活の最も珍奇な祕密を讀者に暴露してゐる。ドストイェフスキーはこれ等主人公の無意識の精神生活を描いて、恰も、彼はフロイドより以前に非公式に、精神分析法を發見してゐるかの樣である。人間の魂の祕密に就いての彼の知識は、單に直感的に得られたばかりでなく、彼は屢々意識して、精神分析學が殆んど半世紀後に發見した眞理を語つてゐる。」と書き始めてノイフェルトはドストイェフスキーの作品の中から例を擧げて之を實證してをる。

×

全篇悉く讀者をぞくぞくさせる程に強い興味をそゝる文字ばかりであるが、就中第一部七から一二までの論述は息も吐かせぬまでに讀者の興味を刺戟する。「九、サド・マゾヒスムス」の所など私は全文をここに引用して諸君のお目に掛けたいくらゐである。但、此章の始めに「そこにはサディスムスとマゾイスムスとが混同してゐる事は見逃せない。」と著者が云つてゐるのには贊成し難い。私はそこに打擲される者への同一化による詩人の強いマゾヒスムス的傾向を見逃すことはできない。」と書改めて此章の見出しを「九、マゾヒスムス」と改めたい。

―(完)―

首尾問答

藪の中に筍の生えてゐるのを初めて見た幼兒が、筍の尻尾が出てゐると父親に云つた。父親はあれは尻尾ではない、頭だと説明した。多分この子供は犬の尻尾などから想像してさう云つたのであらうが、父親は先に延びるから頭だと云つたのだらう。併しどちらが正しいか知つてゐるのは筍だけだと「中外日報」紙に出てゐたが、併し筍にだつてそんな事は分らない。とにかく子供は尾を聯想し、成人は頭を聯想したところに心理學的興味がある。子供が尾と云つたのはペニスの意であるらしいことは多くの民俗心理現象から推定される。父親もそれを直觀して抑壓的に反抗的にさう教へたのではなからうか。

資料

綴方による兒童の分析觀察

大東視一

三年の女兒を扱つてゐる中に、某兒が外面から見ては必ずや頭が良い筈であるのに一體に出來が惡く、常にオド〲してゐて仕事が極端に遲いのを發見した。色々當人に聞いたが、一向返事もしない。そこで彼女の無意識を解放し、又同時に他の兒童觀察の一方法として、一級五十五名は「夢」の課題で綴方をやつて見た。その中、「どうしても夢を見ない」と云つて他の課題を取つた者が十九名あつた。最初の目的であつた某兒もその中に入つてしまつたから、當初の計畫は失敗した譯だが、色々の意味で他に收獲があつた。

夢を見ないと云ふ者が十九名を數へたのは甚だ過多であつて、彼等の殆ど全部は見ても記憶しないか、抑壓してしまうかであらう。面白い事にその十九名が大抵成績優等で、劣等生は僅に三四名に過ぎない事である。しかし優等生は理智的現實的だから夢で願望充實する必要がないと云ひ得るかどうか、甚だ疑問である。（勿論、夢を見る優等生はいくらもある。）眞に夢を見ない者は仕方がないとしても、抑壓によつて夢を記憶しない者、又は夢の記述を拒む者は、非常な注意を要する。例の某兒等はその筆頭であらうから、今後何かの方法で夢を語らせたいと思つてゐる。

次に、夢の分類をして見ると――

1. 簡單な願望充足。（面白い遊び、美しい洋服、おいしい食事等から、兎狀式の總代になる事に至るまで、總計十一）

2. 先生への父コムプレクス。（女兒である爲か、明白な形に於る父コムプレクスは甚だ少く、先生が父の代償となつてゐる場合が二つ見られたのみである。）

3. 養子空想に關するもの。（自分が他の家に寢てゐると云つた物の外に、人さらひに取られると云ふのがある前者一、後者三）

4. カイン・コムプレクス。（兄への復讐。妹が迷子になる、等四）

5. 泥棒に關する物。（自分が泥棒に殺される、が二、泥棒が母を殺す、が一。泥棒といふ觀念が如何に子供を刺戟してゐるかゞ判る。之は父コムプレクスであらう。）

6. お化けの夢。(お化けに喰べられる、狐に刀で殺される等が五、鬼婆に追はれるのが三。お化け、鬼婆あは勿論兩親コムプレクスであらう。)

7. 其他。(川へ墜落するといふのが三つ、劣等感に關する物二。睡眠は死なりとの恐怖を示す物、卒業に對する嫌惡を表はす物、各一。)

この分類は甚だ雜然とした。便宜的な物だが、以上で考へて見ると、この年齡に於る女兒の夢の大部を占めるのは單なる願望充足の外、養子空想(消極的には、家又は母から離されるといふ恐怖)姉妹(カイン)コムプレクス、泥棒及お化けに關する物であらうと云ふ事になる。しかし、全學年の男女を通じての比較硏究によらなくては、確かな事は言へない。

綴方に現れた夢の分析の敎育的效果は、第一はそれを幾回も繰り返へす中に、ある特別に强いコムプレクスを有する兒童を發見し、之に適當な指導を與へ得る事にある。一回や二回の調査では何の意味も出て來ない故、私の試みの效果も將來でないとわからない事と思ふ。參考のため一つだけ實例を擧げて見る。

ゆ め 三年女 吉田カヅヱ

「うちのおかあさんが、あかんぼをうみました。あかんぼはおくのおざしきで、おぎや〳〵とないてゐました。おかあさんはおちゝをやつてだましました。私はあさおきて、おくのおざしきに行つてみたら、あかんぼはゐませんでした。」

兩親健在の長女で成績も良いが、全て他人まかせの甘へつ子で困る。いつもグニヤ〳〵してだらしがない。きいて見ると、今は一人子だが、三年前(卽ち七つの時)赤坊が生れてすぐ死んだ赤坊に母の愛を取られないかといふ恐怖、赤坊の死に對する罪障感が今頃再現するのは彼女が病的にまで甘へつ子である(家ではさうでない)事を相當說明すると思ふ。(母親が職業婦人であるのがそも〳〵の原因らしい。)

自己分析斷片

奥 本 島 田

問題――私の仕事場に私等の仕事を助けて吳れる者が幾人か居るが、その中で私の意にそはない性格の者がゐる。私は彼に辭職することを切に望んでゐたので時折そのことを言うてゐた。辭職の理由とするところは、彼はなまけてゐることと他の者と同一的步調で仲間に居ない

といふことにある。この職務は彼には適せないから他の者にも悪いし、本人としても面白くない。それでやめて他へ轉職した方が良いと思つてゐたものだから私としては當然の道德的の理由で私自身としても彼に、又他の人々にも良いことをいふてゐるのだと私は私自身に辯解してゐたのである。私はどうも彼の態度が氣にくわぬので私の彼に對する自己分析を試みやうとかかつたのであつた。が、うまく分析出來さうにもなかつたが約一週間程以前に出來たのが「投出の分析」であつた。

〔聯想と註釋〕夕方入浴の途中で私と同じ所に勤めてゐる女の家の前を通りすぎやうとしてゐる時、私はその女の顔を思ひ浮べつつ歩いてゐた。さうして勤先で某女に小言を云ふたことを思ひ出して、次の様に分析することが出來た。卽ち、辭職することとの分析である。

私は机に小刀で傷を付けないのだがなー。小刀で傷ついてゐるきたない机、それは私の小供時代のものであつた。昨日私は彼女等の中の誰かがテーブルに小刀で傷つけてゐる跡を見ておこつてゐた。

あー！　さうだ！　私は私と同じ型の女を求めるくせであつた。二年程以前の夢に、私と同じ型の女を求めたい願望があらはれてゐた。

私は勤先で某君を常におこつてゐる。彼は私の仕事を助けることはまじめにやつてゐない（これはかういふのが正しいのかも知れない——彼は彼の職務に熱心でないと）。私と同じ性格の者ではないのだ。で、私は彼に辭職せよと時折言ふてゐるのであつた。（世間には私と同じ性格型のものは一人もないといふことはわかつてゐるが）。

私は私を助けてくれるやうな女性を願望してゐた。「女に生れて來たらよかつた」といふことは、これはとりかへしのつかぬことをした。卽ち、自己型の女と結婚せなかつた、今更とりかへしのつかぬことをした。との意味である。——結婚と死と生とは同一化される。それで生れて來たらよかつたのにとは結婚したらよかつたのにといふ意味である。

〔問題の註釋〕さう！　××××を願望してゐるが出來ないから勤め先で他の私より下の者に轉位してなやんでゐるのだ——私と同型のものでない者（下の者で男女を問はず）で怠けてゐる氣にくわぬヤツを見ると、仕事がいやなら止めたらよいのだ！　といふことの意味はここで私にはつきりわかつてしまつた。もつとも轉位し得る者は類似の對象を大きく見出させるものである。

〔修養〕私は家庭のかたきを他人の中で打つてゐたのであつて、つまらぬことをしてゐたものだが、彼等は迷惑であつたでであらう。私も分析するまでは其眞相を知ら

なかつたが、彼も知らないらしかつた。今後私は彼に對するにはかかる願望を心の深奥にもたないで彼に對し得らるるだらう。

からいふことは筆者のみならず他の人々も亦やつてゐるであらうと思ふ。讀者にして自己分析するか又は分析を受ける力があるならば試みられよ。分析は自他共に幸福への道であると信ずる。

机に傷の聯想

(A) さうだ! 某處でもテーブルに傷つけるので私はおこつたことがある。私の關係してゐるテーブルでねー、又他の處でもテーブルの上でピンポンしてゐたのでおこつてやつた。小學校に居る時皆のものから憎まれてゐた、美しい女の子の机の上を亂棒な上級生がよごれた雜巾でたたきつけてゐたことがあつた。机の蓋をあけて頭つつこんで泣いてゐる生徒。

(B) 父が私に机を買つて來て吳れた時に、母は自分には良いかげんだが、私(筆者)には高すぎるといふので大工に直さしたことがあつた。

(C) 机に對して本を聯想するが、私の父は本を大切にせよとやかましく言ふたものだ。それで今でも私は大切にあつかふのである。が時折いらぬものは破つたり、捨たり(捨る時必ず破るが)、賣るかする。十年程以前に火にくべて風呂を沸かしたこともあつた。

〔註釋(机に傷)〕 前の分析の出發點は机に傷つけるといふことからである。それで机に傷つけることと辭職することとは根元的の關係があることは一見してわかるが辭職をすすめることの願望として分析する中へは註釋をすることは出來ないのである。唯これの重要な役割は家庭に於けることが——結婚生活が、——轉位されてゐるのだといふことを證することである。と同時に現實の不滿のよつて來たる根本をここにもつてゐるのであるといふこともわかるのである。これが夢分析上の不明點で、そのままおいても分析に差支ない點なのである。辭職分析の出發點「私は机に傷しないのだがなー」は白日夢であることは言ふまでもない。

〔註釋(分析=自己の幼児性發見)〕

(問題) 私は家に居る時、又は家へかへつた時にはきつと机の前に坐るのである。さうして本は机の附近に床の間に本棚をおいて入れてある(床に祭つてある)。何でもないのに机に向つて本をくりひろげたりして考へこんでゐる。私自身では時折思ふのであるが——どうしてこんなことに時間を費してゐるのだらう! 何にもならないことだがなーと。

(分析) 私の父は死んでゐることは本棚を床に置いて

本を入れてゐることでわかるであらう――分析者には。

机に傷の聯想でわかつたのであるが、私の心では机は母に、本は父に代償されてゐるのだ。寢る所もその机と本との近くに床をして寢る。ここで理由はわかつてしまつてゐる。卽ち、机を、本を大切にしてゐることと家に居ると机にかぢりついて本をいぢつて考へ込んでゐることは、幼兒時代の家庭生活の失はれたる代償であつて、私は幼兒時代の家庭生活をなしてゐる（願望してゐる）おぼつちやんであつた。（終）

精神分析學と條件反射學

土屋秋實

パブロフの條件反射學は大腦生理學上の見解である。然るにフロイドの精神分析學は心理學であつて生理學ではなく、それはリビドーの科學である。リビドーは生理學的並びに社會學的根據から解明せらるべきものであるが故に、心理學としての精神分析學は生理學と社會學との二支柱の上に建設せられねばならない。何故なれば、精神現象は頭腦を離れては起り得ず、また頭腦は人間の社會的行動（經濟的、性的、文化的、政治的）との關聯なしには理解せられないからである。從つて、條件反射學は生理學的方面から精神分析學を基礎付けるものとして取扱はれるべきであると思ふ。もし反對に、後者を前者に還元すれば、生物學主義に陷り、その結果として精神的乃至社會的現象を生理へ還元する誤謬を犯す危險がある。

條件反射學では精神現象を無條件反射（先天的傾向）と條件反射（後天的傾向）との統一として說明する。精神分析學から見た精神現象もその通りであり、エスは無條件反射に、自我及び超自我は條件反射に大體に於いて相當すると云つてよいであらう。

要するに、心理學、社會學、及び生理學は各々特殊な研究領域をもつと同時に相互に密接に關聯し合つてゐることを忘れてはならない。

（拾壹、六、參）

子供の空想

高水力太郎

或る小學校の先生から三年級の生徒の作文を見せて貰つた。それに將來の希望を書かせたものであつたが、殆ど全部がナルチスムス（とそれに基く誇大妄想）、父への

同一化、先生への父コムプレクスなどが見えてゐる。東郷元帥薨去直後であつたので、東郷元帥への同一化が大分に見られる。

次の一文は巡査の子のものである。如何にもはつきりしてゐて可哀さうなほどである。

「僕は大きくなつたら、おまはりさんになります。さうして、よくけいぶぶ長のいひつけをはつきりまもりどろばうをつかまへるなら一ぺんに五人位つかまへてほめられたいと思ひます。僕は夜、ほかのお友だちがねても、僕はおきてゐて、べんきやうをして日本一えらい人にならうと、いまからかんがへてゐます。けいぶぶ長になつたら、下の人をなぐさめたいと、頭のけからあしのつめのさきまでそれでいつぱいです。」

次のは武藤と云ふ姓の子供で、流石に同姓の武藤元帥に同一化してゐるところを御注意ありたい。

「僕は大きくなつたら、武藤元帥や東郷元帥みたいに一等兵から元帥まで、たまにあたるのもよけて、みくにのために、はたらいて、國をさかんにしようと思ひます。そしてへいたいはもうやめて、いよ〳〵といふまで日本のためにはたらき、うちへかへつて、親孝行になつて、うちのお母さんをよろこばせようと思ひます。」

ところでこの文章を精讀して御覧なさい。何の事やら分らぬところ、しどろもどろのところに却つて本人の願望がほの見えてゐて面白い。「一等兵から元帥までたまにあたるのもよけて……」と云ふのは「自分だけは敵彈を避けることが出來て、一等兵から元帥まで鰻登りに出世する」ことを願望してゐるのだらうと思ふ。さうして結局、お母さんを喜ばせようと云ふ母定着ぶりを告白してゐるわけである。

次の一文は如何。如何にもエディポス的父殺し願望とその罪障感による懲罰(死)願望があるらしく見える。「死なないで」と云ふところにその反對のものが告白されてゐる。

「僕は大きくなつたら、海軍の大將になりたいです。大將になつたら天皇陛下のため忠義をつくして死にたいです。今に大きくなつたら、りつぱな大將になつたつて先生の家に行きますから、どうかそれまで死なないで、まつてゝ下さい。」

次のはまた發明空想症狀を示してゐる。然もそれがみな判然とした性象徴的なものばかりであるのがをかしい

「僕は大きくなつたら發明者になります。月の世界にとぶものをはつめいします。それから土の中をはしるものもはつめいします。それから兵隊さんがつかふ、

すばらしいものまではつめいします。」

また次の夢想の誇大妄想振りも相當なものだが、別荘と云ふのは胎内象徴であるらしく、つまり自分に生を與へてくれた兩親に生命の恩返しをする、即ち救助願望の表現であると分析解釋出來ると思ふ。

「僕は一等はじめによくべんきやうして、大學に入つて、頭をよくして、公爵になつて、お父さんとお母さんに方々へ別荘をつくつて、やつて、不自由なくさせてやります。」（完）

源氏供養

松井定之

安居院の法印が石山寺に參詣に行く途中、どこからともなく一人の女があらはれ、「自分は源氏物語を書いたが源氏の供養をしなかつたので地獄に墮ちた、跡を弔つてくれ」といつていづこともなく姿をかくす。法印は不思議に思ひつゝ石山寺に籠つて經を讀んでゐると紫式部の幽靈が夢幻の中にあらはれ願文を捧げて法印と共に之を讀み、美しい姿で舞を奏でたが法印の夢が覺めると共に消え失せた。これは謡曲『源氏供養』の梗概である。

紫式部が地獄に墮ちたといふ話はこの外、御伽草子の『紫式部の卷』、平康頼の『寶物集』、藤原信實の『今物語』等に見えてゐる。そしてその理由は、「虛言を以て源氏物語を作りたる罪によりて」（寶物集）「空言のみ多くしあつめて人の心を惑はす故に」（今物語）といふやうなことがその中心になつてゐる。

紫式部は源氏物語を書いたことによつて妄語の罪を犯した。物語を創作するといふことは、ありもしないことをあつたやうに述べ立てるのであるから佛教の妄語戒と牴觸するのである。紫式部のやうに物語を作ることを仕事としてゐる人は知らず〳〵の内に妄語の大罪を犯してしまふ、又犯さざるを得ないのである。

紫式部は非常に道德的に立派な婦人で、後世貞女の鑑のやうにいはれてゐる。されば有意識の世界に於て彼女は罪惡を一つも犯さなかつたかも知れない。併しその紫式部も、無意識界に於てはこのやうに妄語の罪を立派に犯してゐた。そしてその無意識界の罪によつて彼女は地獄に墮ちなければならなかつた。有意識界で一生懸命源氏物語を書いてゐる間に無意識界ではこの墮獄の種を蒔いてゐたのである。

もう一つ墮獄の理由が見出される。源氏物語の主人公光源氏は多くの女性との間に戀愛を構成し、色欲の世界

に一生を過した男である。これは精神分析的に見れば、道心堅固な紫式部の抑壓されたリビドーが形を變へてあらはれたものであつて、光源氏の好色は紫式部の無意識界の姿に外ならぬのである。こゝに於て彼女は邪婬戒をも犯してゐる。謠曲『源氏供養』に於て「かの源氏に終に供養をせざりし科により浮ぶ事なく候へば」といつてゐるのはこの意味からである。

映畫『プラーグの大學生』では自己が二つに分裂して有意識の自己の知らぬ間に無意識の自己が惡いことをして歩くのであるが、紫式部の靈もこの分裂を來してゐるそしてその內の一つは有意識界の善行によつて極樂に往生するが他の一つは無意識界の妄語・邪婬の罪によつて地獄に堕される。能樂『源氏供養』にあらはれる幽靈はこの地獄に堕ちた方のものである。

謠曲に於て「魂は陽にかへり魄は陰にのこる」(箙)とか「魂は善所に赴けども魄は修羅道に殘つてしばし苦しみを受くるなり」(朝長)とかいふのはこの靈の分裂を指すのである。魂は有意識の自我、魄は無意識的の自我である。卽『江口』のシテの遊女は職掌柄知らず〳〵の內に邪婬戒を犯し、『善知鳥(うたふ)』のシテの獵師や『阿漕』のシテの漁夫もこの殺生戒を犯し、『熊坂』のシテは偷盜戒を犯してゐる(これは有意識的にも)。このやうに考へればあらゆる職業に從事するものは皆無意識界に於て多少の罪を犯してゐる。フロイドのいふやうに人間は誰でも自分が考へてゐるより遙かに非道德的なものである。その非道德性によつて地獄に堕ちた幽靈が色々の姿となつて能舞臺に上り、ワキの僧の供養を受けるのであつて、源氏供養の紫式部の幽靈もその一人である。

紫式部が何故地獄に堕ちたかについて昔から色々問題があるやうであるが、精神分析的に考へれば容易に説明がつくのである。(完)

講座

兒童分析觀察法

高水力太郎

五歳になる女兒が、二歳の弟のお湯を使はせて貰つてゐるところを見てゐたが、暫時して付添婦にかう云つた。「どうして（弟に）髪を生やしてやらないの？さうしたら女の子になるでせう？」と。

この言葉は二重の意味に於いて、分析者にまで興味がある。即ち、子供が物事を觀察する仕方が、これに依つて分明すると共に、またその觀察を如何に利用し應用するかも分るのである。從つて我々はそれに依つて、子供を如何に分析觀察すべきか、また如何に理解すべきかを知ることが出來る。兒童を理解するに就いて大きな困難は、彼等が自分の考へるところ欲するところを語ることが出來ないと云ふことである。またそれを云はうとしないことである。何故、云はうとしないかと云ふに、成人たちがそれをさせないし、また自分等に漸次に抑壓作用が起きて來るからでもある。併し子供等としては口述以外の形では、表現と報告とへの傾向は非常に強烈である。何となれば、彼等の本能願望の強烈さが相當に猛烈であつて、内部から外部へ、感傷的・色慾的、並びに攻擊的願望の中間に立つてゐる對象へと、迫まつて行くからである。彼等が兩親又は周圍の親しい者に向つて何事かを報告するのは、それ故に、本能の滿足を意味してゐるのである。腹ふくるゝ思ひを醫するためである。堪え難き本能的緊張を緩和するためである。幼兒的心理がその重荷を下すことを意味してゐる。屢々また、共通的享樂への要求、即ち誘惑を意味してゐる。併し禁斷力があるために、表現に歪みが生じ、一方表現力と他方に禁制力との葛藤の結果、中間形成、即ち妥協となつて現れる。成人に於いてもさうであるが、子供に於いてもやはり同樣妥協形成は常に相反する諸勢力の間から生じて來るのである。

右に述べた少女の表現「どうして（弟に）毛を生やしてやらないの？ さうしたら女の子になるでせう？」に於いて、彼女の本能的傾向とそれへの禁制とは極めて判然と出てゐる。で、特別にわざわざ臨床分析して見なくても、本來的の本能憧憬を直ちに認識することが出來る。歪みが如何にして生じてゐるかも、直ちに洞觀すること

が出來る。禁制せられたる本能亢奮が歪められて表現せられる過程としては、極めて典型的な場合であると云ふことが出來る。

我々は少女の心持を活寫して見たい。彼女は弟の裸姿を見た。さうしてその時、弟のペニスが見えたので、それに依つて羨望を感じたのだ。彼女は、他の子供がかう云ふ肉體個所を惠まれてゐるのは、甚だ幸福だと考へたのだ。さうして我身をそれにひきくらべて、いやな感じがしたのだ。その結果は激しい攻撃的衝動（弟からこの個所を奪つてやりたいとの、卽ち、我々の術語を用ふれば、去勢してやりたいとの）となつて來たのだ。「彼がペニスを失へば、彼も私と同じやうになる、さうなれば、私も彼も同格である」といつたやうな考へが起きたのである。併し勿論、かう云ふ考へが彼女の意識内に起きたのではない。それは無意識であつたと思はれる。彼女の表現したところのものは、彼女の考への全體を逆にしたものであり、且つ上に轉位したものである。この逆轉と上方轉位との二つは、この場合の表現に於ける。歪みの形式である。この上方轉位に依つて、頭髮がペニスの代償となつてゐる。頭髮の象徵的意義に就いては、旣に明白である。ダリラがサムソンの頭髮を切つた時に、サムソンの男性的な力はなくなつたと聖書の傳說に云はれてゐる。卽ち、肉體下方の亢奮が上方に轉位せられてゐるわけである。また弟に對する憎惡と攻撃慾とは、姉弟愛の故に、また兩親や附添婦がさう云ふ惡意の表現を好まないが故に、變更せられねばならない。切り取つたり無くしたりする代りに、今や「生やしてやる」と云ふ逆の表現が用ゐられてゐる。

以上は分析的の解釋であるが、子供は實際に、男兒でも髮が生えれば女兒になると思つてはゐることはあり得るのである。ところで、この二歲男兒に於いて頭髮はあまり刈つてはなかつたのである。それで、男兒の髮は段々長くなりさうであるのにかう云つたのであるから、その點も注目すべきである。男兒が女兒よりも頭髮の短いことは何時だつて見られることで、必ずしも男兒が裸體になつてゐる時にのみ、特に氣付かれるべきではない。女兒の言葉が歪められざる、直接的な、無難な、無邪氣な言葉であるならば、一日中何時にでも云はれるべき筈であるのに、それが特に弟の入浴中に云はれたと云ふことは、兩者の關係が分離すべからざるものであると推定せしめるに十分であると思ふ。

右はヰインの分析者リヒャード・ステルバ氏の談（『精神分析敎育雜誌』一九三四年十一・二月號）を紹介したものであるが、兒童の分析觀察は常にまづこのやうに、

兒童の言語動作に於いて常識を以て理解し難い點の見えた時それに注意して、その無意識根源を探ると云ふ風に進めるのである。併しそれは云ふに容易くして、行ふにはさう容易でない。兒童を分析觀察することは、成人を分析觀察するよりも容易である場合もあるが、困難な時もある。口の利けない子供でも、分析法を心得てゐればその動作や表情や肉體表現（Organsprache）に依つて判知することが出來る。肉體表現とは最も單純な例を擧ぐれば輕蔑したい事があると、つい唾を吐きたくなる如きを云ふのである。

併し兒童を分析的に觀察し得るためには、まづ自分が分析せられあらねばならない。分析せられざる人に、他人の分析が出來る筈はないのである。從來の本誌にも、殊に第一及び第二の『兒童心理研究號』には兒童分析の具體例が澤山に出てゐるから、參照せられむことを乞ふ。

（完）

精神分析語彙　（廿四）

一、指しやぶり Ludeln, Lutschen,——「拇指をしやぶることはまづ乳呑兒に現れ、また成人するまで、或は一生續くこともあるが、これは口（唇）を以て吸付くのを律動的に反覆することで、その際榮養分をとると云ふことは度外視されてゐるのである。唇自體の一部分、直ぐに間に合ふ今一つの好ましい皮膚の領域たる舌、さては大きな足の拇趾なども、吸付の對象となることがある。同時にまた物を掴みたいと云ふ慾望が起きて來る。これは耳朶を律動的に引張ることゝなつて現れる。さうしてそのために幼兒は他人の身體の一部分（大抵は耳）を同一目的のために掴まうとするやうになることがある。喜びの吸付の時は必ず總ての注意を集注するやうになりやがては睡眠に、又は運動的反應を起して恍惚に導くことさへある。喜びの吸付は身體の特に敏感な部分、例へば乳房、外部性器などを摩擦し接觸するのと結合することも屢々である。この途を辿つて、多くの子供は吸付きから自慰へと到達するのである。」（フロイド「性説三論文」）

一、遊戲——「子供は遊戲を非常に眞劍に行つてゐるのだ。多大の情熱をそれに注いでゐるのだ。遊戲の反對は眞面目（眞劍）ではなく、現實である。子供は遊戲の世界に多大の情熱を纏綿させてゐるのに拘らず、これを現實と截然區別し、またこの想像せられたる對象及び關係を現實世界の手に觸れ眼に見ることの出來る事に寄託するのである。子供の「遊戲」を「空想」から區別するものとしては、この寄託以外にはまだ何もない。」（フロイド「詩人と空想」）

一、遊戲分析 Srpielanalyse ——子供の遊戲してゐるその動作擧措を分析的に觀察してその心理を解釋するを云ふ。

一、誘發的割增 Verlockungsprämie ——「詩人は主我的な白日夢の特質を變更と粉飾とに依つて緩和し、純粹に形式的な

つまり美的な快樂を空想表現の中に提供することに依つて我々を喜ばせるのである。心中にあるより深き源泉からのより大なる快樂を解放するために我々に提供せられるそのやうな快樂を「誘發的割増」又は「豫備快感」と名付ける。

一、誘惑空想 Potipharplantasie —— ポティファーと云ふのはエヂプトの役人の名で、その妻が多淫でヨハネを誘惑したと云ふのは有名な話。その話から由來した命名。

一、幽靈——分析學からは「別我」(Doppelgänger)としての幽靈のみを扱ふことが出來る。それは純粋に心理現象であるから。神祕的な、神靈的な現象としての幽靈は分析學の關與するところではない。「別我」の項參照。

一、ヨーガ(梵 Yoga) ——「結合統一」の意で日本では瑜伽(ユギャ)と音譯してる。瑜伽學派の名。一般には禪定的の修行を意味する。一種の禁慾哲學で、一切の世俗的な事柄から完全に離脱することを要求する。それに依つて信者は宇宙精神と結合することが出來、過去未來及び宇宙組織を觀ることが出來、普通の物的法則からヨーガ信奉者たちを解放するところの種々な神祕的の力を持つことが出來るやうになると信ぜられてゐる。印度に於いては神祕的な洞察力を養ふと云ふことが、大昔からヨーガとして知られてゐる。ヨーガは神人結合の實驗である。それは忍耐的な訓練の上に成り立つ。それに就いて、斷食、姿勢、呼吸、知慧集中、道德的薫陶などは、派に依つて多少づゝの相違がある。ヨーガに對してはフロイドは「文明論」の中でから云つてゐる。「たゞ私としてはシルレル作中の潜水夫の言葉を藉りてから叫びたい。——高くバラ色の空中で呼吸するのは愉快であらう、と。」

一、ヨカステ Jokaste ——エディポスの母の名。ヨカステ・コムプレクスとは母の子に對する愛情、又は廣く鬼子母コムプレクス、又は妖婦愛をも總稱することが出來る。但しフロイドがこの術語を用ゐたわけではない。

一、幼兒性感——生れたばかりの嬰兒に於いては、その精神生活は全部が無意識であつて、その全存在が自我本能としてのリビドーの貯藏庫の如きものであると見られる。それが外部(對象)に向つて放射されるやうになるのは、先づ口唇に母の乳房を含む時からである。それ故に喰慾と性慾とはその起源を一にする。併し嬰兒に於いては、母の乳房と自己の身體の一部(指さき、掌)との間の區別は固より明確に立つてゐるわけではない。やがて口唇から這入つたものは内臟諸器關を刺戟しつゝ、漸次に肛門及び尿道の方に移つて、そこの粘膜を亢奮させつゝその排泄口から排泄せられるので肛門及び尿道の方に性感が發展して行く。遂に尿道から性器に至つて、その主權下に性感が支配せられてから性生活に於ける一人前の人間が出來上るわけである。性器に性感が十分に移つて了はないと、不感症(女)となり不能性(男)となり、性生活に於ける不健全や變態が生ずるわけである。かくの如く、幼兒性感の特徴は三つあるわけである。一、性本能と喰本能とが一つになつてゐること。二、自己色情的で、必ずしも對象を要せぬこと。三、性帶域が口唇、尿道、肛門に分割せられて性

器の主權の未だ確立せず、「多形倒錯」的なること。「多形倒錯」に就ては第二卷第五號語彙欄參照。

一、幼兒の恐怖――「性衝動があまりに極度であつたり、ませてゐたり、或は甘やかされたゝめに始末が惡くなつてゐる子供だけが可怕がる傾きがあるのだ。かう云ふ場合の子供の行動は、成人のと同じやうである。つまり、子供も自分のリビドーの滿足を得られぬ場合には、これを恐怖にかへて了ふのである。またリビドーの滿足を得られないために神經症になる成人は、その恐怖に於いては丁度子供と同じ行動をしてゐるわけである。さう云ふ人は一人では不安なのであり。つまり、自分を確に愛してをり非常に子供らしい方法で自分の恐怖を鎭めてくれると信じ得る人がゐないと不安なのである。」（フロイド「性慾論」）

一、抑壓Verdrängung――現實生活に不都合、或は醜く思はれる願望又は本能的意慾の意識化を妨げる無意識の檢閲作用を云ふ。「自我は、云はゞ最初の衝突時に際して、忌はしい本能亢奮から身を引き、その本能亢奮が意識化し、直接言動となつて發出することを堰止めるのであるが、併し本能亢奮はその際にもやはりエネルギーの纒綿を完全に保有してゐたのである。この過程を私は抑壓と名付けたのであるが、これは全然新發見のもので、これに類したものが嘗て心理生活中に認識されたゝめしはなかつた。これは明かに一種の第一次的な防禦機制であつて、一種の遁逃の試みにも比較され得る。さうして後になつて常態的に起さる判斷胡麻化しの先驅である。抑壓のこの最初の行動に、更にその後の歸結が付加つて行く。……抑壓説は神經症を理解するため大黒柱となつた。（フロイド「自傳」）

――未完――

内外彙報

『精神分析教育雜誌』本年度末號

同誌昨年度終末は五・六號合併號となり、『精神分析と思春期』の特輯號となつてゐる。

一、『青年學生の教師に對する心理』(ジグムント・フロイド稿)—そのエディポス關係を說いてゐる。

一、『思春期問題に就いてのフロイドの見解』リヒャード・ステルパ稿——幼兒性感、エディポス・コムプレクスとその再燃、その崩壞などの諸項目に就いての論究。

一、『思春期に於ける自我とエス』アナ・フロイド——この問題に就いての組織的論文。女史が近著『自我と防禦機制』の一節なりと云ふ。

一、『家族圈よりの離脫』エラ・フリーマン・シャープ（ロンドン）——思春期に於いて青年がその幼兒期の母胎なりし家族圈から離反することは一種の再誕生として重大なる心理的意義を有することを實例につきて研究す。

一、『汎性慾說と思春期』フリッツ・レードル（ヰイン）——先づ精神分析學を汎性慾說であると誤解するに至つた人々の契機三つを擧げて、これを辨駁し、精神分析は汎性慾說ではないが、たゞ神經症に於いて性的契機の重要性を認めたに過ぎぬ所以を明かにし、次に汎性慾說と沒性慾說とは結局同一にしてこれを教育に用ゐて同一缺陷を示す所以を明かにす。

一、『單純なる男子思春期に就いて』ジイグフリード・ベルンにしてこフェルド（メントン）——實例についての研究。

一、『思春期に於ける自我組織』カール・ランドウエル（アムステルダム）——四〇頁に亘る大論文で、簡單には紹介し難い。

一、『報告』（精神分析による思春期問題研究文獻表、並びに世界各國の分析教育現狀）

『精神分析教育雜誌』本年度第一冊

本號はヰインの犯罪分析者、教育分析者として有名なアウグスト・アイヒホルンの論文を以て全册を埋めてゐる。フロイド博士八十賀に對する獻本の辭が卷頭に掲げてある。論題を『教育相談相手となるの技法』とし、その內の「轉嫁」問題にその論及が限られてゐる。念のために、その目次を紹介して見る。

一、教育相談相手と兩親

1、リビドー對象としての教育相談相手

2、リビドー關係の導入

3、種々なる兩親型の計畫的感化

(a)エス亢奮の轉嫁に基く働きかけ

(b)兩心の自我への感情移入
(c)兩親は自我を意識的にして貰ひたきこと
4、相談相手中に時々分析的の注意を與へること
二、分析相談相手と子供
1、陽性轉嫁一般の成生
2、依憑及び感傷愛への子供の意識的要求
3、父的權威及び同一化對象への無意識的要求
4、神經症的浮浪兒の轉嫁
5、不良少年の自己愛的轉嫁
6、結　語

『イマゴー』本年度第一册

一、『健康的ナルチスムスと病的ナルチスムスとの區別』パウル・フェーデルン（ギイン）――自信も一種のナルチスムスには相違ないのであるから自信と自惚との區別は心理學的にはなかなか重要な問題である。結局、分析的意識化がその區別を決定すべきであるが、それに就いての經緯を説いて詳細を極む。三十九頁に亘る大論文。

一、『醫學的心理學、或はアカデミッシュ（常態的）心理學』エドワード・グラヴー（ロンドン）――所謂學校心理學に對する精神分析學の立場を説き、それぞれの科學の方向と限界とを明かにしようとした論文。

一、『精神分析と空間』ポール・シルダー（ニウヨーク）――空間觀念と心理狀態との關係を研究せるもの。

一、『自殺行爲の認識（統計的事實材料の心理學的解釋）』L・E・ペラー・ルービセク（エルサレム）――自殺行爲を遺傳、年齡、月經、社會的素因、等の諸觀點から研究し、これ等の觀點からの結論が分析研究の結果と一致することを示したもの。

一、『懷鄕病からの犯罪、その精神分析的説明』ヰルヘルム・ニコリニ――エディポス的齎に依る退行願望のための種々な犯罪實例の調査。

一、新刊批評多數。

『精神分析學辭典』成る

リヒャード・ステルバ博士主任となりて、『精神分析學辭典』の編輯事業のギインに於いて進捗しつゝあることは仄聞してゐたが、この程やうやくこの大業が完成したやうである。三十二頁宛、一ヶ年がゝりで分析する方法を採つてゐるらしい。フロイドはその成果を見て「研究家のために有益な參考となり、それ自身としても美事な出來」(„wertvolle Hilfe für den Lernenden und schöne Leistungen an sich“ と折紙をつけてゐる。

我々の研究所にてもギインに卒先して辭書を編纂したいと

思ひ、本誌に毎號その下準備として「語彙」が附録せられて來たが西洋の方が先に出來たことは、當然とは云へ、また芽出度いことである。

最近國內事實

▼岩倉具榮氏の『精神分析讀本』(大槻氏著) 批評、三月廿九日東京日々新聞、讀書欄。

▼岩倉具榮氏譯、マンスフイールド作小說『春景』――『書物展望』五月號に掲載。

▼『女中復讐事件の再檢討』古澤平作氏稿――讀賣新聞婦人欄。五月一日。

▼『精神分析と文藝の研究』長谷川誠也氏稿――『早稻田大學新聞』五月六日號。

▼「"The Use of Poetry and the Use of Criticism" の中で T. S. Eliot は Shelley の幼稚を指摘し之れを貶した。Herbert Read はこれに對し、その近著 "In Defence of Shelley, And Other Essays" (Heinemann, 10 S. 6d) の中でシエリーを辨護し、同時に Dr. Mac Curdy, Dr. Trigant Burrow の理論を藉りてシエリーを精神分析的に解釋した。シエリーの無意識的な同性愛、その幻覺の傾向、近親愛定着の存在、客觀性の缺乏等の特徴が擧げてある。リードの舊著 "Wordsworth" なども精神分析的考察で、彼にあつて敢て此の方法が珍らしいわけではないが、シエリーの新しい見方として注目してよいであらう。」云々 (『英語青年』六月一日號「英米文學新聲」欄より轉載)

▼『妖婦お定の精神分析』高橋鐵、大槻憲二兩氏談――『都新聞』五月二十四日夕刊。

▼早稻田大學精神分析學研究會春期大學を五月九日、午後一時、早稻田大學文學部敎室に開く。北垣照雄氏の「開會の辭」につぎ、長谷川誠也氏「精神分析と文藝研究」に就きて得意の鬼子母傳說を論じ、次に富田義介氏「何故に精神分析が文學研究に必要か」の題下に斯學の理論的根據を闡明し、第三に高橋鐵氏登壇し、「朝から夜中まで」の題下に、人間の一日の生活の各部分が斯學の見地から如何に解釋せられるかを通俗的に語り、最後に北垣氏閉會の辭を述べて、この會を終つたが、聽衆堂に溢れ、甚だ盛會であつた。

▼大槻憲二氏は六月四日、一つ橋學士會館に於いて催されたる丁酉倫理會に於いて『精神分析と倫理』の題下に講演した。來聽者は井上哲次郎博士を最年長者(八十二歲)とし、その他高島平三郎、常盤大定、桑木嚴翼、林博太郎、遠藤隆吉、吉田熊次、大島正徳、桑田芳藏、八田三喜、深作安文等約二十名の諸大家であつた。精神分析學が殆ど官設翰林院の觀あるこの會に於いて講ぜられたことは一つの興味ある事實であると云はねばならぬ。

▼大槻憲二氏は六月六日夜、飛行會館に於ける「人生創造滿十

二年記念講演會」に於いて「精神分析の話」の題下に、少女等が屢々願望と現實とを混融してその區別を立て得ざる心理狀態に陷る所以を說いて、その貞操の危機を誡めた。

▼『ハムレットの分析鑑賞』大槻憲二氏稿――『早稻田文學』(三)六月號。

▼『立身の道』及び『夫婦生活の方法』大槻氏稿――『人生創造』六月號及び七月號。

▼『夜嵐お絹を觀る』大槻氏稿――『中央演劇』六月號。

▼『子供の同性愛とその取扱方』大槻氏稿――『兒童』六月號。

▼『エネルギー經濟學』大槻氏稿――『中央公論』七月號。

▼『干支九星の硏究』大槻氏稿――三省堂發行『エコー』六月號。

▼『女子の愛情生活』霜田靜志氏稿――『兒童』六月號「母の頁」欄。

▼『ハイキングの精神分析』高橋鐵氏稿――『トップ』六月號。

▼『兩性の精神分析』高橋氏稿――『ホームライン』七月號。

▼『資本主義光線を浴びた女性のサド心理』高橋氏稿――『メッカ』七月號。

▼『川柳に描かれた兒童心理の分析』高橋鐵氏稿――『オール女性』六月號。

▼『經濟學者の精神衞生』H・M・フレミング(『カレント・オヴ・ザ・ワールド』誌六月號に紹介)――「(はしがき)經濟學者は何故に心理學――特に新興の精神分析學に無關心なる? 苟も經濟學が人間の行爲を硏究する科學である以上、當然心理學の基礎の上にその理論を組立てなければならぬのに、從來彼等のこの方面に對する關心は單にクラシカルな心理學の分野に限られてゐた。その對象の硏究に於いて新しき心理學の知識を心要とするのみならず經濟學者自身も亦精神分析學的治療を受くべき必要下にあるのである。現代經濟學者に通有の精神病的症狀は、被害妄想と强迫觀念とである。前者は常に自己に危害を與ふべきある對象――社會でも政治でも資本家でも猶太人でも――を妄想していはれなき迄に之を憎惡嫌惡し、後者は劣等感の反動から架空的超人的努力に依つて經濟界の恢復を圖らうとする。獨裁政治の國、共產主義の國の經濟學者は專らパラノイアに冒され、アメリカの如き國の經濟學者は後者に屬する。」云々と。

▼『嘲笑の心理』松村武雄氏稿――『東京日々新聞』五月五日。

▼宮田齊氏は「歐米實際教育に於ける精神分析學的心理學の應用に就て」の題目の下に東京府の昭和十一年度學事硏究費を交附せられた。硏究者の眼目は可及的廣汎圍に亘つて詳細なる材料を蒐集調査するにあるが、なほ延いては純粹學理方面と自ら趣を異にする實踐教育と分析科學の合理的交涉點を闡明しようと努める所存である。この目的の爲に、チューリヒの Oskar Pfister 氏、キインの Anna Freud 女史を始め、英米佛其他の諸國の教育機關と通信を交はす筈である。なほ蒐集し得た資料は出來るだけ本誌を通じて一般讀者に紹介したいと思つてゐる由。(序に、東京府が詮衡の結果此の種の

研究の費用を支辨するに至つたことは興味ある事實と見るべきであらう。）

▼本誌前號內容に關しては、卷頭廣告參照ありたし。

本研究所研究會例會

五月例會は十八日夜、萬世橋驛前アメリカン・ベーカリ階上で催された。食前司會者から、本誌前號所載の「語彙」につき講議があり、食後、新來者（富井正勝氏及び名越正氏）の紹介があつて、續いて研究談に入り、まづ、「ミラーの教育說」に就いて霜田靜志氏その研究を披露せられた。彼はユングの立場に卽して哲學的理想主義をとるもの丶如くである。本號卷頭の論文はその要旨である。

續いて竹田浩一郎氏立つて、「兒童の自己中心性について」述べられた。內觀（意識化）の不可能、關係判斷、綜合能力の缺如、矛盾を感じないこと、現實と遊戲との區別なきことなどを、その自己中心性の特質として擧げられた。それに就いて小山良修氏は「自己中心性とホルモン」との關係を說き、また幼兒期去勢と成長後の去勢との差を說かれた。最後に大槻憲二氏立つて、前月の「教育論」の續きとして「精神分析と道德」に就いて述べられた。道德の功利性と病理性とを論じ、個人道德と社會道德と超道德との三種の別を說かれ、それに就いて霜田氏その他からの二三の質問があつて、充實した會を終つた。

出席者は右言及諸氏の他に、岩倉具榮、平塚義角、高橋鐵、大久保眞太郎、北垣照雄、宮田齊、土屋喜一、小林一、倉橋久雄、塚崎茂明、竹林松代、大槻岐美、伊藤龍朗、內藤梅子の諸氏であつた。初出席者名越氏は特別誌友であるが、目下職務用のために遙々大連から上京中の寸暇を利用して出席せられたものである。

×

六月例會は十五日夜同場所に催された。

食前、司會者からコスターの「語彙」（北垣照雄氏譯）に就いての朗讀と批評とがあつた。また『兒童』六月號に揭げられた竹田浩一郎氏の教育經驗談に就いての討議があつた。食後、新出席者佐藤系子氏（伊藤龍朗氏友人）の紹介があり、續いて長崎文治氏立つて「血文字お定の精神分析」を試みられた。本號所載の論文はその要領である。愛と死との關係を力說せんとするのが、氏の論の中心であるやうに思へる。それに對して、大槻氏もお定の血文字が彼等の間に生れると空想せられた子供の名であらうとの推定を語られ、高橋氏は目下巷間流布せられてゐるお定關係の川柳や諧謔を紹介せられた。その一つは例へば「お定は無罪になるだらう。何となれば、事實無根だから」と云ふが如き・・・。これは機智として相當な出來である。

次に、土屋秋實氏「超自我に就いて」の所論を朗讀して人々の批評を乞はれた。超自我の病理性を社會道德的見地から見たところにその本來の科學的概念性を離脫した誤りがあると云ふ

のが、批評の要旨であつた。それに就いて大槻氏立つて、「精神分析に於ける本能觀の發達」に就いて述べ、その三段の發展とリビドー概念の問題とを闡明した。

續いて田內長太郎氏はオールダス・ハクスリの日本紀行の話を紹介し、塚崎茂明氏は松果腺ホルモンの生殖器發達に對する影響に就いて述べ、七歳男兒の實例寫眞を示した。このやうにして興味ある研學の一夕を終つた。散會九時半。出席者は右言及諸氏の他に立川玄一郎、倉橋久雄、大槻岐美、宮田齊、竹田浩一郎、伊藤龍朗、名越正、大久保眞太郎、北垣照雄、內藤梅子、松井定之、小林一の諸氏であつた。また長谷川誠也、平塚義角、富田議介、霜田靜志の諸氏からは缺席の挨拶があつた。

本研究所講習會例會

五月例會は四日夜、研究所に於いて催す。本日から『快不快原則を超えて』をテキストに用ふることゝなつた。本日は第一回にて、始めて本書の分析學發展史上に於ける意義について司會者から講話があり、第一章を讀了した。第一章は、無意識心理作用が總て快不快原則に基いてゐるとは云へ、それのみでは説明しきれないものあることを明かにしてゐる。

會後ニヒリズムの分析考察が交された。人間は一度はニヒリズムの洗禮を受けなければ（ナルチスムスの崩壞を實感しなければ）足が地につかないと云ふことや、思想上のイムポテンツであると云ふ説や、いろいろ出た。出席者は北垣隆一、同照雄小林一、倉橋久雄、土屋喜一、大槻憲二、同岐美の諸氏である。

×

六月例會は一日夜、同所で催された。『快不快を超えて』の第二章及び第三章を朗讀研究した。朗讀擔任は倉橋、塚崎両氏であつた。朗讀途中でも、阿部定の事が問題になつたが、會後は赤面癖の事、一般社會の分析への誤解に對する分析者の態度の事、雜誌編輯方針の事、生物學研究の必要などに就いて語り合つた。甚だ盛んな意氣の會合であつた。出席者は土屋喜一、北垣隆一、同照雄、倉持久雄、塚崎茂明、進藤俊秀（日大醫科在學）、加藤巳酉三郎、大槻憲二、同岐美の諸氏であつた。

『ドストイェフスキーの精神分析』出版記念會

ノイフェルド原著・平塚義角氏譯『ドストイェフスキーの精神分析』は譯者の處女作であるので、門出を祝する意味に於いて、先輩友人諸氏の發起により、六月五日夜、大阪ビル地階レーンボーグリルにて催す。出席者三十餘名、盛會であつた。食後、司會者から挨拶を兼ねて、平塚氏の仕事と能力とへの推讃の辭があり、續いて、平塚氏の勤務する早大演劇博物館の館長たる河竹繁俊氏を始め、「藝術殿」編輯者として久しく同館に日夕を同じく過ごした大山功氏、平塚氏の同級生にして目下大

學書林の經營者たる藤原肇、舊師日高只一、長谷川誠也の諸氏の祝辭があつて、最後に平塚氏本人立つて謝辭を述べられた。會後、紀念撮映（口繪參照）し、別室にて會談し、程なく三々五々散會した。

フロイド賞金制に就いて

前號所報の通り、フロイド賞金は毎年一回當該年度中本誌所載優秀論文又は譯文に對して贈與することゝなつたが、首席論文に對しては五十圓、次席論文に對しては三十圓を贈與し、別に記念賞牌を添付することゝなつた。本年度賞金贈與論文は本年末に決定せられる。

相談

居候娘の身の上として

問――私は小さい時に兩親に死別れたので十歳頃までは親類中へ轉々としてやられ、十五歳の時やつと東京の叔母の家へ落ちつきました。叔母には私と一つ違ひの娘がありましたが、兩親も揃つてゐる事とて女學校に通つて居ました。私も行きたいのは山々でしたが、兩親のないといふ事を自覺して叔母の命令通り働きました。幸ひ叔父も叔母もよくして呉れ、自分の娘が學校へ通つてゐるのと較べて不憫に思ひ、私には何くれとなく家で教へ込んで呉れました。自分の口からさう申してはをかしいのですが、お裁縫などは女學校を出た從姉よりも私の方が叔母のお蔭で上手だといつも賞められる位になり、其他の事も從姉に負けないやうに勵んで來たので、叔母が留守にしても困らない程度になりました。こんな工合で總ては圓滿に何事もなく過ごして居りました處、或日叔父の快氣祝ひに勤め先の下役の人を二三人招んだ事があります。其時に其中の一人が醉つたはづみに、私の事を妻に欲しいと叔父や叔母にしきりに賴んで居るのです。其席へは從姉も勿論同じやうにお給仕に出たのですのに、從姉には何ともいはず、私にのみいふので元々叔父や叔母の腹では其人に自分の娘をと思つて居た事とて、何ですか氣の毒になつてしまひました。尤も其席では醉つてゐたので、上役の娘さんには戲れては惡いが、女中代りの娘ならばと思つてした事なのでせうが、其後會社で叔父に眞劍に申込んだとの事です。叔父は少し當が外れたのですが、元々物のわかつたよい人ですから、預かり娘の出世になる事ならと承諾したさうです。私は其人には異存はありませんが、折角叔父夫婦の考へて居た事を外してさうですかと其れに甘んじて居られません。まして從姉は私よりも一つ年上で厄介娘の私が先にきまるなど義理にも出來ません。きつぱり斷るべきだと思ひますが、如何でせうか。年は廿三です。（やへ子）

答――貴女は不幸な身の上で叔母様の御一家に世話になられたので、僻みがあると云ふことを先づ自覺なさらなければなりません。感謝の念が意識面にあつてその底に僻みのあることを氣付かないのです。その僻のために、何かにつけて從姉さんに競爭心を起し、さうして從姉をしのいでは心祕かに凱歌を擧げておいでになつたでせう。さう云ふと、そんな事は絕對にないと一概に否定なさることは私には火を見るより明かですが、併しそれは貴女御自身にも實はよくお分りにならない筈で、もしこれを讀んでムカムカと腹が立つて來ることが迅かであればあるほど、私の云ふのが圖星であつたのだとお考へなさい。もしあまり腹が立たなかつたら、却つて私の推察が當つてゐなかつた證據と私は承認いたします。併し貴女は「お裁縫などは女學校を出た從姉よりは……」とか「從姉に負けないやうに……」などと云はれるところに、その根深い競爭心が仄見えてゐます。

×

そのやうに從姉を凌ぎたいと思つてゐられた（さうして實際相當は凌いで來てゐたらしい）ところへ、叔父の下役から、從姉をさしおいて求婚があつたので、貴女の勝利感は愈々確實となり、その反動として從姉（世話になつた恩人の娘）を克服したことの罪障感がやゝ起つて來たらしく見えます。で、その罪障感を自分に醫するために、自分の幸福を自分に拒否し、その代りに自分は感心な娘だと自分自身に褒めてやりたい自己戀愛的なセンチメンタリズムの滿足を得たいと云ふのが、今の貴女の道德らしいですね。併しそれにしても、折角の自分の幸福をもう廿三にもなつてゐるのに今取逃すのもおしいと云ふ氣もするので、どちらにすべきかに迷つて私に相談にお出でになつたと云ふわけでせう？

×

併し、貴方はまづ自分の僻みを分析解消することが必要ですよ。その僻みがある以上、現實のありのまゝの姿が、如實に自分の心の眼に映じないですよ。第一、貴女は叔父叔母がその下役の男に自分の娘を嫁りたいと考へてゐたと云つてゐられるが、それは果して本當でせうか。貴女一人で勝手に考へてゐられることではありませんか。他人を凌がう〱と思つてゐる人は、自分の得たく思ひ、また得られさうになつたものを、他人もまた欲してゐるのだと勝手にきめて了ふことがよくあるものですよ。もしそれが本當としても、それに拘泥してゐるらしいことは叔父叔母に見せない方がいゝです。そんなことに拘泥してゐられることを知ることは、叔父叔母としては却つて不快なものです。從姉の緣談のきまるまで婚約と云ふことにして擧式を延しておいてくれと云はれるのもしほらしいと僕は思ひますが、女らしくケチな想像を他人の事に加へることだけはおやめになる方がいい。さう云ふ想像は結局は貴女の自惚のさせる業です。さうしてその自惚からこそ、貴女の僻みは出てゐるのです。僻みは自惚の變形だと云ふことを悟らねばなりません。

通信

▼若山牧水の歌の分析――「ともすれば君口なしになり給ふ、海な眺めそ、海にとられむ」と云ふ歌の分析を試みよとの編輯部からの御註文に及ばずながら應じて見たくなりました。これは情死願望の抑壓を表はしたものであることは分析常識でありませう。たゞ「口なし」が沈默を表はし、沈默は死の象徴であることはフロイドの「筥選みの動機」にその解釋があります。「海な眺めそ海にとられむ」と云ふのは、主觀の願望を客觀の暴力に投出したもので、作者はそれを半ば意識してゐるところが面白いと思ひます。（岡山、田邊生）

〔編輯部員曰く〕　美事な分析で、敬服しました。但し多少は補筆をしました。

▼私が夢分析を始めた頃には、すぐ解釋つけられるやうになると思つてゐたのでしたが、仲々どうして難かしいものです。二月末頃まで暫らく怠けてゐましたが、只今勉强してゐます。フロイド全集を改めて讀んでゐますが、以前全く齒の立たなかつた、さうしてどうもドグマの樣に感じたのが、段々解つて來ましたし、ドグマでなくなりました。『夢と幻覺』號では奥本さんの論文を大變有益に拜見しました。（久下貞夫）

——附　錄——

兒童の道德的判斷

ピアジェ原著・竹田浩一郎譯

The Moral Judgment of the Child,

by J. Piaget, trans. by K. Takeda

（三）

第一章　遊戲の規則

言語や概念に保存せしめてゐるのと同様に、彼等に課せられたる規則の下に於て、個人的な事柄に就ては、彼等自身の空想を支持しようと（勿論、十分な信念を以て）相當永い間工夫する。しかし儀式と規則との間にこのやうに實質的な繼續はあつても、そのために兩型の行動に性質上の差異の存することを否むことは出來ない。

けれども我々は規則意識の分析を先にやらないで、儀式の事に立歸らう。個人的儀式は、我々が右に論じて來たやうに、發展して多少とも複雜な象徴的意義を帶びるやうになるのは、極めて自然である。この象徴性が出發點となつて、すべての集團的遊戯の規則に關係ある義務的言語・動作的記號の體系となるのだと見なされ得るであらうか？　前揭の問題に關して云つたのと同じく、象徴は記號の出現のために必要條件ではあるが、十分な條件ではないと我々は信ずる。記號は一般的且つ抽象的（任意的）であり、象徴は個人的でそこに一定の動機がある。それ故、記號が象徴に繼いで起るものならば、集團は當人の想像からその一切の個人的空想を拂拭し去り、然る後に規則それ自身と提携する如き共通的義務的影像を造り上げねばならぬ。

ここにいかに個人的儀式と象徴とが規則や記號から相去る遠いものであるかゞ觀察される。尤もまた兒童間に協働が確立されるに從つて前者が後者の方に動いて行きつゝあるのではあるが……。

ジャクリーンは（前述の觀察後）始めてマルブルを見たジャック（二歳十一ヶ月十五日）と遊んでゐる。一、ジャックはマルブルを高い所から一つづつ落す。それから彼はそれらを集めて行つてしまふ。二、ジャックはマルブルを地面の穴の中に並べて言ふ、「僕は小さな巣を造つてゐるのだ。」ジャクリーンは一つを取り、眞似てそれを地中に差入れた。三、ジャックもやはり一つを取り、それを埋めて、その上に土を被せる。彼はそれを掘出して、また最初からやりなほす。次に一遍に二個取つてそれを埋める。それから一時に三、四、五、六個まで、組織的に各々一個づつマルブルを殖やして行く。ジャクリーンはそれを眞似する。彼女は最初一個のマルブルを地上に置き、その上に土をかけ、次に漸進の順序を保たずに、やた

らに二三個取る。四、ジャックはすべてのマルブルを積重ね、その傍にゴム毬を置いて言ふ、「これは球のお母ちやん、これは球の赤ちやん。」。五、彼はまた球を積重ね、土で覆ひ、その土を平らにする。ジャクリーンはそれを眞似するけれどもただ一つだけマルブルを用ひ土を平にせずに覆ふ。彼女は言ふ、「無くなつちやつた。」と。次にそれを掘出して、又やりなほす。

個人的空想或は象徴的意義の總ての要素が他人には傳達されず、その個人のものとして止まつてゐるかは、この例で明瞭であらう。遊戯に想像の要素が加はり始めるや否や、各兒童は他人の想像に顧慮することなく自分の好きな想像にふける。また我々は儀式化せる遊戯型も繼續的に試驗して見たが、そこに如何に一般的方向が缺如してゐるかゞ觀察されるであらう。然るに、相互の模倣が始まるや否や(二の終り及び三の全體)、規則が頭を擡げ始め、各兒童は遵守して多少とも成功したことのある共通秩序を保ちつつ、他者と同じやうにマルブルを埋めやうとする。それ故この最後の位相を生ぜしめるための觀察は自己中心の段階に導いて行くが、この段階中兒童は他人の規則を學ぶのであるが、その實行は自分の好きなやり方でするのである。

共同して行ふ遊戯の以前には正しい意味での規則は存在しないと云ふことを繰返し述べて、我々はこの第一段階の分析を終るとしやう。既に規則性と儀式化された遊戯型があるのであるが、そのやうな儀式は個人の所産であるが故に、自己より優れた或物に對して服從(凡そ規則が出現するには、それが服從を强要するのが特徴であるが)を强要することが出來ない。

第二段階は自己中心の段階である。我々はここに規則の實踐の研究に際して、前に兒童の知的行動を記述するに採用した一つの考へ方を適用することにしよう。結局これら兩者の場合、現象は正しく同一種類のものである。自己中心性は我々には、社會化した行動と純粹に個人的な行動との間の中間的行動の一形式のやうに思はれる。

模倣と言語とによつて兒童は社會化するが、また言語の交換が出來るやうになつてから、成人の思考の全内容が兒童の精神に差迫つて、幼兒は滿一歳以後ある意味で社會化し始める。ところが、幼兒が周圍の成人との間に持つ關係の性質そのものゝために、子供の社會化が（理性の發達を助長する所の）平衡狀態——個人が自らを平等と考へ相互に抑制し合ひ、かくして客觀性に到達し得る協動狀態——に到達することを一時妨げられる。換言すれば、幼兒と成人とのかかはり合ひのその性質そのものゝために、兒童は離れた立場に置かれる。かくして兒童の思考は孤立化し、他のすべての人の觀點と同じ觀點に立つてゐると信じつつも、事實において彼は彼自身の觀點に閉籠められるやうになる。幼兒を縛つてゐる社會的結末そのものは、外部から見て如何に堅く見えてゐようとも、このやうに無意識な知的自己中心主義が含まつて居り、更にそれはすべての幼稚な頭腦力に特有な、自發的自己中心主義に依つて更に助勢されてゐるのである。

遊戲の規則に關してと同じく、我々は兒童に於ける社會的遊戲の第一歩が長期の自己中心主義によつて特徴づけられてゐることを容易に觀察し得るのであるが、これはまたこの道の權威者*が我々以前に旣に氣づいた所である。一方に於て、幼兒は外部から課せられた規則と慣例との全部によつて支配される。しかし、他方に於て、年長者に對してまだ平等の足場に立つことが出來ないとは云へ、彼は周圍の社會的實在中彼が摑み得たものを自己のために（自己の孤立をさへ知らずして）利用する。

註　シュテルンは"Stern: Rsychol. der frühen Kindheit, 4e ed., p. 147 et. 288" の中で幼兒の會話について我々の確立した段階と彼自身が遊戲に關して確立した段階との一致を認めてゐる。

マルブル遊びに限つて言へば、三歳乃至五歳の兒童はたま〳〵遊戲するためには方形を描き、マルブルを方形の中に置き、他のマルブルを打當ててそれを方形から驅逐しようと試み、前以て引かれた線から始めなければなら

ぬ平等を發見する。しかし、彼が觀察した所をかく模倣し、他人と同じやうに遊戯してゐると心から信じつつも兒童は最初には彼の新しい獲得物を自己のために利用する以外のことを考へない。彼は社會的材料を以て個人的に遊ぶのである。これが自己中心主義である。

細々した事實を分析してみよう——

マール（六歳）は我々が彼に與へたマルブルを手に持ち、方形を劃かうともせず、それを積重ね、その積重なりを手で叩く。彼は投げとばしたマルブルを何んらの規則性なく拾ひ上げて、それを傍に置いたり、直ぐに積み直したりする。「何時でもさうやつて遊ぶの？　街上だつたら四角を劃くんだけど。——ぢや、街上でするやうにやつてごらん。——「ぢや僕四角をかくよ！」（彼は方形を劃きマルブルをその中に置いて遊び始める）我々は各々彼の動作を眞似て彼と遊ぶ。「誰が勝つたの？——二人とも勝つたんだよ。——でも誰が一番勝つたの？——……」（マールには分つてゐない。）

ボーム（六歳半）は早速方形を劃いて三個のマルブルを置く。それから附加へて言ふ。「四つ置くこともあるし、三つの時もあるし、二つの時もあるの。——五つの時は？——五つは置かない。六つか八つ置くことはあるけれど。——多勢でする時誰が一番始めにやるの？——僕の時もあるし、他の子の時もある。——誰が始めるかを決める法があるの？——ない。——コシュ（Coche）つて何だか知つてる？——知つてるとも。」だか、彼の行ふことを見ると彼がコシュを一寸とも理解してゐないで、他の遊戯の名稱だと考へてゐることが解る。「僕ら二人の中何方が先にやるの？——小父さん。何故？——小父さんのやるのを見たいからさ。」私たちは暫く遊んでから、私は誰が勝つたか尋ねる。「マルブルに當てた者が勝つたんだよ。——さうか、ぢや何方が勝つた？——僕、それから小父さん。」次に私が四個、彼が二個取るやうにする。「今度は誰が勝つたんだい？——僕、それから小父さん。」我々はまた始める。彼は二個取り、私は一個も取らない。「誰が勝つた？——僕。——ぢや小父さんは？——小父さんは負け。」

レフ（六歳）はメー（の事は後に語るが）と時々一緒に遊ぶやうに言つてゐるが、彼は方形を劃くこともコシュを引くこ

とも知らないで、直ぐに積重ねたマルブルを目がけて「投げ」、躊躇することも我々に顧慮することもなく遊ぶ。「坊やは勝つたのかい？――知らない。でも勝つたんだと思ふ。――何故？――マルブルを放つたから。――ぢや小父さんは？――小父さんも。マルブルを放つたから。」

デザール（六歳）。「坊やは始終遊つてゐるの？――うん、やるよ。――誰と？――一人つきりで。――一人で遊ぶの一等好き？――二人なんかいらないや。一人で遊べるもの。」彼は方形を劃かずにマルブルを集め、その積重ねを目がけて「投げる。」

今度は、習慣的に一緒に遊ぶやうに生ひ立ち同じ家に住んでゐる二人の兒童が二人だけで放つておかれたときどうしてやり出すかを調べてみよう。二人とも男子だが、一人（メー）は現段階の好典型であり、も一人（ウィド）は現段階と次の段階との界目にゐる。それ故これ等兩兒の場合の分析は、彼等がづぶの始めてではないだけに、それだけ一層結論的なものが得られるであらう。

メー（六歳）とウィド（七歳）とは何時も一緒に遊んでゐると斷言する。メーの言ふ所によると、二人は「昨日も遊んだよ。」私は最初メーだけを離して調べる。彼はマルブルを數へもせずに一ケ所に集め、その積重ねに彼の「カシーヌ」を投げる。次に彼は四個のマルブルを密接して置き、五つ目をその上に（ピラミッド型）に載せる。メーは方形などを劃いたことはないと云ひ、次に考直してさう〳〵何時も劃いてゐたと云ふ。「ウィドと遊ぶ時どちらが始めにやるかをどうして決めるの？――一人がカシーヌを放つて、も一人がそれに當てるの。當つたら、當てたものが始めるの。」それからメーは遊び方を我々に示す、彼は距離も投げ方（「ピケット」）をも考慮に容れずにカシーヌを投げ、マルブルを方形から追出すことに成功すると、直ぐにそれを元に戻す。だから遊戯が終ることがない。「何時までもさうやつて續けるの？――變へるために一つ取つて上げるよ。（彼は方形からマルブルを一つ取上げるけれども、それは彼が命中させたマルブルではない。）そして一つだけ殘つてゐる時に止めるんだ。（彼はまた二度目に「投げる」もう一度當ると一つ取るんだよ。」次に彼は「三度目

に當る毎に一つ取る」と言つて實行する。事實メーは、彼が命中させたか否かに關せず、三度投げる毎にマルブルを一つ取上げるが、これは全く出鱈目な規則で、我々がヌーシャテルやジュネーヴで見た如何なるマルブル遊びにも似つかぬものである。それ故これはその場で發明された規則であるが、實際に於て遊戲者が命中させる「タネー」毎に一つのマルブルを取上げるのと似てゐるので、メーは恰も記憶してゐるかのやうな感じがしてゐるのである。それ故、メーのこの遊戲は第二段の典型的遊戲であつて、「勝つ」ことが他人に打勝つことでなくして自分自身で遊ぶことを意味する自己中心的遊戲なのである。

メーに就いて設問を試みた時には居合はせなかつたウィドに今度我々は質問したのだが、彼は方形を劃くことから始める。彼はその四隅に四個のマルブルを、中央に一個のマルブルを置く（メーがやつた置き方はこれの變形であらう。）ウィドはどちらが先に始めるかの決定法を知らず、メーが二人で遊ぶ時何時も行ふと言つてゐたやり方——相手の「カシーヌ」を「タネー」する——については何も知らないと斷言する。ウィドはカシーヌを方形の方へ投げ、マルブルを一つ追出して、それをポケットに入れる。今度は私が投げるが當らない。次に彼が投げてマルブルに一つづつ皆打當てて、その度毎にしまひ込む。彼は更に、マルブルを追出した時には直ぐその後で一回だけ新に投げる權利があると主張する。皆獲得した後で彼は、「僕が勝つた」といふ。從つてウィドはこの說明全體に關する限り第三段階に居るけれども、その後行ふ所はメーと一緒に遊ぶ時、メーのやり方に少しも注意してゐないことを示してゐる。であるから、ウィドは自己的段階と協働的段階との境に居るわけである。

それから我々はメーを呼んで來て、二人の兒童を一緒に遊ばせる。メーは方形を劃き、ウィドは、彼の何時ものやり方に從つてマルブルを置く。メーが始めに遊んで（彼は「ルレット」をやり、ウィドは大抵の時「ピケット」をやる）、四個のマルブルを追出す。「僕はこれで、四回することが出來る。」とメーは附加へる。これはあらゆる規則に反するものであるがウィドはこの言葉を至極當然だと思つてゐる。かくして勝負が續けられる。然し、マルブルは何らの規則もなく氣のままに動かされるが如く、兒童のどつちかによつて方形中に置かれ（規則では各人が「自分のポーズを置く」ことになつてゐる）、

追出されたマルブルは時には直ぐに方形中にまた置かれ、時には當てた者によつてしまひ込まれる。各々は相手に物云ひを出されずに都合のよい場所から投げ、各々は望むだけ何回でも「投げる」(從つて、メーとウィドとが同時に行ふ場合が屢々ある)。

今度はウィドを室から去らせて、メーに究極的に遊戲のやり方を我々に說明してくれと賴む。メーは偶然的に方形の中心に十六個のマルブルを置く。「何故そんなにどつさり?――勝つために。――家でウィドと遊ぶ時にはどのくらゐ置くの?その時には五つ置くけれど、一人で遊ぶ時は澤山置く。」それからメーは遊戲し始め一つのマルブルを追出してそれを傍に置く。私も同じやうに行ふ。遊戲はかくして續けられ、メーと私とは順番が來る每に追出されたマルブルに顧慮せずに投げる(これはたつた今メーが行つた所と背馳してゐる)。メーは最後にウィド同樣方形中に五個置く。私は今度はメー自身が設問の始めに行つたやうに五個のマルブル(四個のマルブルを密着せしめ一個をその上に)を置く。が、メーはこのやり方を忘れてしまつてゐる樣に見える。最後にメーは以前のやうに三回投げる每に一個を取上げて言ふ、「おしまひにするためにかうするんだよ。」

我々がこの例を擧げたのは、同じ家に住み常に一緒に遊ぶやうに習慣づけられた同學年の二人の兒童が、その年齡に於ては如何にまだ少ししかお互を理解しないかを示すためであつたのである。彼等は單に我々に全然異つた規則を敎へるばかりでなく(このやうなことはまだ第三段階全部を通じて起る)、彼らが一緒に遊んでゐると き少しもお互に注意を拂はず、勝負の最中でさへも各々の規則を統べようとしない。事實彼らはお互に勝たうと努めず、單に自己を遊戲に樂ませ、方形內のマルブルを手に入れる、卽ち、自分自身の觀點から「勝たう」と考へるだけである。

かくして我々はこの段階の特質を知る。兒童は自己のために遊ぶのである。彼の興味は、仲間と競爭したり、誰が勝つかを知らうとして共通規則で束縛されたりすることには存してゐない。彼の目的はそれとは異なり、實

は二重であつて、この混合行動こそは自己中心主義の特徴である。一方に於て、兒童は他の子供のやうに、殊に自分らより大きな子供のやうに遊びたいとの力強い希望を抱いて遊ぶ。卽ち、自分の事を、マルブル遊びを正確に知つてゐる尊敬すべき仲間の一人だと感じたがる。しかし他方に於て、彼は自分の遊び方が「正しい」のだと直ぐに自分で信じて（彼はこの點について成人の活動を模倣する時に於けると同樣に容易に自己說得をする）自己の獲得したものを自分のため以外に利用しようとは思はない。彼の快感はまだ單に自己の技倆を進歩させ、投げ方を遂行させることのみから成立つてゐる。これは前段階のと同樣、本質的に運動的な快感であつて、社會的快感ではない。この段階に達した遊戲者の眞の「社會（ソシウス）（相手）」は具體的な同年輩の仲間ではなくて、理想的且つ抽象的な年長者であり、兒童はこの年長者を心から模倣しようと努め、且つこの年長者はその日までに兒童が受け容れた模範の全部を概括するのである。

それ故に、この時期の兒童は元々競爭する氣はないのだから、相手が何をしてゐやうとかまはないのである。遊戲の仲間に現實的の接觸はないのだから、規則の細目には關係ないのである。この段階の兒童が大きな子供の遊びを形式的に模寫することが出來るや否や、眞理を全的に所有してゐると確信するやうになるのはこのためである。各人が各々自己のために遊び、各々「年長者」と交つてゐる——これが自己中心的遊戲の公式である。

遊戲に於ける四歲乃至六歲の幼兒のこの態度が、會話に於ける彼らの態度に如何に似通つてゐるかを見るのは興味深いことである。眞に意見や指圖が取交はされる所の會話も時たまにはあるが、それの傍に、我々は實際二歲乃至六歲の幼兒に於て擬似會話或は「集合的獨語」とも云ふべき特質あるタイプを見る。その會話に於ては幼兒は彼らを刺戟する所の話相手の面前に居ることを欲し乍らも、自己自身のために話してゐるに過ぎない。さてそこでもまた各々はすべてを知りすべてを理解する自己心內の成人に話しかけてゐるが故に群と交つてゐると感

ずるのであるが、そこでもまた各人は「自己」と「社會（ソシウス）」とを切離すことが出來ないのだから自分にのみ關つてゐるのである。

自己中心的段階のこれらの特徴は、またかかる型の行爲に伴ふ規則の意識を分析することが出來て始めて明瞭となるのである。

四、規則の實踐 二、第三及第四段階——七・八歲頃になると遊戲の分野で（兒童間の會話に於てもまたさうであるが）相互を理解する要求が現れる。このやうに理解の必要が感ぜられることが第三段階に入つたことを證する。この段階の現れる基準として、我々は一つの瞬間を捕へる。その瞬間に於いて兒童は他人を負かしたことを「勝ち（贏ち）」(winning)と云ふ言葉で表現したり、また仲間の行ふ所を顧慮せずにマルブルを方形から出しさへすれば勝つたと言つたりしなくなる、その瞬間を捕へるのである。實を云ふと、もつと年をとつた兒童でさへも相手より一つ二つ多くマルブルを出すことを決して重大視してはゐない。それ故に遊戲の本能感情的動機力を構成するものは單なる競爭ではないのである。兒童が勝たうと努力する場合、何よりもまづ共通規則を守りつつ相手と競はうとする。かくして遊戲の特種快感は筋肉的且つ自己中心的快感でなくなつて、社會的快感となる。從つてマルブルの勝負は口頭討論と同じやうな行爲から成り立ち、相對峙する力の相互の評價は、共通規則遵守のお蔭で、すべてのものに認められるやうな結論に到達する。

第三及第四段階間の差異は程度の差異に過ぎない。七歲乃至十歲位（第三段階）の兒童はまだ規則の細目を知つてゐない。彼等は人と共にやる遊戲に對する興味が殖えるに從ひ規則を理解しようと努めるけれども、同一學年の別々の兒童に訊ねてみると、彼等の報告にはまだ宜い加減のものがある。遊戲について最もよく知つてゐると思はれるものを眞似したり、或は（この方がもつと屢々起るが）口論の種となりさうな習慣を除外したりして

編輯後記

兒童心理關係のものとしては第三回目教育關係のものとしては第二回目の特輯であります。この方面には今後益々力を入れたいと思つてをります。材料山積、その取捨に困るほどでありますが、なかなか一時に何もかもするわけには參りません。

×

新執筆者は、陸軍幼年學校に國文學、講じてゐられる松井定之氏だけであります。『源氏供養』とは面白いものがあることです。

大東覩一氏は某氏の匿名であります。

×

大槻憲二氏著『戀愛性慾の心理とその分析處置法』は、眞にお待遠さまでありましたが、やうやくこの七月十日又は十五日頃には出來することになりました。遲れましたゞけに十分に讀みごたへのあるものとなつたことを保證します。

×

岩倉具榮氏のロレンス譯も久しく本誌上で紹介して來ましたが、今度作品社から單行本に纏めて上梓されることになりました。詳細は別項廣告の通りでありますから、御覽下さい。未發表の新稿も大分に含まれてをります。

別項廣告通りフロイド全集第五卷『性慾論・禁制論』が再版になりました。『夢の註釋』も三版になりさうですが、改訂の都合上、暫く品切れのまゝにしておきます。これは譯者の意志で書店の意志ではないのです。平塚氏の『ドストイエフスキーの精神分析』も頗る好評であります。

×

その後の新特別誌友諸氏を御紹介申上げます。

▼東京府下……菅原掌運殿
▼埼玉縣……野地正男殿
▼茨城縣……櫻井義廣殿
▼日本橋區……關　直樹殿
▼小石川區……伊藤龍朗殿
▼澁谷區……林ふさ子殿
▼福井縣……松村誠一殿

▼札幌市…………永井　保殿
▼奈良縣…………乾　太吉殿

×

研究所あてにいろいろ御問合せがあるのは前々からであるが、近來益々それが多くなつて來ましたが、問合せの時にはなるべく問者に於いて返信の郵税を負擔すべきが禮儀でもあり常識でもありませう。分析を學んでゐながら、それくらゐの現實感覺がないやうでは心細い次第と申さねばなりません。尤も、まだこれから學ぶと云ふ人が多いので無理もないのですが…。當所としてはなるべく返信料くらゐはこちらで負擔してあげたいが何しろ數が多いことでうかうかしてもゐられないので悲鳴を擧げる次第。御諒承を乞ふ。

×

竹田氏譯『兒童の道徳的判斷』は前號分のところが行數組違へのために組直しましたので、前號と重複してゐるところがありますが、内容上差間へはないのですから御安心下さい。

★

次號特輯題目は『愛慾葛藤研究號』といたします。

愛慾葛藤の種々相……大槻憲二氏
愛と死の關係………長崎文治氏
愛慾の男女差………北山隆氏
近親愛の生物學的根據…高水力太郎氏
サデイズムとマゾヒズム…某氏

その他種々の計畫があります。愛慾問題は人生の中心でありまた斯學得意の題目でありますので、御期待あらむことを

また特輯關係外のものとは

靈魂二元觀と雙生兒崇拜（オットー・ランク）…延島英一譯
教育者のための兒童分析概論（アナ・フロイド）…宮田　齊譯
兒童の道徳的判斷（ピアジエ）…………竹田浩一郎譯
トルストイの精神分析（オシポー）…………平塚義角譯

などの飜譯が掲載されます。相變らぬ聲援を希望します。

昭和十一年六月二十五日印刷
昭和十一年七月　一日發行
（隔月刊）　定價五十錢（郵税四錢）

編輯及發行　東京市本郷區駒込動坂町三二七　大槻憲二
印刷所　東京市牛込區改代町廿四　理想社印刷所

定價一部　五拾錢（郵税四錢）
半年分　一圓五十錢（送料共）
一年分　三圓（送料共）

御注文規定

●本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。
●御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。
●郵券代用の場合は一割增に願ひます。
●本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

發行所　東京市本郷區駒込動坂町三二七　東京精神分析學研究所　振替口座東京七八八一七番

大賣捌所　東京堂・東海堂・大東館　北隆館・（大阪）福音社

研究所事業案内

一、**分析部**

・神經症治療（ヒステリー、强迫症、恐怖症、妄症想、その他）

・性格改造（惡癖、奇習など現實生活に不適當なる性向にして無意識病根に基くもの）

・客員の診察（分析的又は醫術的）希望の方には、紹介の勞をとるべし

二、**通信分析部**

・分析法は毎日、患者が分析者の許に通ひて、處置を受けるが正當なれど、遠隔の地に居られたり、その他、經濟上、健康上、それの出來にくい人々のために、この部を設く。

・希望者は、その姓名、年齢、病歴、手記、感想、夢の記述などに、料金(十圓)を添へて當研究所にお送り下され度。分析診斷明細書を相當期日の後に送る。手記その他は絶對に他に洩らすことはなし。文字は明瞭に書かれたし。

・擔當者は研究所に御一任ありたし。それ〴〵適當の人々にふり向ける。

三、**教育部**

・當研究所主催の講演會、公開講習會、演劇、その他。

・所員並に客員に對して他より依頼の講演又は講習會。

四、**出版部**

精神分析に關する雜誌及び圖書の出版。

五、**研究會**

・研究の發表とその討議を目的とす。毎月一回、第三月曜夕、　　にて開催その都度通知、

出席希望者に對しては別に資格制限を設けず。會費は食費、會場費、通信費とも出席の都度、六十錢。(但し誌代を申受く。雜誌購讀は會員の義務とす。)

・雜誌のみに依りて研究の發表又は諸般の事業に參與せんと欲する向は特別誌友(直接購讀者)となるべし。

六、**講習會**

毎月一回、第一月曜夜、於研究所開催。當分主としてフロイド著書の精讀。會費二十錢。

學問の世界性とエスペラント

學問は人類全體の共同の財産であつて、決して、一民族や、一國民の私すべきものではない。☆……したがつて、學問上の重要な新發見や新創意は、必ず世界へ發表して、文化促進の助けとするのが、學者の義務である。☆……ところが、その實行上、日本の學者は、一つの大きな困難に行當るのである。それは……

言語の問題である。ヨーロツパの學者達は、自國の言葉であるドイツ語、イギリス語、フランス語等で、その業績を發表してをり、それによつて文化に貢獻してゐる。☆……が、日本人は、日本語が孤立してゐるため、これで發表したのでは、世界に認められるわけにゆかない。そこで、從來は**國辱**を忍んで外國語で發表したものである。科學日本の體面上甚だ情けないことであるが、それだけならば、文化の向上を願ふ者の襟度として、堪へ得るとしても、外國語の習得に、多大の貴重な時間を空費することは、學問を愛する者にとつて、實に惜しんでも餘りあることである。☆……外國語を讀み得るまでになる努力だけでも容易ではないが、讀むためだけに外國語を學ぶことは、まだやむを得ないであらう。そこで、せめて、最も困難な『外國語で書く』努力だけでも逃れる手段はあるまいか。この問題の解決策として、學界の一部に『學習に容易な……

國際共通語エスペラントを學說發表用語とせよ』といふことが叫ばれ、現に活用されてゐる。高象氣象臺は、毎年浩瀚な報告書を、この言葉で出し、多くの醫學者や、理研の一部の科學者達は、その業績の發表に盛んに、これを利用し、全世界の科學界から注目されてゐる。

エスペラントで發表すればエスペランチストでなくとも、ヨーロツパの學者は、自分の專門のことなら、容易に理解し得るから、決して看過される心配はない。☆……語學の素養が相當にあれば、エスペラントで論文を書き得る程度に達することは、さほど困難でないから、日本の……

學者は、すべてエスペラントを學んで、これによつて、人類のために、大いに貢獻すべきである。☆……エスペラントの學習法や學習書の選擇については、日本におけるエスペラント普及、研究の中心機關財團法人日本エスペラント學會（東京市本郷元町）あてに照會すれば、答へてくれるはずである。

ベルグソン著
廣瀬哲士譯

最新刊

夢と哲學

四六判二五〇頁上製
定價金一圓五十錢
送料金十四錢

「夢」とは何か？「哲學」とは何か？

本書こそは「物質と記憶」「創造的進化」に先だつ名著であり、正しくベルグソン哲學に入る最初の階梯である。

夢の研究は有史以前から始められてゐたやうで、實生活に於て甚だ密接な意義をもつてゐた。古代の賢人は夢判斷に優越な人であつたのでも想像せられる。バビロンの古跡から掘出された楔形文字は夢に關するものか、占星術のものであつたとか傳へられてゐる。占星術から天文學が立派な科學として生れることになつたが、未だに夢からは大したものは生れて來てゐない。尠くとも今世紀に入るまでは、夢は情けない昔からの位置であつた。夢によつて衣食する人は――詩人や小說家もこの部類に屬するかも知れない――少くないが、心理學者で眞に實證的研究を徹底させた人はまづなかつた。然るに今世紀に入つてから、夢の研究熱は俄然として擡頭して來たのである。

この興味の活氣づいて來たことの原因として、ベルグソンの夢の研究が認められてゐる。フロイド教授その他のウインナ派の人々は、ヒステリー患者に、苦悶の種や不安のことを告白するやう誘導して、その病氣を治療することを發見し、その煩悶の糸口を多くは夢から得てゐるのである。（中略）ベルグソンの見解はわれらの實證的精神にフロイド教授の說以上に首肯し得られる興味の多いものである。讀者はこのベルグソンの夢の研究を讀んで、恐らく私の言葉に僞りのないことを悟られるであらう。（譯者序文の一節）

笑の哲學 ベルグソン著 廣瀬哲士譯 價二・〇〇 稅・一四

耶蘇 ルナン著 廣瀬哲士譯 價一・五〇 稅・一四

トルストイとドストエーフスキイ メレジュコーフスキイ著 昇曙夢譯 價一・六〇 稅・一四

（出版目錄進呈）
東京九段下

東京堂

振替東京
二七〇番

昭和八年七月七日 第三種便物認可
昭和十一年六月廿五日印刷納本 隔月一回一日發行

IV. Jahrgang, Heft 4, Juli-Aug., 1936. Erscheint zweimonatlich.

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse.“

(Sonderheft für Kinderanalyse)

Inhalt

Preis des Einzelheftes, 50 Sen

Tokio Psychoanalytischer Verlag
327, Dozakacho, Hongo-ku Tokio Nippon.